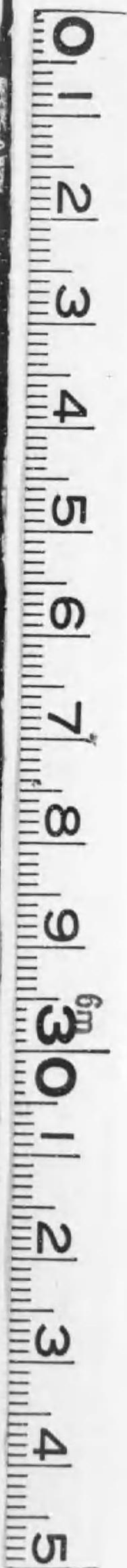


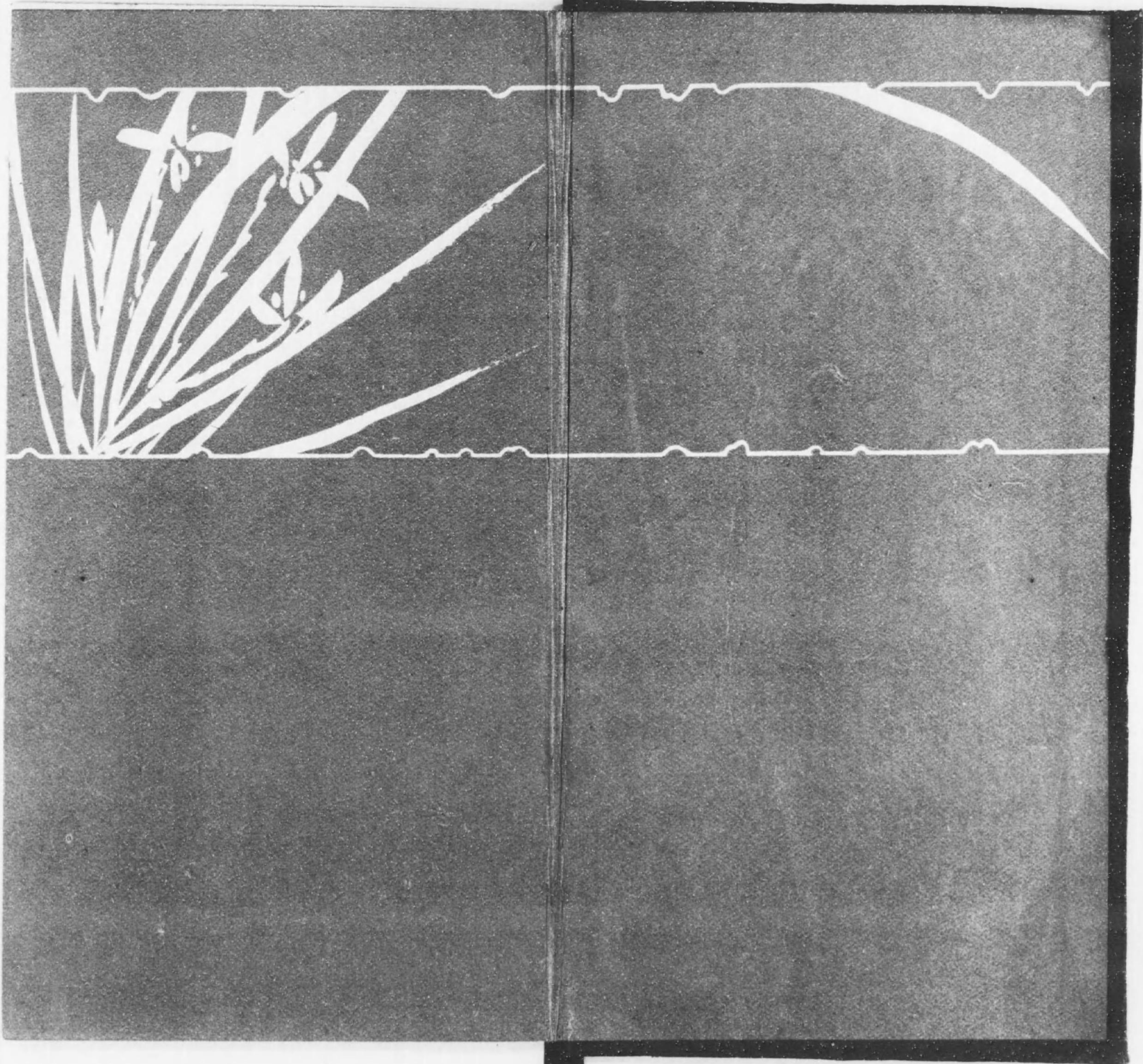


312
190



始





特273
396



加藤咄堂著

論 養 修



忠誠堂發行

自序

修養の要義

修養の要義は己を知るにあり。自己の宇宙に於ける位置、八生に於ける任務を自覺し、此の自覺の根柢に立つて世に處し道を行ひ、我が生存をして意義あらしむ。これ吾等が修養の指針たり。

茫々たる天空、我を覆ひ、森羅たる万象、我を包む。天、高く、地、廣し、而して我や實に是れ微小。此の微小の身を以て茫々たる天空の下に立ち、森羅たる万象の中に居る。我抑も何の價值かある。願れば過去盡くることなく

望めば末來際涯なし。此の悠久なる宇宙の中、我は僅に百歳に満たずして逝く。生前既に天地位し、死後尙ほ萬物育す。天地我あるが爲めに一毫を加へず。萬物我を缺くが爲に一糸を減ぜず。我何の故にか生き、何の故にか存す。己を知るの第一歩は先づ此の生存の意義を明にせざるべからず。

言ふ勿れ、我が身は微小にして我が命や短しと。此の微小の身は直に是れ宇宙の一物。此の短き生命も亦悠久なる時間の一部分にあらずや。一刹那も亦永劫を繋ぐの連鎖たり。況んや五十年の生命をや、一微塵も亦全宇宙の影を宿す。況んや五尺の人身をや。我が存在は全宇宙の存在なり。全宇宙の存在は我が存在なり。一舉手直に宇宙の活動に影響し、一投足直に天地の妙用と相渉る。

微小なりと啣ちしは現相の迷見にして、短しと嘆きしは生滅の妄執なり。

萬里雲なし萬里の天、千江水あり千江の月、現相の裏に本體あり。生滅の奥に不滅あり。不滅の海上生滅の波を揚げ、本體の明月現相の水に映す。吾等は我が存在の意義を明にするに共に、我が迷執多き妄心の祕奥に不斷の靈光宿りて、宇宙の本體と脉絡貫通するものあるを看取せざるべからず。佛家の眞如といひ佛性といひ本地の風光といひ本來の面目といひ、儒家の良知良能といひ本然の性といひ、基督教家の神の囁語といひ、倫理學者の先天内容の聲とし眞我といふもの之れにあらざるなからんや。

萬象悉く歸一する所あり。其の歸一する所に宇宙の本體あり、雜慮妄想、紛々擾々たる吾等の心にも亦歸一する所あり。其の歸一する所に靈覺の明性存す。吾等は此の明性を發揮して此に心裏の統一を計り、此の統一の觀念を提けて我が全生活を統一し、事に處して誤らず、境に應じて動ぜざるの心膽

を鍊養するを要す。

四

吾等の目は天を望むべきも、吾等の足は地を離れず。心を理想の一境に置いて、而かも身は現實の羈絆を離れず。離れずとも雖も心境別に天空海濶の風趣あり。此風趣あるが故に世事葛藤裡に没在して毫も累せらるゝことなく、曾ては外界の爲めに動かされたる我心、今は却て外界を左右して我が心の如くならしむ。これ此の時、乾坤唯だ一人、我は則ち萬象の主となり、又他に瞞せられず。明眼達識、事を未前に察し、變を臨機に施す。政治、文藝、商業、農工の道、行くとして不可あることなし。

我、唯だ一路を行く坦々として嶮なく岨なし、我、唯だ一を守る。此の一定能く萬事に施して應化無礙、受用不盡なり。我が踏む所をして二路あらしむる勿れ。我が心をして二面あらしむる勿れ。泰山我を壓すも雖も、我之れを

守て棄てず。四海我を漂すと雖も、我之れを踏んで避けざる底の主一、これ吾等が認得せざるべからざるの緊要事なり。

我、之れを想うて得ず。念々工夫を忘れず、刻々修養を棄てざることを期し、或は靜坐冥想に實在の源底に觸れんことを欲し、或は讀書文藝に本地の風光を探らんとし、時に社交場裡に其の眞趣を見んとし、時に野人の聲に其の隻影を認めんとす。然かも疎懶の性、未だ之れを得ず。齡、既に不惑に達して懊惱未だ除かず。何の顔あつてか他に向て修養を説かん。唯だ僅に自己に資する所のものを取て又他に資せんことす。造詣、未だ深からず、書を読んで誤多く、文辭、未だ熟せず、筆を執て、意通ぜざるもの少からず。嗚呼四十年來の修養、吾、尙ほ我を知らず。自ら搦らば本書を稿して他の笑を買ふ。其愚及ぶべからず云ふ者ありとも、我將た何の辭を以てか之れに答へん。

五

我夫れ我を知るものか、抑も亦知らざるものか。

六

咄堂居士識

緒言五則

一、修養は行ふべき事にして論すべきものにあらず。本書縷々數萬言、殆んど無用の施設に似たり。雖も、行くものは其の方を知らざるべからず。歩むものは其の道に通ぜざるべからず。方を誤まりて行く。行くも多くして誤ること多く、道に通ぜずして歩む。歩むこと遠くして道を去ること亦遠し。本書は聊か其の行くべきの方を示し、歩むべきの道を指さんとして諸種の論議を試みたり。されど淺學、誤謬の言多く、不識、未通の事少からざるもの罪一に著者にあり。

一、本書想を構へてより幾星霜を経、其の間諸方に講説する所、多く本書構想中の一部分たらざるはなく、今本書を稿するに當り、既に世に公にせられたるの言説少からず。重複する所のものは多く之を省略したれど、尙ほ舊著を引用すること多し。これ一に予の取材廣からず造詣深からざるに因す。深く咎むることなくば幸なり。

一、想を構ふるに久しと雖も、塵務蝟集の中閑を偷んで机に向ひ、稿するに従ひて刻に付

七

せしが故に、推敲精からず、文辭亦蕪雜を免れず。讀者請ふ諒せよ。

一、書中古聖先賢の語を引き又其の行實を擧ぐるに多し。これ著者が瓦礫の如き文中に金玉の聲を識し、修養の資料に供すること多からんを望みたるに歸す。古聖の一言、先賢の一行、皆な之れ我が修養の箴たり、練心の料なり。讀者其の煩鎖を厭ふことなきを望む。

一、第一篇を理論とし、第二篇を方法としたれど、理論の中に方法あり、方法の中に理論あり讀者前者を以て後者を補ひ、後者を以て前者を補ひたまはんことを要す。第三篇は範とすべき四五の例を擧げたるのみにして、其の第五章は全篇の補遺として練心の料を供したるのみ。其の事の斷片的なるは之れに因す。

著 者 識

修養論目次

卷 首 修養の要義

第一編 修養の理論

第一章 緒 論

一 修養の意義 1

新時代の修養 修養の語義 動靜二面 身體と精神 動物としての人 心の三方面 人生の偏執 修養と各方面 修養の圖解 教育とは何ぞ 修養と教育 不斷の修養

二 修養の目的 10

目 次

人格の本質……自由獨立……品性の涵養……般一目的と部分目的……文明と人格……二個の大問題……意志の自由

第二章 性の善悪

一 孔孟の性善説……………一四

東亞倫理の異彩……孔子の性論……人性の四品……子思の性論……子思の修養法……孟子……四端の説……良智良能……寡欲……放心……存夜氣の説……浩然の氣……性杞柳の論……性湍水の論……孟と告子……仁内義外性論

二 荀子の性悪説……………二四

性悪説……偽を習ふ……孟子を駁す……禮……刑名の學

三 性善悪混淆説……………二七

淮南子……董仲舒……善の原質……揚雄の善悪混淆説……劉向の性無惡説……韓退之の三品説……性善情惡説……復性説……性情同一説

四 程朱理氣の説……………三二

五 陸王の心即理論……………四〇

周濂溪……誠は聖の本……張橫渠……天地の性と氣質の性……程明道、程伊川……理氣の説……寡慾……主一無適……仁……朱子……天地の性と大極……性と情……道心と人心……靜坐……夜氣存養……讀書窮理
陸象山……心即理……誠思之……王陽明……知行合一……四句教……良知……致知

第三章 知見と徳性

一 ソークラテース及びプラトーンの學説……………四五

ソークラテース……汝自身を知れ……惡は不知……智即徳、徳即福……プラトーン……イデア……エロース……太陽の譬喩……四徳

二 アリストテレイース及び其以後の學説……………四九

人類の精神……能動理性と受動理性……意志の修練……中庸……ストア學派……不動心……理性……寂靜心……フイーロン……恍惚境……プロローティノス

第四章 罪惡の起源

一 罪惡と自由意志……………五四

人生の思索……神と魔……ゾロアスター……猶太教……サタン……原罪……
基督……信、愛、望……當死罪、當釋罪……内心の正……アウグステイヌス
ミペラギウス……アンセルムス……アマラルドウス……トマス、アクイナス
……ドゥンズ、スコートス

二 佛性と罪惡……………六二

宿業……四聖六凡……惑業苦……忽然念起……熏習……悉有佛性……性徳と
修徳……戒定慧……如來の智慧……本源清淨心……内熏と外熏……信仰……
罪惡と信心……自力と他力

第五章 自由意志

一 宿命と自由意志……………六九

定業と自由……神の豫定……回々教の宿命説……易……十子十二支……袁了
凡……雲谷

二 自由意志と人格……………七四

デカルトの意志自由説……スピノーザの意志必至説……ライプニッツの制限
的自由説……カントの批判……實踐理性……無上大法……カントの意志自由
説……人格と品位……ヘツケルの意志不自由説……パウルゼンの自由意志説
……自由と必然……人格的意識……精神と國家組織

三 性と自由意志……………八一

性論の歸結……眞我……已むを得ざるの誠……靈性の隠覆……個性の分解

第六章 個性の要素

一 遺傳と個性……………八四

自然の大法……心身の遺傳……人類精神の萌芽……發生の階段……本能とは
何ぞ……本能の解……第一本能……第二本能……人の地位……普遍遺傳と特
殊遺傳……四稟質……四稟質の特解……直接遺傳と間接遺傳……ダーウキン

ミライズマン

二 家庭の薰陶 九二

遺傳と家庭 家庭の影響 偉人と賢母 偉人と配遇者 謀故殺と家庭 自殺と家庭 父母と犯罪 資産と犯罪

三 社會の感化 九九

個人と社會 社會的遺傳 意識の素材 言語と文字 習慣 流行 輿論 政治法律 横井小楠國情視察の綱格 産業と氣風 宗教と氣風 犯罪と社會 個人の意志と社會

四 風土の影響 一〇四

地と人 東西兩洋の氣風と地理 文明と河流 愛郷心 火山國 地震と氣風 雪と氣風 偉人と山水 山國 平原國

第七章 修養の可能

一 個性と修養

第二編 修養の方法

第一章 理想と現實

一 修養の困難 一三五

宇宙に於ける人 微小觀 無常觀 人口と食物 人生苦觀 不如
意觀 理想と現實

二 現實の悲哀 一三九

存在の否定 青年の悲哀と中年の悲哀 生活難 糊口の途 時代遅

れ……死の逼迫……缺陷の世界……圓滿の心

三 實在の風光 ……………一三三

人生の二面……宇宙と人生……個別の理……變易の相……同一の理……一氣相通す……不變の理……無窮無限……一部分……宇宙の個人……相關の理……宇宙に於ける覺悟……至公至平……言語不到の境……詩的感想

四 宇宙の大道 ……………一四三

一元的傾向……機械論と目的論……超絶的目的論……内存的目的論……宇宙論……宇宙の齊理……宇宙の理想……道とは何ぞ……老子……ロゴス……菩提……平常心是道……至誠

五 人生の本務 ……………一五〇

個人と社會……人と人との調和……仁……人道の本義……祖先の恩澤……人生譬喩……生存の意義……道を行ふ……勇の二種……三徳……三毒

第二章 國民道德

一 東西道德の比較 ……………一五五

社會狀態と道德……時代と道德……階級的……縦の道德……無階級的……横の道德……義務本位と權利本位……家族本位と個人本位……家督相續と財産相續……同化力……儒教……佛教……西洋道德……同化の標準

二 國民道德の標準 ……………一六〇

勅語圖解……天壤無窮……歴代の聖徳……君民同祖……忠孝一致……國體の精華……人倫の要旨……孝道……兄弟……夫婦……朋友……恭儉……博愛……義勇奉公……一徳……國民道德の長所

三 國民道德と大道 ……………一七三

國家の使命……自然界の一面……弱肉強食……國際法……共同生活の實……天地の公道……文明の惠澤……戦争……軍人……武士道……武士の心得

第三章 處世論

一 道德の價值 ……………一八〇

倫理の二潮流……善悪の標準……動機論と結果論……心の不完全……神を標
準とす……順理と背理……宇宙活動の三段……自ら知る……善悪の四階段……
……道德と修養……本務の圖解

二 處世と道德 ……………一九五

超越主義……社會的自殺……死道德……活道德……人々以上との關係……
仁義道德と利用厚生……目前の利と永久の利……屏風と商人……商人の道……
……道と利との調和

三 簡易生活 ……………一九九

生計の獨立……清貧と濁貧……勤と儉……知足……ヒューム……貧に處する
の心……家政の經驗……高尚の理想……簡易の生活……負債……衣食住と自
省……簡易生活の福音……眞面目の生活……財を惜む

四 努力生活 ……………二〇六

人文發展の鍵鑰……勤勞と人道……百丈……日々の別……時間の活用……時
間の嚴守……懈怠……水車の喩……シドニスミス……處世の兩面……徒歩

五 趣味生活 ……………二二三

的精神……知足と同上……飛脚の逸話
罪惡生活……法律生活……社會の制裁に基く生活……道義的生活……道義的
生活と趣味的生活……義務と權利……感謝の生活……趣味生活と宗教生活……
……同情……徳、禽獸に及ぶ……天地は趣味の顯現……宗教生活の四段……活
宗教の活面目

第四章 修養法

一 身體の修養 ……………二三三

目的と手段……健康と生活……グラッドストーン……病の十因……横死の九因
……素問……管仲と孔子……素食法……導引法……灌水法……觀念法……吐
納法……病前自ら防ぐ……一些字……十二少……一日の生は一日の利

二 靜坐と修養 ……………二三八

靜坐の必要……讀書觀察と靜坐……智識の整理と靜坐……靜坐の趣味……意

志の鍛錬と静坐……逆境の修養……静坐の功……榮辱と達観……懺悔と静坐
 ……倫理的價値……存想……身體の修養と静坐……坐禪……坐禪の目的……
 悟境……靜的修養の極致……動中の工夫

三 讀書と修養 …………… 二三八

讀書の分類……學習と讀書……學生と新聞雜誌……學識と常識……妄識……
 特別智識と普遍智識……見識……常識修養と新聞雜誌……常識の語義……品
 性修養と讀書……史傳……讀書の快樂……意志鍛錬と讀書……書籍の選擇……
 ……讀破萬卷

四 文藝と修養 …………… 二四六

觀察の三方面……人心の三方面と三種の態度……趣味と品格……肉感と趣味
 ……音樂と繪畫……繪畫と文學……文藝の趣味……文藝と誠實……同情と文
 藝……人格と文藝……忘我と文藝……古武士の風格

五 自然と修養 …………… 二五三

自然の光景……自然を友にす……自然と倫理……自然と教訓……不言の教師

六 社交と修養 …………… 二六一

……交通と文明……旅行の利益……人情の迂餘曲折と旅行……旅行と克己獨立
 開中の得力……社交の祕議……劍道と社交……至誠……人心収攬の祕訣……
 短を見ずし、長を見よ……刀と小刀……大度量……心隨萬境轉……儀容……
 談話

七 修養の道程 …………… 二六七

實行の困難……修養の三道程……發心、決心、相續心……習慣養成に關する
 ペインの注意……ピュボンの力行……善美の習慣……山陽の逸行……禁酒の
 習慣……誠實の習慣……海舟、南洲を評す……小事を忽にせざる習慣……規
 律を守るの習慣……朝起きの圖表……時間の習慣……效過格……フランクリ
 ンの十三日……修身二十則……無碍自在の境

第三編 修養の模範

第一章 聖賢の言行

一 釋迦の言行 二八〇
 釋尊の境遇.....永世の苦.....意志の強固.....降魔の相.....釋尊の金言.....靈
 中の人.....人生の苦惱.....譬喩二則.....釋尊の入滅.....佛教

二 基督の言行 二八八
 キリストの幼時.....舊約の聖經ミナザレの風光.....愛の神.....ヨハネ.....誘
 惑.....傳道.....基督教の根本.....山上の垂訓.....嬰兒の心.....地上の天國.....
 ...一視同仁.....教訓.....救世主

三 孔子の言行 二九八
 孔子の人格.....幼時.....大司寇.....文に武.....夾谷の會.....陳蔡の厄.....逆
 境の福音.....晩年.....修養の徑路.....進學.....道に志す.....三徳.....忠恕.....
 ...内省不疚.....詩と樂.....天命.....脫俗

四 ソークラテースの言行 三〇五
 父母.....軍中のソークラテース.....對話法.....汝自身を知れ.....産婆術.....
 ソークラテースの妻.....クセノハニス.....ソ氏の門人.....獄中のソークラ

第二章 英雄と修養

一 諸葛孔明の人格 三二七
 英雄の修養.....不動明王.....劉備.....南陽の臥龍.....三顧.....魚と水.....大
 蜀.....遺孤を託す.....出師表.....後の出師表.....遺表.....英雄、英雄を知る
謹慎の人

二 ワシントンの人格 三三五
 家庭.....幼時.....言行の規律.....細事の注意.....アレガニー山中.....幼児を
 救ふ.....ワシントンの勇氣.....獨立の戦.....高潔.....人格

三 徳川家康の人格 三三四
 徳川氏.....節儉.....家康の遺訓.....足袋箱.....家康の寶.....石川又四郎の話
忍の一字.....啐啄.....武家法度.....文教.....登譽上人の教訓.....治國の
 要

第二章 文豪の修養

一 蘇東坡の修養

山水と家庭……破釜の聲……文名一代を歴す……轆轤不遇……東坡……皓禪
師と東坡……悟境……讀佛偈……達觀

二 ゲーテの修養

新舊思潮……ゲーテの家庭……智識的要求……放縱の生活……聖書の耽讀……
煩悶……自殺觀……ヴァイマルの故居……伊太利の旅行……シルレル……ファウスト

三 松尾芭蕉の修養

風雅……出家……草庵……古池眞傳……笈の小文……句意……行脚の吟咏……
終焉……昨の發句、今の辭世……嚴格……讀書と交友

第四章 哲人の修養

一 王陽明の性行

性格と學說……天下一等の事……兵を學ぶ……結婚を忘る……邊務八事……
前半生……虎穴に眠る……險夷胸中に滯らす……龍場に於ける修養……良知
の二字……山中の賊、心中の賊……嗽々吟……三言の病

二 スピノーザの性行……
猶太人……和蘭移住……幼時……胸裡の疑團……信仰の動搖……黄金前に在
り……白刃頭上に下る……放逐式……流離困頓……生活の簡易……篤學……
怒る事なし……死後の盛

第五章 修養の教訓

一 偉人の片影

伊達政宗……加藤嘉明……柳澤洪國……伊藤仁齋……山鹿素行……水戸光圀
柳生宗矩……ドリユウ……ウイリヤムピット……アノノルド……チャールズ
ダーウイン……スコット……フツス

二 金言と詩歌

金言の力……修養の課程……聖賢の模倣……詩……和歌……俳句……廻狂寶訓……俚言

三 達人の至言 …………… 四〇六

 園碁の名手……細工人の心得……圓山應舉……敵打ち……堪能の人……藝……
 ……名匠の苦心……名優逸話……致富苦心……家訓

補遺

上 國民的修養

第一章 國民性の觀察

一 國民修養の基礎 …………… 四一三

 治國平天下……四重の關係……家族と國家……國民的修養の根幹……國家と國民

二 國民の同化力

大なる人格……歴史と地理……天孫人種の氣宇……東洋文明と日本……中堅思想……儒佛二教……日本に逆臣なし……勤王の誓約……勤王の聲

三 國民の選擇力

西洋文明と日本……切支丹禁制と銷國……西洋物質文明……世界文明と日本……日本の使命

四 國民の發展力

精神上の發展……有形の發展力……人種の同化……人口の増加

第二章 愛國の意義

一 大國民の氣風

國交……國交の要義……真正の愛國心

二 立憲的道德

依頼の觀念……憲法……憲法尊重の觀念……終始一貫の政策……參政の權

……立憲國民の徳義……多數の意見……法律に従ふは自己に従ふなり

三 國運の發展 …… 四四一

陸海軍……外國の富力と日本の富力……輸出入……發展の餘地

四 個人と地方 …… 四四六

戊申詔書……信義……勤儉……個人生活……地方と國家……地方自治……公共心

中 宗教的修養

第一章 宗教と人生

一 宗教的修養の意義 …… 四五三

宇宙と我……法律的制裁と社會的制裁……良心の制裁……一神と汎神……神の屬性……宗教とは何ぞ

二 宗教の精髓 …… 四五六

第二章 宗教と修養

假定せられたる安心……神の觀念……迷信……宗教の變遷……教祖の聖旨……學問の威嚴……宗教の精髓……人生の事實……宗教の生命

一 向上的修養 …… 四六四

二種の修養……信仰……自力と他力……他力の信……戒律……禪定……教義……懺悔……懺悔の區別

二 向下的修養 …… 四六九

向下的修養の必要……心地開拓の順序……開拓以後の心地……應用自在……向上と向下……向上向下の解……向下的修養の二要件

下 婦人の修養

一 婦人修養の根本義 …… 四七七

男貴きか、女貴きか……生理的差異……社會的地位……心理的差異……女は

弱し母は強し……容姿と心情……貞婦の道……操守……理智の明……女の學問……意志の修養……女の四行

二 婦人の生涯 ……四八七

三時代……處女の尊嚴……結婚……獨身主義……七婦の説……五善三惡……妻たるの道……主婦の心得……家計……寓話……主婦の三大務……胎教……母たるの道……母の力……蔡中郎の女訓

三 婦人の問題 ……四九八

覺めたるか、迷へるか……問題の中心……新らしき女、舊き女……羨むべきか、憫むべきか……生活の獨立……職業問題……嚴なるべきか、寛なるべきか……社會的活動……參政権問題……女たるを知れ

修養論目次畢

修養論

第一編 修養の理論

第一章 緒論

一、修養の意義

新らしき時代には新らしき人物を要し、新らしき人物には新らしき修養を要す。古聖の説き先賢の言ふ所、其の精髓は傳へて以て今人を啓發するに足らざる雖も、時、異にして、用、自ら異り、境、同じからずして事も亦違はざるを得ず。徳を修め氣を養ひ、清風に襟懷を洗ひ、明月に肚裏を爽かにし、樹下石上、靜かに其の閑寂を樂みし古人の修養は、直に以て今人を導くべからず。脱然塵寰の外に立ち一世を下瞰して獨り自ら高うしたりし古人の氣宇は、

修養の意義

新時代の
修養

加藤 咄 堂 著

よし欣慕に値するとも、其の世と没交渉なるに至ては、學んで以て今人の法とすに足らず、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在つて其樂みを改めざるは生活問題の困難ならざる昔に於てこそ行はれたれ。生存競争の激甚なる今日に於ては誰か此の陋巷の君子を顧みむや。今を以て遠かに古を笑ふ能はざるが如く、又古を以て直に今を律すべからず。

剛毅果斷、事に當て屈せざる武士的精神は今人の努めて學ぶべき所なるも、其の殺伐粗豪、身命を輕んずる土芥の如き氣風に至ては斷じて之を避けざるべからず。敬虔の念燃ゆるが如く、熱烈の信、能く人を動かしたる聖者の芳躅は今人の範とすべき所多きも、其の迷妄の熱情は之を蹈むに躊躇せざるべからず。要は當世に處して有用の材となり、新時代の新要求に應じて其の新手腕を試み得べき素質を養ふに在り。如何にして當世に處して有用の材となり新時代の新要求に應じて新手腕を試むべき素質を養ひ得べきか。これ本論主要の問題なり。

修養の語義多端、之を用ふる人々一ならず、暫く其の普通の意を解せんか、英語之をカルチュア (Culture) といひ耕作の義なりと、心田を耕耘して其の收穫を得るの義か、獨語之をビルツング (Bildung) といひ作爲構造の義なりと、人物を作爲し品性を模造するの義と解すべきか。諸葛孔明に「靜以て身を修め儉以て徳を養ふ」の語ありて此の二字を明かすに適す、修養の語本來の意は暫く此の如しとするも、新時代の新修養は又新意味を以て解せざるを得ず。

修養の語義

動靜二面

身體と精神

動物としての人

吾人は僅かに靜、以て身を修め、儉、以て徳を養ふのみを以て足れりせず、進んで動、以て世に處し、勤、以て道を行はしめんとす。此の故に吾人の謂ふ所の修養には靜の外に動あり、儉の外に勤あり、殊に其の修養する所、人格全般に亘るが故に、唯だ其の目的とする所心田耕耘の一面に存せずして別に身體訓練の一面あり。蓋し精神と身體とは共に全圓の内外にして、内より見れば凹の如く、外より見れば凸の如しと雖も、それは觀る者の立脚を同じうせざるにして、圓其の者の二あるにあらず、主觀的に之れを心と呼び、客觀的に之れを身と名く、身心も二元にあらず、精神は身體に影響し、身體は精神に影響す、顔色憔悴、形容枯槁なるものに厭世の悲調を聽くべく、生氣渌洌、身體強健なるものに不斷の奮闘を見るべし。身に病あれば心沮み、心に憂あれば身も亦健かならず。此の二者終に離すべからずせば、彼の古の徒らに身體を惡視し苦行禁欲、食を斷ち體を虐げ、以て精神の慰安を求めんとしたるが如き修養は何の效なき邪道たりし明かなり。人の眼は高く天を望むべきも、其の足は地を離れざるが如く靈は進んで神に近づくべきも、肉依然として獸たるを免れず、獸たりさて何をか慨かん、修養の第一歩は寧ろ善き獸たるに存せざるか。

何をか善き獸といふ。自然の壓迫に遇ふも毫も屈することなく、能く其の境遇に順應して自己の生存を保全し、子孫を蕃殖して天然の命を終るにあり、聞く動物の壽命は其の發育年

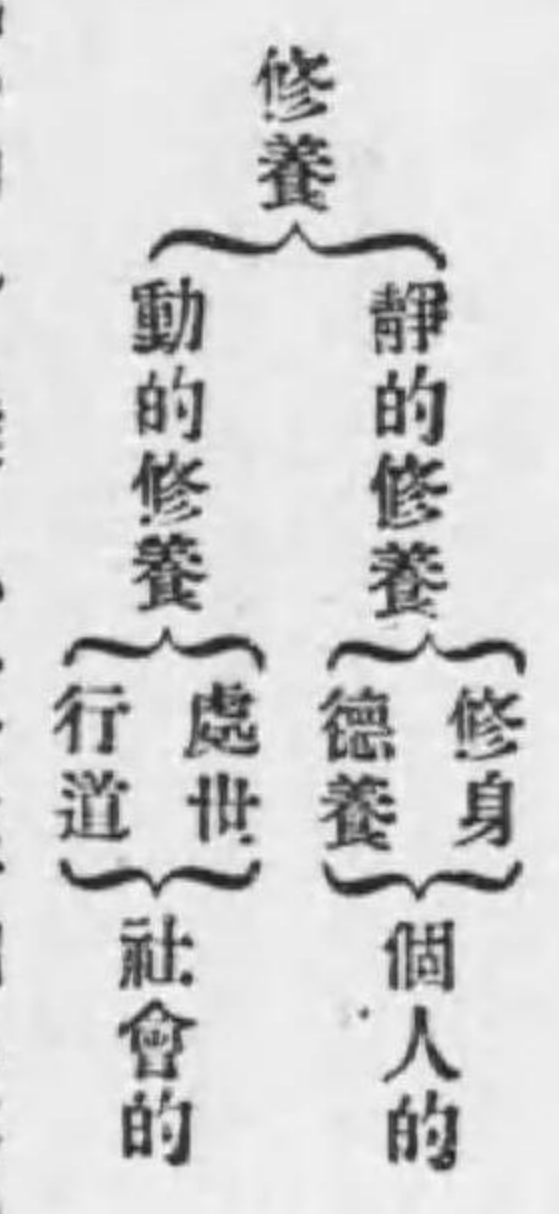
限に四倍若くは五倍すこ、馬の發育年限は五年にして生存年限は二十年乃至二十五年、猫の發育年限は十八ヶ月なるが故に生存年限は九年乃至十年なり、此の原則をして誤なからしめば二十年若くは二十五年を以て發育年限とする人類は百年乃至百二十五年の壽を保つにあらざれば善き獸たるをだに得ざるにあらずや。人生五十、七十は古來稀なりの語の、戰亂多き古代は知らず、太平無事、人は天然の壽を保ち得べき今日に存するは實に人類の屈辱なり。體力の養成未だ成らず、何を以てか善き獸たるを得ん。況んや、剛健なる氣象は剛健なる身體に宿るは身心不二の原則より來る當然の歸結なるをや。吾人は此の身體を看過して修養を談ずることの不可能なるを信ぜざるを得ず。

然れども、人は獸と異らざるべからず、人の人たる所以は獸と離れざる肉にあらずして神に向ふべきの靈にあり、修養の第一歩は之れを獸と離れざる身體に置くも、修養の根底は之れを神に向ふべき精神に置かれざるべからず。身を修むるの本此に立ち、徳を養ふの源、此に發す世にも奇しきは心なり、靈妙にして捕捉し易からず、暫く其の趣向する所を見て之を三方面に分つを以て通則とす、曰く智、曰く情、曰く意、智の求むる所は眞にして趣く所は理にあり、情の求むる所は美にして趣く所は愛にあり、意の求むる所は善にして趣く所は行にあり、此三者其の趣向する所を異にするも、其の本や一、智の趣く所には情意之れに伴ひ

心の三
方面人性の
偏執の

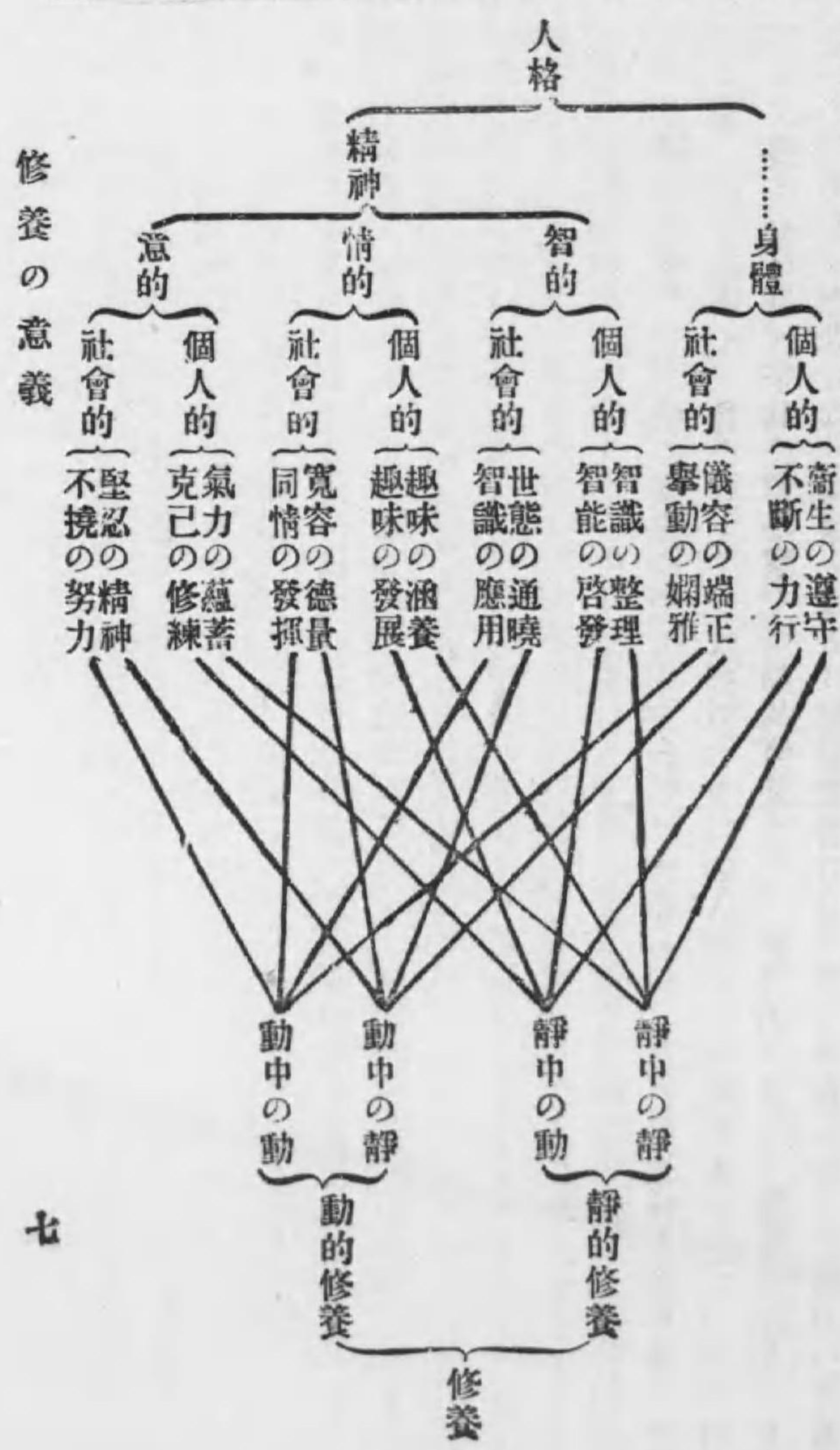
情意の行く所、智も亦之れに隨ふ、此の三者相争ふの時、心内煩悶絶えず、思慮紛雜を免れざるも、此の三者渾然融合、各々其の趣く所に趣き、行く所に行き、しかも相侵さざるに至りて初めて心内安靜、思慮明晰なるを得て修養の功成るべきも、不幸にして人皆偏する所あり或る者は智に偏して情を解せず、唯だ實用の重んずべきを知て趣味の愛すべきを知らず。或る者は理智に盲にして單へに情の走するに従ひ、明快の斷なく、沈重の思慮を缺き、或る者は義理と人情とを思はずして、一意自己の欲する所を行はんとし、頑迷に傾くを顧みず、此の三者皆な不是なり、其の偏せるを矯めて、其の枉れるを直うし、理智に明にして人情に厚く、しかも正を踏んで懼るゝなく、事に當て撓まざるの人たらしむるの要、一に修養の力にあり。

吾人の所謂修養は人格の全面に互るが故に、他の修養を談ずる者が唯だ情意の一面を説て理智を語らず、精神の方面のみ論議して身體を默過するの聲に倣はず、且つ古人の説く所の靜、以て身を修め、儉、以て徳を養ふのみを以て足れりさせず、進んで動、以て世に處し、勤以て道を行ふを目的とするが故に、其の修養にも動あり、靜あり、靜なるものは個人的にして修養を旨とし、動なるものは社會的にして處世を要す。



大要此の如しと雖も、更に仔細に其の要とする所を分類すれば、身體の修養に於て衛生を重んじ健康を保持するは個人的方面の靜的修養にして、屢勉力行、刻苦業を奨むは其の動的修養たり禮貌を正うし儀容を整ふるは社會的方面の靜的修養にして、言語を明快にし舉動を嫺雅にするは其の動的修養たり、智の修養に於ても沈思熟考して自己の知り得たる所を整理するは個人的方面の靜的修養にして、智能を啓發するは其の動的修養たり、世態に通曉し、人情を知悉するは社會的方面の靜的修養にして其の知り得たる所を應用して社會的職務に服するは動的修養たり、情の修養に於ても亦此の二方面あり、自己の趣味を墮落せしめず、武士は食はれど高楊子、貧に處しても改むるなきは個人的なる靜的修養にして、其の向上を計りて文藝に心を寄せ宗教に信を繋ぐは動的修養たり。社會的に發して寛容の徳となるは靜的にして、出で、慈悲となり同情となるは動的修養なり。意の修養に於ては氣力の蘊蓄となり克己の修練となり、堅忍の精神となり、不撓の努力となり、身心相依り、動靜相待つて人格

を完成す、暫く其の概要を圖示せんか。



修養の意義

教育とは何ぞ

こは何人も想ひ及ぶべき修養の各方面に就て分類せるものにして其の詳細に至ては更に慎重の考量を要するものありと雖も、暫く吾人が論議の範圍を此に定め、以て新時代の新要求に應じて新天地新運動を試みるの素質を養ふの方法に及ばんとす。

吾人が論議の範圍、此くの如きが故に、修養の語、又廣義に於ける教育と解するも差支なし、廣義の教育には修養の意を寓し、廣義の修養には教育の義を含む、強ひて其の異なる所を擧ぐれば教育は他働的にして修養は自働的なるにあり。他働的なるが故に教育者と被教育者との別あり、教育は英語エデュケーション(Education)といひ、羅甸のエデュカシオ(Educatio)より出で引き出すの義を有し、獨逸語のエルツイフング(Erziehung)は導き出すの意を有し、共に他によりて引き出され導き出さるゝの義にして、佛のコンペーレは「教育とは人の完全、幸福及び社會的運命を全うするを目的として身體、智識及び道德的諸能力を發達せしめんとして自然を補助する吾人の思想的作業なりといひ、ギューヨーは「最大多數の個人をして完全なる健康を保たしめ、其の心身の能力を發達せしめて人類社會の進歩に協力せしむるにあり」とし、獨のヴァイツは「教育は人の内部生活の陶冶し易き時代に於て具案的に影響を與へて之れに一定の形を備へしめんとするにあり」といひ、英のスペンサーは「完全なる生活に必要な準備をなさしむるにあり」といふ等、各人其の見るところを異にするも雖も、既に教育と

修養と教育

不斷の修養

いふ以上は教育者が被教育者に對する具案的の作業にして、人と人との間に於て行はるべきものなれど、修養は自ら教育するの義にして自働的なるが故に必らずしも教育者と被教育者の對立を要せず。よし教育せらるゝことありとも、一定の人によりて具案的に教へらるゝにあらずして、見聞する所の各人は悉く教育者となつて我が前に現れ、其の取捨一に自己の隨意に任され、且つ其の自己を教育する所のものも亦唯だ人のみに止らず、花紅柳綠、山高氷長悉く來て自己を啓發するの料たり。天空に燦たる星斗も、地上に花咲く一もこの莖花も修養の資たらざるなし。既に教育者に制限なく、其の方法も亦具案的に他より教へらるゝにあらずるが故に、教育は終るの期あるべきも、修養には終るの期なし。小學校より中學、中學より大學、大學を出てゝも尙ほ他によりて教育せらるゝことあるべきも、死に至るまで他にふるものは少し、されど修養は校舎に關せず教師に依らず、一生これ不斷の修養期たり。修養には終期なしと雖も、其の初を云はんか、教育は他によるが故に初て呱呱の聲を放ちしより、否、未だ母胎にある中といへども之れを開始し得べきも、修養は自ら教ふるものなるが故に、少くとも自我の存在を自覺するの齡に達せずんば初め得べきものにあらず、二者此の點に於て其の趣を異にすを見るべきか。其の趣は異なるものありと雖も、其の人格の完成を期し當世に處して有用の材たらしめんとするに至てや則ち一なり。故にいふ廣義の修養には

修養の意義

教育の義を含み、廣義の教育には修養の義を有す。吾人をして更に其の目的に向て思索せしめよ。

二、修養の目的

人格の本質

修養の目的は人格を完成し、當世に處して有用の材たらしむるにあり。此の目的を思索するに當つて先づ人格の何たるやを定めざるべからず。人格とは人たるの資格なり、何をか人たるの資格といふ、彼の禽獸や蟲魚や、能く行動し作爲すも雖も、皆な之れ外界の衝動と稟賦の本能とに由るものにして別に其の目的を認知して、斯く爲すにはあらず唯だ人能く自己が行爲の目的を認知し、其の目的に向て動作せんす、ここに人格の本質あり、人格の本質は自己が自己の意義を自覺し其の價値を認知するに存す、既に自己の意義を自覺し、此の自覺によつて行動して敢て他の干渉を容れず、自己は自己に對して全く自由なり獨立なり、自由なるが故に正邪を判断し理非を考慮し、獨立なるが故に自己又他の爲めに動かされず、既に自由なり獨立なり、自己は又自己の行爲に對して其の責任を辭する能はず、これ人の倫理的價値を有する所以にして禽獸に修養なくして、人に獨り此の修養ある所以なり。獨のヘーゲル曾て教育を目して人をして道徳的ならしむるの術といふ、修養も亦かく云ひ得べきにあ

自由獨立

品性の涵養

らずや。狹義を以つていへば修養は實に人をして善に就き惡を去るの習慣を修め養はしむるにあり。自己自由の判断により善に就き惡を去る、習慣は第二の天性となつて、こゝに其の人の品性を造る、曾ては多少の努力を要したる道徳上の行爲も其の品性の涵養によりては容易に之れを行はしむるに至る、高僧道元が「諸惡莫作、諸惡莫作と行じてゆく中に諸惡造られずなる」といへるもの則ち是れ、習慣は急坂に大石を轉するが如し、其の動かすの初めに當りて多少の努力を要すべきも、既に動けば輾轉止ることなし。狹義に於ける修養の一般目的はこゝにあり。

更に其の目的の部分的なるものを云はんか、前節に圖示せる所のもの皆な之れなりと雖も其の要を取れば身體の剛健と智能の啓發と趣味の涵養と意志の鍛鍊とにあり。



修養の目的

一般的と部分的

而して其の人格を完成し品性を陶冶し身體を剛健にし智能を啓發し趣味を涵養し意志を鍛錬する所以のものは獨り自ら高うせんが爲めにあらずして當世に處して有用の材たるにあり否な寧ろ當世に處して有用の材となつて初めて人格を完成し得べしとするを妥當とす。人類は社會的動物にして社會は共同生活なり、相互に助け相補うて以て自己の生存を完備す、社會を離れては其の生存だも保有する能はず、況んや自己を發展し自己を満足せしむることをや。人類は彼の下等動物の如く無理想に終る者にあらず、常に何等かの手段を以て自己の理想を實現せんとす、此理想實現に對する努力は實に人類をして至高なる動物たらしむる所以にして、獸を離れたる肉身を有しつゝ、しかも神に向はんとする靈能を有する所以のもの又實にこゝに存す。されば徒らに他の曠使の下に服して全く自己の自由と獨立さを傷けられ何の理想もなくして生存する上代の奴隸の如きは未だ以て完全なる人格を有する者といふべからず。君主專制の下には尙ほ幾多の奴隸的人格あるも、現代の文明は之れを許さず、人をして各自の自我を認知して自由なる行動に出でしめんとするは眞にこれ現代文明の目的にして人格の尊重に認められ、人類は皆な自己の自由を傷けらるゝことなくして他の爲めに助けられ、他の人格は又其の獨立を妨ぐるなくして自己の爲めに尊重せられ相互相補うて現代の社會を成し、相共に其の理想の發現に努力して初めて人の人たる實を擧ぐべきにあらず

文明と
人格

るか、吾人が修養の目的的方面あるかといふもの其の理此に伏し、其の一生不斷なるを説くもの亦其の本此に在り。

二個の
大問題

修養の意義并に目的は既に定められぬ。されど尙ほ其の根底に横はる二個の大問題あり、一は性善惡の問題にして、他は自由意志の問題なり。此の二問題に於て解決せらるゝにあらずんば修養の根本義は依然として不明に屬す、人の此の世に於て行動し作爲する所、果して其の自由の意志に出づるか、或は其の自由なりと思惟せるは吾人の誤想にして人の行爲は悉く必然の理法に支配せられ、其の動作は皆な因果の關係に束縛せらるゝにあらざるか。若し悉く必然の理法に支配せられ、皆な因果の關係に束縛せらるゝとせば意志の自由は全く奪却せられて所謂修養なるもの亦、亦無意義に了らんとす、吾人は先きに論述の便を計り、人格の存在を假定して其の自由たるべきをいへり、されど其の自由なるもの亦唯だ自己が斯く思惟するのみにして、其の實、必然の理法が暗黙の間に行はれ、因果の關係が不言の中に現れつゝあるにあらざるか。若し夫れ吾人に自由の意志なく其の行動作爲一に自然の理法に支配せらるゝとせば、如何に努めて修養を契むとも、それは畢竟砂上に樓臺を築かんとするものにして其の事自體に於て徒勞たるを免れず、自由意志有無の問題は直に以て修養の能不能を決すべし。

意志の
自由

修養の目的

し性善惡の問題も亦修養の意義に關して重大なる關係を有す。性善ならば以て其の性を磨くを以て修養の指針とし、性惡ならば其の性を矯めて以て修養の實を擧ぐべし。吾人は修養論議の階梯として暫く此の兩問題に就て研究を試みざるべからず。

第二章 性の善惡

一、孔孟の性善說

修養の根底に横はれる二大問題として性の善惡と自由意志の有無とを査究せむとするに當り、吾人は端なくも此の二個の問題が東西兩洋の倫理史上に於て各々其の一面の研究に向て異彩を放ちつゝあるを看取せざるべからず。東洋倫理史上の中堅問題は性善惡論にして西洋倫理史上の主要論點の一は自由意思有無にあり、請ふ先づ東洋倫理史上に現れたる性善惡論を一瞥して西洋學說の概觀に及び、以て此の問題の一面を決定し、更に進んで自由意志有無の難問に向はしめよ。

支那には自ら二個の思潮あり、一は南方荆楚の學風にして他は北方鄒魯の學風なり。前者

東亞倫
理の異
彩

は理想的超倫理的にして人生問題に就て多く聞くことを得ざるも、後者は現實的倫理的にして先づ人性問題を定めて修養の工夫を語らんとす。前者には老、莊、列の諸子あり、無爲恬淡を旨として超世脱俗を風とし靜的修養に於て吾人を教訓すること多しと雖も、動的修養に至ては殆んど之を口にするこゝなきが故に、其の學說も亦實社會と没交渉にしてこゝに説述するの要を認めず。後者には孔、孟、荀の諸子あり。殊に孔子は此の學風の唱首にして、支那三千載敢て其右に出づるものなき大聖人たり、其の學、仁を本とし忠恕を道とし、修養を説くこと懇切なりと雖も、性の善惡に就ては確説を窺ふに難し、「孔子家語」は孔子の言として傳へていふ、

我れ性の善なるを言はむと欲す、されど人の善に放任して惡たらんことを恐る。我れ性の惡なるを言はむと欲す、されど人皆な仁義を以て性を害すと爲し之れをなさざらんことを恐る。

と、此の語の果して孔子の口より出でたるや否やは遽かに知るべからざれど、孔子は此の問題に關して容易に口を開かざりしや疑ひなし。唯だ「人の生るるや直、之を阿して生けるは幸にして免れたるなり」といひ、又詩を誦して、

天、烝民を生す、物あれば則ある、民の彝を秉るや、此の懿德を好む。

孔孟の性善說

孔子の
性論

人性の四品の

と、云へる等より推して其の性善説なりしを言ひ得べきのみ。蓋し孔子の道は理の査究にあらずして行の至善なるにあり。されば人性問題の根底は暫く之を思索の外に置きて、唯だ常識的に「性相近し、習へば相遠し」といひ、「教ありて類なし」といひて人生は略ぼ相同じきも教養の如何によりて左右すべきを説き、人性の階級を示しては、生れながらにして知るものは上なり、學びて之を知るものは次なり、困みて之を學ぶは其の次ぎなり、困みても學ばざる民、下に下とす。

と四品の差あるを説く、孔子の孫に子思あり、名は依其の學統を祖述して「中庸」を作る其の開卷にいふ、

子思の性論

天の命、之を性と謂ふ、性に率ふ之を道といふ、道を修むる之れを教といふ。と、天の命を以て性とす、之れに率ふを道とす、其の道を示して、誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり。

と説きて、道徳の根本理想を以て誠の一字を出でずとし、誠を體し道に進むの法は善を擇んで之を固執するに外ならじとし、此の善を擇ふに就ては先づ善の何たるやを知らざるが故に博く學び審かに問ひ慎みて思ひ明かに辯ずる學知の必處をいひ、固執利行の法として篤く行はざるべからずとし、人の一たびして能くするものは已れば之を百たびし、人の十たびし

子思の修養法

て能くするものは已れば千たびして怠ることなくんば修養の功を積んで「愚なりと雖も、必ず明に、柔なりと雖も、必ず強ふることを得む」と説く。蓋し博學、審問、慎思、明辯は子思が靜的修養にして篤行は其の動的修養なり。

孟子

孔子に於て其の萌芽を見得べき性善の感想は子思に至りて漸く明かに、子思の門（或はいふ子思の門人に出づ）に孟軻出づるに及びて性善説の旗幟は鮮明に懸けられぬ。孟軻は郷の人なり、孔子に後る、こと百有餘年、「天、若し天下を平治せん」と欲せば、今の世に當て我を捨てて誰ぞや」と四方を遊説して盛んに仁義禮智（殊に仁義）の道を説き、此の道を以て人性の固有と爲し、四端の説を述べて曰く、

人皆な忍びざるの心あり、今、人は孺子の井に入らんとするを見れば皆な怵惕惻隱の心あり、交を孺子の父母に内る、所以にあらず、譽を郷黨朋友に要する所以にあらず、其の聲を惡みて然らざるに非ず、是に由りて之を觀れば惻隱の心なきものは人にあらざるなり、羞惡の心なきものは人にあらざるなり、辭讓の心なきものは人にあらざるなり、是非の心なきものは人にあらざるなり、惻隱の心は仁の端なり、羞惡の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり。（中略）凡そ我れに四端あるは皆な擴して、之を充つるを知る、火の始めて燃え、泉の始めて達するが如し、苟くも能く之を充たしむれば以て四

四端の説

海を保するに足り、苟くも之れを充たしめずんば以て父母に事ふるに足らず。と、仁義禮智の四端、既に我が心に存す、これを修養して發達擴充せしめば以て四海を保つに足るよし、直覺的に性善を示しては、

良智良能

人の學ばざる所にして能くするものは良能なり、慮らずして知るものは良智なり、孩提の童子も其の親を愛するを知らざるなく、長じて其の兄を敬するを知らざるなし。

さて、良智良能の先天的なるをいひ、更に口の味に於ける、耳の聲に於ける、目の色に於ける、人皆な同じく嗜む所ありとの説を根據として本能的に性善説を解明して、

心の同じく嗜む所のものは何ぞや、理と義とを謂ふなり、故に義理の我が心を悦ばすこと猶ほ美味の口を悦ばすが如し。

寡欲

よし、こゝに絶對的性善説を主張す。されど何等の修養なく何等の工夫なくして性善を保持すべしとするにあらず。性は善なり、唯だ物欲の蔽ふ所となつて惡に陷る。されば此の欲を制して本來の性能を發揮するを以て修養の第一義とし、

心を養ふは寡欲より善きはなし、其の爲人に欲寡ければ存せざるものありと雖も寡し、其の爲人、欲多ければ存する者ありと雖も寡し。

と、朱子之を註して「欲は口鼻耳目四肢の欲の如し、人の無き能はざる所と雖も、然も多く

放心

して節せざれば先づ其の本心を失はざるものあらず、學者當に深く戒むべし」といふ、人の性や善、其の本心を放失して初めて惡たり。

牛山の木、嘗て美なり、其の郊を大國に於けるを以てなり、斧斤之を伐る以て美と爲すべし乎、是れ其の日夜の息する所、雨露の潤す所、萌蘖の生するなきにあらず、牛羊又從て牧す、是を以て彼が如く濯々たり、人其濯々たるを見て以爲らく、未だ曾て材あらずと、是れ豈に山の性ならんや、人に存するものと雖も、豈に仁義の心なからんや、其の良心を放つ所以のもの亦猶ほ斧斤の木に於けるが如し、且々にして之を伐る以て美と爲すべけんや。

存夜氣の説

と、其の放心を求むるを以て學問の道とし、夜氣存養の説を立て、修養の道程を指さす、本來の性も亦牛山の草の如く萌蘖の生するなきにあらずも、晝間外物に接するに當りて之れを枯亡す夜間は外物に接せざるが故に本心の萌蘖こゝに長生す、此の夜間清明の氣を存養して、晝間外より來る不善の氣に打ち克つを以て必要の工夫とす。

則ち且晝の爲す、所之を枯亡するあり、之を枯して反覆すれば則ち夜氣以て存するに足らず、夜氣以て存するに足らざれば則ち禽獸と違はざること遠からず、人、其の禽獸を見て以て未だ嘗て才あらずと爲すものこれ豈に人の情ならんや、故に苟くも其の養を得れば物として長ぜざるなし苟くも其の養を失へば物として宿せざるはなし。

浩然の氣

と、夜氣の存養は實に之れ修養の一工夫たり、孟子別に浩然の氣を養ふの説を立つ、何をか浩然の氣といふ、孟子笑へて曰く、
 言ひ難し、其の氣たるや至大至剛、直を以て養ふを害するなくんば天地の間に塞がる。其の氣たるや義と道とに配す、是れなくんば餒う、是れ集義の生ずる所の者、義、襲うて之れを取るにあらず行ふに心に慊らざるあれば則ち餒う。
 と、此の氣たるや多年の積善集義によりて心裡に生ずる道徳上の大勇なり。此の大勇を養ひ以て事に處し道に當るべし夜氣存養説は孟子の靜的修養論にして、養浩然の氣の説は其の動的修養論と見るべきか。

性杞柳の論

孟子の性論并に修養の工夫は上來述ぶる所の如しと雖も、尙ほ一層其の所説を明瞭ならしむるが爲め彼れと告子との對論を擧げんか、告子は「性は猶ほ杞柳の如く、義は猶ほ栝捲の如し、人性を以て仁義と爲すは猶ほ杞柳を以て栝捲を爲るが如し」とするもの、栝捲は杞柳を以て造る所の酒杯の類を指す栝捲は人爲によりて成る、此の人爲に爲る所のものを以て直に杞柳とするは頗る不可なるにあらずや、人性もと善悪なく仁義なし、唯だ人爲によりて善たらしめ悪たらめ得べしとす。孟子之に答へて曰く
 子、能く杞柳の性に順うて以て栝捲を爲るか、將た杞柳を戕賊して後に以て栝捲を爲るか、

性湍水の論

若し將た杞柳を戕賊して以て栝捲を爲らんさせば則ち亦將に人を戕賊して仁義を爲さんとするか、天下の人を率ゐて仁義に禍せんものは必ず子が言か。
 と、反駁して杞柳に栝捲たるの性あるが故に栝捲たらしむべく、人に仁義を爲すの性あるが故に仁義たらしむべしとす。
 告子又いふ性は猶ほ湍水の如きなり、これを東方に決すれば則ち東流し、これを西方に決すれば則ち西流す、人の性の善不善を分つなき猶ほ水の東西を分つ無きが如し」と、孟子、答へていふ。

水まことに東西を分つなしと雖も、上下を分つことなからんや、人の性の善なる猶ほ水の下に就くが如し、人、不善あることなく、水は下らざるあることなし、今、夫れ水は搏て之を躍らせば類を過さしむべく、激しく之を行らば山に在らしむべきも、是れ豈に水の性ならんや、其の勢ひ則ち然るなり、人の不善を爲さしむべき其の性も亦是の如きなり。
 と、性の善なる、水の下に就くが如く、其の不善なるを以て類を過が山に在るが如く本來の性にあらずとす。孟子の論辯、機智縱横、能く告子の論を破るに似たりと雖も、孟子と告子とは立論の根底を異にす。孟子は人の以て禽獸に異なる所の性を立脚地として之れを論じ、告子は人の禽獸と相同じき性を立脚地として之れをいふ。次ぎの問答に於て之れを知るべし。

孟子と告子の

告子曰く「生之れを性といふ」を、こは吾人の知覺運動する所以を以て性を爲すものなり孟子は、

生之れを性と謂はゞ、猶ほ白、之れを白と謂ふが如きか。

と反問す、告子曰く「然り、孟子更に問ふ

白羽の白は猶ほ白雲の白の如し、白雲の白は白羽の白の如きか。

告子曰く「然り」こゝに於て孟子斷じていふ、

然らば則ち犬の性は猶ほ女の性の如く、牛の性は猶ほ人の性の如きか。

と、告子の之れに對する答辯は之れを知るに由なしと雖も、告子が立論の根底より揣摩すれば、こも亦「然り」といふの外なかりしならん。されば告子は更に其の性論を主張して「食色は性なり、仁は内なり、外にあらざるなり、義は外なり、内にあらざるなり」といふ。則ち食色の如き動物的なる本能欲を以て性とす、仁愛の心も亦之れと同じく自然の衝動によりて内より發すとするも、義に至ては之れと異なり、外より來て我が心を律し、之をして事の宣しきに從はしむるものとす、孟子之を難じて、

何を以てか仁は内にして義は外と爲す

と云ふや、告子は「彼れ長にして我れ之を長とす、我れに長あるにあらず、猶ほ彼れ白にし

仁内義外性論

て我れ之を白とするが如し、其の白は外に從ふなり、故に之れを外といふ」白といひ長といふ皆な之れ我が心外の標準によりて云ふものにして、食色の欲、仁愛の情の如く内より來るものにあらずとは告子の思惟したる所なるが如し、孟子更に難じて曰く、

馬の白を白とするは以て人の白を白とするに異なるなし、識らず、馬の長を長とするは人の長を長とすると異なるなきか、且つ謂へ、長するもの義か、之れを長とするもの義かと、長するもの義なるにあらず之れを長とする心内に義ありとす。告子又辯じて「吾が義は則ち之れを愛す、秦人の義は即ち之れを愛せず、是れ我れを以て悦びを爲すものなり、故に之れを内といふ」楚人の長を長とし、亦吾が長を長とす。是れ長を以て悦びを爲すものなり故に之れを外といふ」となす、是れ仁愛は内存的にして義を以て外來的とするもの、孟子又之れを駁して、

秦人の炙を嗜むは以て吾が炙を嗜むに異なるなし。夫れ物も亦然るものあり。然れば則ち炙を嗜むも亦外にあるか。

と、楚人の長を長とし、吾が長を長とするの義を以て外來的とす、然らば秦人の炙を嗜み吾も亦炙を嗜むが如き食色の欲をも外來的となすかと、言は告子の自家撞着を責むるに似たりと雖も、立論の根底既に異なるが故に此の駁論は告子に於て何等の痛痒を感ぜざるべし。

之を要するに孟子は人の禽獸と異なる所以の性を以て先天的内存のものとし、之れを發揮するを以て修養の要義と爲したりしなり。

二、荀子の性惡説

性惡説

同じく源を孔子に發して、然かも思孟の性善説に反して性惡の説を主張せるものを荀卿とす孟子に後る、こゝ五六十年。深く人情の秘奥を考察し日常の經驗により立言して曰く人の性は惡、其の善なるものは偽なり今人の性生れて好利あり、是に順ふが故に爭奪生じて辭讓亡ぶ、生れて疾惡あり是に順ふが故に殘賊生じて忠信亡ぶ、生れて耳目の欲あり聲色を好むあり、是に順ふが故に淫亂生じて禮義文理亡ぶ、然らば則ち人の性に順ひ、人の情に順はゞ必らず爭奪を生じ、亂理して暴に歸せん、故に必らず將に師法の化、禮義の道ありて然る後に辭讓に出て文理に合して治に歸す、之れによりて之を觀れば人の性の惡なるや明なり。其の善なるものは偽なり。

と、人性を以て惡とし、其の善を以て偽とし、此の偽を習ふを以て聖人の教とす。

聖人は思慮を積み、偽故を習し、以て禮義を生じて法度を起す、然らば則ち禮義法度は是れ聖人の爲に生ず、も人の性に生ずるにあらざるなり、若し夫れ目、色を好み、耳、聲

偽を習ふ

孟子を駁す

を好み、口、味を好み、心、利を好み、骨體膚理、愉快を好むは是れ皆万人の情性に生ずる感じておのづから然り、事とするを待て後、之れを生ずるにあらざる、夫れ感じて然ること能はず、必らず且つ事とするを待て後に然るもの之れを偽に生ずといふ、是れ性偽の生ずる所其の同じからざるの徴なり、故に聖人は性を化して偽を起す、偽は性を起して禮義を生ず禮義生じて法度を制す、然らば則ち禮義法度は是れ聖人の生ずる所なり、故に聖人の衆に同じくして、其の衆に異ならざるものは性なり、異にして衆に過ぐるものは偽なり。と、更に孟子の性善を駁して「凡そ古今天下の所謂善なるものは正理平治なり、所謂惡なるものは偏儉悖亂なり、人もさより正理平治ならば何ぞ聖王を用ひ禮義を用ひん、よし聖王亂義ありと雖も、亦正理平治を加ふる能はざらん。其の然らざる所以のものは人の性惡なるが故なり、人の性既に惡なり、其の性に任せば偏儉して正しからず悖亂して治らざるを以ての故に、聖人禮義の法を立つ」といふ、言、頗る奇矯なるが如しと雖も、しかも亦能く人性の一面を看破し得たりといふべし。

荀子既に人性を惡と斷ず、其の修養法も亦孟子の如く内省的省察的のものにあらずして外來的矯正的のものにあらざるべからず、荀子此に於て禮を以て修養の要義とし、人生はて欲あり、欲して得ざれば則ち求めなきことを能はず、求めて度量分界なければ則

ち争はざるこそ能はず、争へば則ち亂る、亂れば則ち窮す。先王、其の亂を惡むが故に禮義を制して以て之を分ち、以て人の欲を養ひ、人の求めを給し、欲をして必らず物に窮せず物をして必らず欲に屈せざらしむ、兩者相持して長ず、是れ亂の起る所なり、故に亂は養なり。

禮

禮を以て道德の根底とし以て修養の法之れを出でずとす。されば孔子の仁を説き孟子の義を示すが如く荀子は之れを以て最高の原理とし、仁も之れなくんば亂れ、義も之れなくんば立たずとし、小は坐作應對より、大は社會國家の法律に至るまで之れを以し規定し、禮は治辨の極なり、強國の本なり、威行の道なり、功名の總なり、王公、之れに由りて天下を得、之れに由らざれば社稷を捐つる所以なり。故に堅甲利兵も以て勝るに足らず高城深池も以て固と爲すに足らず、嚴令繁刑を以て威と爲すに足らず、其の道に由れば則ち行はれ、其の道に由らざれば則ち廢す。

刑名の學

禮は仁義を節文して適當なる行爲に出でしめんとする形式なり。吾人の修養に這般の形式を要するや否定すべからず、荀子の門に韓非子あり李斯あり、共に刑名の學に走せて法律至上主義に流れ、韓非は、

夫の貧困に施與するものは、是れ世の所謂仁義なり、百姓を愛憐し誅罰するに忍びざるものは、是れ世の所謂惠愛なり、夫の貧困に施與する如きは功なきものにして賞を得るなり誅罰するに忍びざる時は亂暴止まず。

さて、仁義を排して亡國の法として、李斯は後、秦の始皇帝を輔けて其の主義を實行し終に先王の道義を破壊し、儒書を焚き儒者を抗にする等惡辣の手段に出でしが故に、其の極、荀子の學説を嘲罵するもの少からずと雖も、荀子の學説も亦思孟性善の説と共に確かに真理の片影を寓する卓見たるを認めずんばならず、性果して善とすべきか、抑も亦惡と斷すべきか尙ほ後段幾多の考量を要す。

三、性善惡混淆説

孟子之れを善といひ、荀子之れを惡といふ、善なれば開發せざるべからず。惡なれば矯正せざるべからず。開發するには養浩然の説あり、矯正するには禮儀の教あり、孰れが是孰れか非、抑も亦兩者是にして兩者又非なるか、漢に淮南子あり、鄒魯學派の論點たる性を解するに荆楚學派なる老莊の形而上學見地を以てし、萬物の本性は絶對無限の大道にあり、大道はこれ虚靜なり、されば人の性も亦、虚靜なるべしとし、之れを以て人間行爲の標準とし、夫の舟に乗つて惑ふものは東西を知らず、斗極を見て則ち寤る、夫れ性も亦人の斗極なり

性善惡混淆説

董仲舒

さいひて、此の斗極を離れずして能く迷ふなきが如く性を守れば、以て惑ふことなかるべしとす、性は日月の如く清明なれども、物慾の雲之れを覆ふ、覆ふも雖ども、其の本既に清明なるが故に光洩れざるなきが如く、人の性や邪なし之を以て其の善を行ふや易く、悪を行ふや難しとす。されば其の修養の工夫もまた内存的に其の本性を守りて心を虚靜にするにありとするに外ならじ、荀董仲舒出づるに及びて性善悪混淆の説初めて出づ。仲舒、人天相關を説き天人似形をいひ、宇宙人事との調和を以て道德の理想とし、天地人を以て萬物の本原とし、之れを人に及ぼしては、「天、之れを生ずるに孝悌を以てす、孝悌なければ其の生じる所以を失ふ、地、之れを養ふに衣食を以てす、衣食なければ其の養ふ所以を失ふ、人、之れを成禮樂を以てす、禮樂なければ其の以て成す所以を失ふ、二者手足となり、合して體を成す」と。孝悌と衣食と禮樂とあつて初めて全人格を完成すべしとす。其の性を説くや、

天に陰陽の禁あり、身に貪仁の根あり。

さいひて、貪なる悪性と仁なる善性と相混すと觀じ、

禾は米を出すと雖も、禾未だ米といふべからず、性は善を出すと雖も、性未だ善といふべからず、繭に絲ありと雖も、繭は絲にあらず、卵に雛ありと雖も、卵は雛にあらずるが如く、性は善にはあらずるなり、卵なり、繭なり、卵は復るを待つて後に能く雛となり、繭

善の原質

揚雄の善混淆説

劉向の性無善惡説

は練るを待つて後に能く絲となる、性は教誨を待つて後、能く善たり、善は教誨の然らしむる所なり、質樸能く至る所にあらずるなり。

と、性には善たるの原質あり、教化を以て能く善ならしめ得べしとす。故に其の修養も亦内存的のみにあらずして之れを外來に待つ所なかるべからず、彼れいふ「天下患害なくして然る後に性善たるべく、性善たるべくして然る後に清廉の化流る、然る後に王道舉り禮樂起る故に聖人は天下の患を除くを貴ぶ」と、これ彼れが性論當然の歸結なり。

此の董子の學説を承けて更に明かに善悪混淆説を主張せるものは揚雄にして、全然別見地に立ち、しかも相似たる所あるものを劉向とす、揚雄はいふ、

天、生民を生ず、空洞顛蒙にして性善悪混す、其の善を修すれば善人たり、其の悪を修すれば悪人たり。

と、刀ありとも研かすんば利ならず、玉ありとも磨かすんば光なげん、修養の要こゝにあり。故に揚雄は盛んに教化訓練の必要を唱道す、劉向は

人の善悪は性にあらざるなり、物に感じて而して後に動く。

と。物に感ずるは外界の影響にして則ち其の如何によりて善たるべく悪たるべしとする者、揚子は之を自修の上にいひ、劉向は之れを外物の影響に説き、前者は善悪は性の内に伏

性善悪混淆説

韓退之の三品説

在すとし、後者は全く性以外の作用とす。

唐に韓退之あり、自ら任ずること重く、遠く道を孟子に繼ぐものなりとし、「堯これを以て之を舜に傳へ、舜是を以て之を禹に傳へ、禹是れを以て之を湯に傳へ、湯是を以て之を文武周公に傳へ、文武周公は之を孔子に傳へ、孔子之を孟子に傳ふ、孟子死して其の傳を得ず、苟と揚とを擇んで精ならず、語て詳ならず」とす、其の性を論する亦孟子に淵源すと雖も、性と情とを區別し、性は先天的内存的のものなれども、情は後天的外來的のものとし、

性は生と俱に生ずるものなり、情は物に接して生ずるものなり。

といひ、此の性を分ちて上、中、下の三品とし、

上なるものは善のみ。中なるものは導きて上下せしむべく、下なるものは惡のみ。とし、其の性たる所以のもの五ありとして、曰く仁、曰く禮、曰く信、曰く義、曰く智を擧げ、情も亦三品あり、其の情たる所以のもの七、喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲、

其の上なるものは七情動て其の中に處り、中なるものは甚しき所あり、亡き所ありと雖も、其の中に合せんことを求むるものあり、下なるものは亡きと甚しきと、直情にして行ふものなり。

といひ、性に三品、情に三品あるをいふ。

韓退之の門に李翱あり、性と情とを區別し、性を以て善とし、情を以て惡なりとして立論す。

人の以て聖たる所以のものは性なり。人の以て其の性を惑はすものは情なり、喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲、七つのもの皆な情の爲す所なり、情既に昏ければ性斯に匿る、性の過にあらざるなり、水の渾するや、其の流、清からず、火の烟るや、其の光、明かならず、水火清明の過にあらざるなり。

性善情惡説

性、性と情とを峻別す、しかも其の情の根原を説くや、「性なければ情の生ずる所なし、情は性に由りて生ず。情自ら情ならず、性に因りて情たり、性自ら性ならず、情に因りて性を明にす」とし、情を以て性の動とす、されば其の情を生ぜざらしめて初めて本來の性に復るべし、其の修養を示して、

慮らず思はざれば情生ぜず、情生ぜざれば則ち正思成る。

と、韓退之并に李翱によりて峻別せられたる性と情とを「なりと喝破せるものを王安石とす曰く、

七情の未だ外に發せずして心に存するは性なり、七情の外に發したるは情なり、性は情の本、情は性の用なり。

性善惡混淆説

性情同一説

さいひて性善性惡の説を駁し、善惡は性其の者に命名すべきものにあらずして、情が物に接して動き其の理に合ふと合はざるを以て區別し、即ち「若し情にして理に當れば聖人たり理に當らざれば小人たり」といひて、性に於て之を定めずして行爲によりて善と叫び惡と稱せんとする者にして、從來の主として本性の上に善惡を立て、行爲を顧みざりしものに比して一異色あるを覺ゆ、されど其の本性といふに當りても荀子の如く性惡にして禮を以て聖人の偽に生ずるとするに反し、木を器たらしむるは木に其の性あればなり、馬の駕せらるゝも亦馬に其の性あるに由る、人には自ら嚴父慈母の心あり、聖人其の性の欲する所によりて制と爲す、其の制、人に強ふる如きも、實は其の性の欲に従ふなり」とす。

四、程朱理氣の説

周末に於ける孟荀二子の對峙は漢に入つて董仲舒、揚雄等の調和説となり、唐に來つて韓退之の性情三品説となり、性情を峻別して善惡を分るに對し、王安石の性情同一説となり、諸説紛々、性の善惡に關する議論は支那倫理史上の中堅問題となつて文質彬彬たる宋代に入り、諸學者の深厚なる思索と精到なる考察とは此の問題に加へられ、光彩陸離以て支那思想の精華を示せり。此の先驅を爲せるものを周濂溪とす、濂溪名は敦頤、字は茂叔、太極圖説

誠は聖の本

を傳へて宇宙の根本原理を究め、無極にして太極、太極動て陽を生じ、陽極つて靜、靜にして陰を生じ、靜極つて復た動く、一動一靜互に其の根たり、此動靜陰陽の二氣交感して萬物を化生し、此の萬物の秀を得たるものを人といひ、「最も靈なり、形既に生じ、神、知を發す五性感動して善惡分れ萬事出づ」とし、人の性も仁義禮智信を有するも、外界に接して善惡を生ず、其動かざるや唯誠のみ、誠はこれ聖の本、其の動くの幾に善惡を分ち、其の正しきものは善、正しからざるものは惡、こゝに於て君子は其の動の際たる幾を慎むを以て修養の要とす。

張橫渠

天地の性氣の質

次で張載あり、字は子厚、世人張載先生と尊稱す。性論に一生面を開く、張子は宇宙の根本原理を以て太虚とし、蒼々茫茫虚明の徳を備へ、太和の動を具す、萬物は實に此の太虚の變化に外ならざれば、人も亦其の性は虚明、天地の性を受く、既に天地の性を受く、其の本性に於て善ならざるなし、然れども太虚の凝聚して形を爲すに當り、氣に清濁を生じて終に各人其の氣質の差を爲すに至るこゝに初めて天地の性氣質の性の別あり、既に其の本然に然ては同じきも、氣質に於て異なるをいふ、其の修養法は、

其の氣を養ひ、之れが本に反し偏ならざる時は性を盡くして天なり。

さいへるが如く、氣質を變化するを主とす、如何にして氣質を變化すべき、そは一面心を平

かにして太虚と合せしむるの内の修養を怠らざると共に、他面に於て禮を守りて外來的に性を持し本に反るの工夫を講ぜざるべからず、これ彼れが人を教ふるに先づ禮を以てしたる所以か。

程明道
程伊川

周張二子によりて發育し來りし宋儒の性論は二程子に至りて爛漫の花を開き、朱子に至りて終に其の實を結びぬ。二程子、長を程顥といひ、明道先生と呼ぶ、字は伯淳、幼を程頤、字は正叔、伊川先生と呼ぶ、長は性温厚、幼は性嚴毅、其の學說も亦趣を異にする所なきにあらずと雖も、兄は弟を尊んで、他日師道を尊嚴せしむるものは伊川なりといひ、弟は兄を敬して、我道明道と同じ、異日我を知らんと欲するものは之れを明道に見よと。後世其の學說相混じて明別し難し。張載既に天地の性と氣質の性を分ち、前者を以て萬人共通のものとし、後者を以て個々差別のものとし、程子に至りて理と氣とを分ち、性を以て理とし、性に不善なし、而して不善あるものは才なり、性は即ち是れ理、理は即ち堯舜より途人に至るまで一なり、才は氣に稟く、氣に清濁あり、其の清を稟くる者は賢たり、其の濁を稟くる者は愚たり。

と、又いふ、

性は天に出で、才は氣に出づ、氣清ければ則ち才清く、氣濁れば則ち才濁る、才には則ち

理氣の
説

不善あり、性には則ち不善なし。

性即ち理は宇宙に瀾漫して行くとして到らざるなく、物として備はらざるなけれど、人の才には不同あり、これ氣の清濁に由る、性を論ずるものは此の氣を忘るべからず、氣といふものは此の性を忘るべからずとし理氣の説を立つ。性は絶對にして氣は個別なり、絶對の性は天に在ては命たり、義に在ては理たり、人に在ては性なり、身に在ては心なり、此の命、理、性、心、其の名異りと雖も、其の實一、冲漠無朕にして萬象森然として具す、而して其の異なる所以のものは氣の清濁にあり。故に其の修養を説くに當りても、先づ其の濁れる氣を修治して清明純全ならしめざるべからず、其の法は寡慾の二字を知るに過ぎたるはなし、寡慾なれば自然に本體の靈性を發揮し得べし、而して之を爲すの道は敬以て心を治むるにあるのみ。敬、以て心を治むるは心を以て主あらしむるなり、一事を主とすれば他事入ること能はず、これを主一無適の工夫とす、程明道いふ、

主一無
適

主一無適、敬以て内を直せば便ち浩然の氣あり、浩然須く實識を要すべし。と、此の靜的修養の外に、爲學窮理の外的修養をいひ、人の性や清明、之れを掩ふは人欲にあり、此の欲を防ぐは學を爲すより急なるはなしとし、書を讀み義理を講明し、古今人物を論じて其の是非を分ち、事物に應接して其の才に處すべきをいふ、これ其の動的修養なり

仁

以上動靜二面の修養は共に個人的なれど、其の社會的なるものに識仁の説あり、程子は、啻に性を以て理なりと見るのみならず、其の動的方面を以て仁とし、「學者須く先づ仁を識るべし。仁は渾然として物と體を同うす、義禮智信皆な仁なり」と説き、譬喩を擧げていふ、醫書に手足痿痺するを不仁とす、此の言最も善く名狀す、仁者は天地萬物を以て一體となし、己に非ざるなし。己たるを認得せば何の處にか至らざらん、若し之を己に有せざれば自ら己に與せず、相關するこそ手足の如し、仁の氣己を貫かざれば皆な己に屬せず。故に博く施して衆を濟ふは乃ち衆人の功用なり。

若し夫れ至仁の如きは、天地一身たり、而して天地間の品物萬形は四肢百體たり、夫れ人豈に四肢百體を見て愛せざるものあらんや、聖人、仁の至るや、獨り能く斯心を體するのみ。

さいひ、天地一體、萬物調和の大原理より仁を抽出し來る、これ程子、性論の一面なり。

朱子

二程子の學風を承けて之れを大成せるものを朱晦庵とす、名は熹、字は元晦又仲晦といふ徽州婺源の人、理氣の二を主張し、且つ理を以て太極と斷じ、只だ是れ一箇の理のみ、其の極致に因るが故に太極といふと、萬物は一大太極に統合せられ、人々又一太極あり、物物も

天地の性
と太極

亦一太極を具ふ、猶ほ一粒の粟、生じて苗となり、苗は花を生じ、花は實を結び、實は復た粟を成して本形に復し、一穗百粒あり、每粒個々完全にして、此の百粒又各百粒を生ずるが如く、初めは唯だ一太極、分れて個々の太極となり、初めは唯だ一理、分れて個々の理となる、人の性も亦此の如く、理を以て言へば全からざるなしと雖も、氣を以ていふ時は偏せざるなく清あり濁あり、清なるものは聖賢となり、濁なるものは昏愚となる、其の全からざるものなきものを本然の性とし、其の偏せざるなきものを氣質の性とす、曰く、

天地の性あり、氣質の性あり、天地の性は則ち太極本然の妙、萬株の一本なり、氣質の性は則ち二氣交運して生ず、一本にして萬株なるものなり。

と、又いふ、

天地の性を論ずる時は則ち専ら理を指して言ふ、氣質の性を論ずる時は則ち理と氣とを以て雜へて之れを言ふ。

と、性に此の二を分ち、其の性の物に感じて動く所のものを情とし、我が心は此の性情を具すとすしていふ、

仁義禮智は性なり、惻隱、羞惡、辭讓、是非は情なり、仁を以て愛し、義を以て惡み、禮を以て讓り、智を以て知るは心なり、性は心の理なり情は性の用なり、心は情性の主なり。

性之情

譬喩を設けて、心は水の如く、性は猶ほ水の静かなるが如く、情は則ち水の流れにして、欲は則ち水の波瀾の如し。

心性は二面あり物に感じて動く、其の本然の性に動かさるゝものを道心といひ、其の氣質の性に動かさるゝものを人心といふ、道心は普遍的宇宙的にして、人心は差別的個人的なり。曰く、

道心と人心

道心は是れ義理上發出し來る底、人心は是れ人身上發出し來る底、聖人雖も人心なき能はず、飢ゑて食ひ渴して飲むの類の如し。小人雖も道心なき能はず、惻隱の心の如きこれなり。

静坐

此の個人的なる人心を制して普遍的なる道心に服せしむるもの實に修養の第一義なり。朱子此に於て人に向て常に静坐の必要を説き、只此の心を収斂して煩思慮に走らしむることなく、湛然として無事ならしめ、以て事に隨ひ事に應じ、然かも心を動かさざるの素を養はしむ。曰く、

始學の工夫は須らく是れ静坐すべし、静坐すれば則ち本原定る、物を逐ふことを免れず。雖も、収歸し來るに及んでまた個の安頓する處あり、譬へば人の家に居るが如し、熱した

れば便ち是れ外に出で家に到つて便ち安し、もし茫々として外に在つて曾て工夫を下さざれば、便ち収斂して裡面に向ふことを要すとも、又個の着落の處なし。

静坐は是れ坐禪入定して思慮を斷絶するが如きを要するにあらず、只だ此の心を収斂して走作閑思慮せしむることなくんば、則ち此の心湛然として事なく自然に專一なり、其の事あるに及んで則ち事に隨て應じ、事已れば即ち復た湛然たり。

夜氣存養

既に静坐の必要をいふ、又夜氣存養に於ていふ所なかるべからず、朱子殊に力を此に用ひ、氣清ければ則ち心清し、其の日夜の息する所は是れ善心の滋長する處を指して之を言ふ、人の善心已に放失すも、其の日夜の間亦必らず滋長する所あり、又、夜氣澄靜するを得て以て之を存養す、故に平旦氣清き時其の好惡亦其の自然の理を得たり云々。

讀書窮理

夜氣澄靜を以て善心を滋長す、これを存養するの修養の、要義たる孟子言ふ所の如し、這般の靜的修養の外に常に讀書窮理の要を説き、格物致知是れ窮理、而して窮理の要は讀書にありと、大に之れを懇懇し、「書を讀んで聖賢の意を觀、聖賢の意に因て自然の理を觀る」と、讀書を閑却して理を窮むべからず、理を窮むべからずして能く其の性を養ふを得んや。朱子

は是等の修養法を説くと共に又程子の衣鉢を継ぎて仁を以て天地の道とし、蓋し仁の道たる、乃ち天地物を生ずるの心、物に即して在り、情の未だ發せずして此の體已に具はり、情の既に發して其の用窮らず、誠に能く體して之を存せば則ち衆善の源、百行の本、此にあらざるなし。

當時朱子の學風に反對せるもの陸象山あり、又別見地を以て性を論ず。

五、陸王の心即理論

陸象山

陸象山、名は九淵、字は子靜、幼にして人の程伊川の語を誦するを聞き、其の頗る孔孟の言と相類せざるを怪み、十三歳にして古書を読み、宇宙の二字を解して、上下四方を宇といひ古往今來を宙といふに至り、豁然として大悟し、「宇宙内の事は乃ち己分内の事、己分内の事は乃ち宇宙内の事」といひ、宇宙は便ち是れ吾が心、吾が心は便ち是れ宇宙として、心即理の說を立て、從來の學者が道心と人心とを分つを破して、心は一なり、人安ぞ二心あらん。といひ、天理と人欲とを分つを攻めては、

人生れて靜なるは天の性なり、物に感じて動くは性の欲なり、是の如くなれば則ち動も亦是にして靜も亦是なり、豈に天理物欲の分あらんや。動若し是ならずば即ち靜も亦是ならじ、豈に動靜の間あらんや。

心即理

と、一を是とし、他を不是とするを攻め、心は一心なり、理は一理なり、至當一に歸す、精義二なし、此の心、此の理、實に二あるべからず、故に夫子曰く、吾が道一以て之を貫くと、孟子曰く、夫れ道は一のみぞ。道といひ理といひ心といふ、悉くこれ一、故に其窮理の工夫といふも朱子の如く物に即して理を窮むるにあらずして直に之れを我が心に求むるにあり。されば朱子は聖の賢書を以て金科玉條とし、終生營々其の註釋を事とせしに反し、陸子は、我れ六經を註するにあらず、六經は皆な我が註脚なり。

誠思之

といひ、其の修養の工夫を説ては、義理の人心に在る、實に天の與ふる所にして泯滅すべからざるものたり。彼れ其の趣を物に受けて理に悖り義に違ふ、蓋し亦た思はざるのみ、誠に能く反て之れを思へば、則ち是非取捨、蓋し隱然として動き、判然として明、決然として疑ひなきものあらん。と、本具の性を究めて其の面目を發揮するを要す。

陸王の心即理論

王陽明

陸象山が心即理の説を繼承して更に其の蘊奥を發揮したるものを明の王陽明とす。名は守仁、字は伯安、支那倫理史上掉尾の偉人なり。彼れは心の本体は即ちこれ性にして、性はこれ理とし、

其の主宰の處に就て説けば便ち之れを心と謂ひ、其の稟賦の處に就て説けば便ち之れを性と謂ふ。

と、而して、其の奥底を以て良知にありとし、

天命の性粹然至然として其の靈照不昧なるもの皆な其の至善の發見、是れ乃ち明德の本体にして所謂良知なるものなり。

といひ、心の虚靈明覺なるものを以て本然の良知とし、其の感に應じて動くものを意とし、知あれば意なり、意あれば即ち行爲ありとし、陽明獨得の知行合一の説を立つ。

知行合一

知の眞切篤實なる處、即ち是れ行、行の明覺精察なる處、便ち是れ知。

と、知行相表裏して一にあらず、徒らに理を説くも自ら行ふにあらずんば未だ學知せりといふべからず、孝を學ぶといふは必らず勞に服し養を奉じ躬ら之れを行ふにあり、射を學ぶといふは必らず弓を張り矢を挾で滿を引て的中するにあり、天下の學、行はずして學べりといふべきものあることなし、行はざるは知らざるなり、行ふは知れるなり、知つて行はざる

はこれ眞に知れるにあらずと喝破し實踐躬行を旨とす。

四句教

陽明の學、其の要を示すに四句教なるものあり、能く性と修養とを明す、

無善無惡心之體 有善有惡意之動 知善知惡是良知 爲善去惡是格物

と、心の本体を以て照明靈覺、相對差別を絶し粹然として至善なるもの、これを無善無惡といふ、物に感じて動きこゝに善あり惡あるは意の作用なり。其の善惡を明察するもの之れを良知とし、致良知を以て修養の工夫とす。良知を致すとは良知を明にし其の善とする所は之れを好み、惡とする所は之れを惡まざるべからず、然るに善を惡み惡を好むは此の良知を隱蔽せらるゝに由る、故に其意を誠にして其の隱蔽を去らざるべからず、それを爲すには格物の工夫を要す、物を格すとは意中に在る所のものを格すにあり、良知之れを惡めば則ち之れを去り、良知之れを好めば則ち爲す、かくて以て致良知を全うすべし、良知之れを惡みて去る能はず、良知之れを好みて爲す能はざるものは物未だ格らざるものなり、曰く、

良知の知る所の善、誠に之れを好むと雖も、苟くも其の意の在る所の物に即いて而して實に以て之れを爲すあらざれば則ち是れ物未だ格らざるあり、而して之れを好むの意、猶ほ未だ誠ならずと爲す、良知の知る所の惡、誠に之れを惡まんと欲すと雖も、苟くも其の意の在る所の物に即いて而して實に以て之れを去るあるにあらざれば則ち是れ物未だ格らざ

良知

致知

るあり、而して之れを惡むの意、猶ほ未だ洩らさずと爲す。

と、これ爲善去惡是格物の義なり。蓋し致知と格物とは陽明が修養の詮要にして殊に致知は學問の大頭腦、聖人、人を教ふるの第一義とす、如何か知を致すべき、曰く、

只だ是れ知を致す、曰く如何か致す、曰く爾、那の一點の良知、是れ爾が自家の準則、爾が意念の着く所、他良知は便ち是と知り非は便ち非と知る、更に他を瞞するこゝも一も得ず、爾、只他を欺くを要せず、實々落々、他に依着して傲し去らば善便ち存し惡便ち去らん、他の這裏、何等の穩當快樂ぞ。

と、陽明學は所詮此の如きを以て其の工夫としては常に靜坐を説き「日間の工夫、紛擾を覺えば靜坐せよ」といひ、此の靜坐の工夫によりて心裏の主人公を徹見せしめんとす、其の良知を詠する詩に曰く、

箇々人心有_二仲尼_一。 自將_二聞見_一苦_二迷惑_一、而今指與_二眞頭面_一、只是_二更無_一疑。

問君何事日_二憧々_一、 煩惱場中錯用_レ功、 莫_レ道聖門無_二口訣_一。 良致兩字是_二參同_一。

人々自有_二定盤針_一、 萬化根源總在_レ心、 却笑從前顛倒見、 枝々葉々外頭尋。

無聲無臭獨知時、 此是乾坤萬有基、 拋却自家無_二靈藏_一、 沿門持_レ鉢做_二貧兒_一。

人々個々良知の仲尼を求めしむるこれ其の修養なり。

支那四千載を通じして性と修養との論議は波瀾萬重なりしと雖も、所詮の要旨は人性の根底を以て善なるものにして其の惡なるは物欲の掩ふ所となりしに外ならじと見ざるはなし。偶々荀子の如き性惡の説を立つるものありしと雖も、そも亦其の根本性をも惡として教化すべからずと説けるにあらば、性善説を破るには足らざるなり。然らば泰西學者は如何に見る、請ふ希臘倫理の學説を一瞥せしめよ。

第三章 知見と徳性

一、ソークラテース及びプラトーンの學説

字内の思潮を大觀するに自ら二派の相類似し二派の相背反せるを認む、宗教的なる印度の思想に相似たるものはヘブライの思想にして倫理的なる支那思想に相似たるものは希臘思想なり、印度と支那とは以て東洋を代表し、ヘブライと希臘とは以て西洋を代表す、蓋し字内の思潮は此の四派の融合し軋轢する間に起伏するものにして、既に相似の一面たる支那思想を觀察したる吾人の研究は亦勢ひ他の一面たる希臘思想に眼を注がざるを得ず。

大聖は其の轍を同うす、支那の孔子を見たる眼を以て希臘の大聖ソークラテースを見る、

ソークラテース及びプラトーンノ學説

ソークラテース

汝自身
を知れ

悪は不
知

智即徳
徳即福

其の言行の頗る相類似する者あり、言行のとは暫く後章の叙述に任せ、こゝに人性に關する論議を見るにソークラテースも亦孔子の如く人性の根底に就て明言する所なしと雖も、所論の傾向を看取して其の性善論者たるを見難からず。ソ氏の研究は人間を中心とし各人個々の間に共通せる普汎的眞理の發見を以て哲學の發程とし、先づ揚言していふ「汝自身を知れ」と人、自ら稱して知れりとなす、抑も何事をか知れる、汝の知れりも爲すは知らざるが故にあらざるか。知は徳なり、既に之れを知れりといふ、これを行はざるべからず、其の未だ行ふ能はざるものは眞に知れるにあらず、悪は不知より生じ不徳は無識より起る。故に人の爲すべき最も高きものは眞の智識を得るにあり、眞の智識あれば徳必らず之れに伴ひ、徳行あれば幸福は又必らず之れに隨ふ、人には自ら幸福を求むるの心あり、されば又何人も徳行を望むの傾きなき能はず、既に徳行を望むの傾きあり、人豈に知つて不徳を行ふことあらんや、憐れなる哉、人、自ら知らざるが故に不徳を敢てし終に自ら求めざるの禍害を招く、智は徳なり、而して徳は福なり。

ソ氏の倫理は智即徳、徳即福の二面を提げて其の根底を眞智識の探究に置き、自ら善と認め自ら幸福なるべしと思惟する所を遂行すべきを説き、變化定めなき肉體の幸福に重きを置かずして心靈の慰安に眞正なる満足の境地を開き、誣ひられて罪を國法に得たるも敢て騒がず

プラト

イデア

悠悠毒を仰で逝ける彼の人格は實に其の學說の權化とし知行合一の活模範とも見るべきか、ソークラテースの學說を繼承して之れを大成したるものをプラトーンとす、プラトーンの解説を得て吾人はソ氏に於て耳にしたる眞智識論に深き根底あるを認む、プラトーンは吾人の五官に接觸して得る所の感覺上の智識を以て刻々にして變化するものなれば以て永劫不動の眞智識にあらず、感覺以外の理知によりてのみ以て眞智識を獲得すべしとし、個々物以外に個々物をして個々物たらしむるの實在即ちイデアと稱する普汎的性質の觀念あり、例へば難を排して人の爲めに努め、死を決して國の爲めに戦ひ、或は強者の前に屈せず、白刃の下に騒がざる如き個々の事象は變化定めなれど、此の中に共通したる普汎的性質とも見るべきは萬人共に認むる勇氣といへる觀念なるが如く、個々の事象には之れを統合するイデアあり、かくてイデアは各々其上層なるものに統治せられ、層々列を爲して相互相素さず秩序整然たるイデアの組織をなせるものこれ全宇宙の實在なり。而して此の組織の最上に位せるイデアは即ち至高の善にして、個々の事象は皆な此のイデアの目的を遂げしめんが爲めに存在するものに外ならずと見たるが故に、吾人の本性も其の未だ現實界に生れ出でざりし以前に於ては理知明かにイデアを見ることを得たりしも、一たび下土の肉身に繋がる、に至りて性慾忽ちに加はり理眼其の明を失ひたれど、尙ほ心の奥底にはイデアの影を宿せるが故に、肉

エロイ

慾の跳梁を制し物質の束縛を脱しなば理眼復び明かにイデアの境に遊ぶことを得べしとし、吾人に眞を求め善を望み美を受するの心あるはイデアに對する追慕憧憬の念にして實にこれ戀に外ならずといひて、こゝに有名なる戀愛説を立てぬ。

ソークラテースに於ては未だ明確に言はれざりし人性の根底の善なることはプラトーンに於て明かになりぬ、プラトーンは其の最高なる善の觀念と吾等が善の觀念との關係を説くに巧妙なる譬喩を以てし、

太陽の譬喩

吾等が物を見るは視覚あるにあらずや、視覚は眼にあり、されど眼あれども太陽の光あらずんば見る能はじ、眼をして物を見せしむるものは太陽なり、太陽は視覚其の者にあらずと雖も、視覚によりて認め得べき視覚の原始者なり、試に汝の眼を月及び星の照らせる物體に向けば、朦朧として視覚の明なきが如けん、されど之れを太陽の照らせる物體に向く時、汝は明瞭に諸物を見ることを得ん。精神は眼なり、其のイデアに向ふの時、始めて知覺し理會し得るにあらずや。

と、吾等の心をしてイデアに向はしむるの時、吾等は明かに善を得て至美の生活に入るべきも、不幸にして肉體の繫縛は之れを妨げ物欲の纏綿は之れを害す、此に於てプラトーンの哲學は厭世的に傾きて肉體輕賤未來愉悅に向はざるを得ず、されど彼れは他の一面に於て出来

四徳

得る限り現實生活にイデアを實現せしむるの要を説き、吾等の心をして調和の美德を有せしめざるべからざるをいふ、如何にして吾等が心を調和すべきか、他なし吾等の心には理性と情慾と肉慾とあり、此の肉慾をして理性に従屬せしめ、此の情慾には適宜の訓練を加へて理性を資けしめて心生活の全面を調和するにあり、即理性の徳としては智識、情慾の徳として勇氣、肉慾の徳としては節制、而して此三徳の調和を以て正義の徳として四徳を立て以て精神修養の綱目とし、殊に第一の智識と第四の正義とを以て心内統御の二大原理とす。

ソークラテースを以て孔子に比すべくんばプラトーンは其の學相に於ても孟子と相似たるものあり、されど彼は孟子の主として内的修養を説けるに異りて荀子のいへるが如く外的修養を説き、各個人の諸徳をして完全に發達せしめんには必らず秩序ある國家の統御に待たざるべからずとし、各個人を以て全然國家に屬すべきものとし、各個人は其の利益と快樂とを犠牲として國家に盡くすべきをいひ、理想的國家を説いて個人の教育、結婚其の他の細故に至るまで悉く之れに干渉して以て眞の徳を實現すべしといひぬ。

二、アリストテレス及び其以後の學説

プラトーンの門より出で、其思索の方法を其の師と異にしプラトーンが立脚地を理想の境アリストテレス及び其以後の學説

人類の精神

能動性と受動性
意志の修練

に置きて現實界を瞰下せるに反し、現實的なる經驗界より立論してやがて理想の境に進まんとするの趣あるものはアリストテレースなり。其の學相に於てこそ二者趣を異にすれ、其の根本思想に至つては共にソークラテースを繼承して完き徳は完き知によりて得らるべしとし、人性の根源を至善に置きたるや一なり。アリストテレースは先づ此の現實界に於ける生活現象を視察して其の精神に三個の階段ありと爲し、最も下等なるものは植物にしてこは唯だ營養と生殖との二作用あるのみに過ぎざれど、動物に入りては此の外に感覺と運動との二作用あり、進んで人類にありては智識作用を現はし終に理性の指導によりて是等の諸作用を統御するに至るとし、人には此の營養生殖を司る植物精神、運動感覺を司る動物精神の外に人類精神をも目すべき理性ありとし、此の理性を更に能動理性と受動理性とに分ち、受動理性は身體と共に消滅すれど、能動理性は邇邇不變にして神に近きものなりとて人を他の動物と峻別し、人の人たる所以は其の理性の指導する所に従ひて行動するにありと説き、徳はソークラテースの云ひし如く單に智識することに於てのみ達せらるゝものにあらずして屢々實行することに於て養はるべきものとし、徳を知能的と行爲的との二に分ち、知能的の徳は推理によりて發達せしむるものなれど行爲的の徳は習慣によりて獲得せらるべきものといひ、徳は知にあらず理にあらず、意志の實踐なり修練なり、如何にして意志を修練すべきか、他なし、

過不及なき中庸の徳を涵養することこれなり。

萬般の人事は過と不及とによりて誤らる。運動の過ぎたるに及ばざるは共に健康を妨げ飲食の過と不及とは同じく身體を害する如く、節制、勇氣等の諸徳に於ても亦此の如く、危難を恐れ萬事に驚くものは怯者となり、何事にも驚かず、如何なる危難をも恐れざるものは暴者となり、一切の快樂を悉く得んとするものは破廉恥漢となり、一切の快樂を悉く避けんとするものは没情漢となる。吾等の養ふ所は此の過不及なき中庸の徳ならざるべからず。

中庸

と、乃ち中庸はこれ徳を成すの本たり、吾等の行動をして常に此の中庸を得せしめ慣ひ性となつて以て其の徳を完からしむべし、かくて吾等は其の理想とする所の至高善の地に達して大なる幸福を享受し大なる満足を得べしとす。

アリストテレースの學説は自らプラトーンと其の趣を異にすと雖も、外的修養を説き個人として孤立しては至高善を發見する能はず、必らず調和的共同生活たる國家によりて達せらるべしとするの點に於ては相互一致するを見る。

されどアリストテレース以後、希臘の國家組織は全く壞裂し其文明も亦漸次凋落するに及び、此の如き頼他的の思想は地を拂ひて各自其の主觀の満足によりて現實の不安を免れんとす。

アリストテレース及び其以後の學説

ストア
學派

するの傾向を生じ、ストア、エピクロス等の學派を出しぬ。

ストア學派の祖をツエノンとす。此の學派の眼中王侯なく四海悉く同胞、人は皆な等しく理性的動物なり。されば此の理性に従ひて生活するは宇宙の大法に順適し、神の法則を實現する所以なり。さて常に自然に従への語を以て自律の箴とし、此の理性に背きて情慾の奴隷となる如きは自然に背反したる不徳の行爲なりと説き、宇宙は漠然たる神の靈體にして人心の祕奥には此の靈體の光を藏す、此の靈體の示す所によりて以て行動し運爲す、これ即ち全品性に徳行の華を開かしむる所以にして、人の目的は此の理性に従ふことによつて實現せらるゝ徳にあり、如何にして此の徳を涵養すべきか、他なし、理性をして慾情を統御せしめ、精神をして中庸を得せしむるにあり、若し此の理性が其の判断を誤らんか、之れ自然に背きたるものにして精神の中庸は破れて病的状態となり惡なるもの生ず。理性だに明かなれば何の處にか過誤あり罪惡あらん。彼の徒らに生死榮辱利害得喪の爲めに喜憂し苦樂するものは未だ此の中庸の徳を養ひ得たるものにあらず、眞に此の徳を養はんとす。須く情慾以外に超越して毫も外物の爲めに動かされざる不動心を養はざるべからず、不動心の涵養、これ實に此の派修養の根本義なり。

不動心

其の言ふ所此の如きを以て其歸趣する所、頗る陸王の心即理説に類す、此の派の學者とし

理性

て有名なる羅馬のマアカス、アウレリアスは明に人性を語りて、汝、自ら省みて汝を包める肉體と之れに附屬せる機關とを以て自己なりと見る勿れ、こはたゞ器具のみ、彼の織女の機と同じく書家の筆と同じく、又御者の鞭と同じく、之れを動かさし之れを止むべき力の加はるにあらずんば何等の用をも爲す能はじ。

と云ひ、さて其の力を解して理性に外ならずとし、其の特色を擧げて、

理性は宇宙の全體を超越して萬物を包容す、理性の示す所に従ふに吾等の後に生じ來る事物も新たなるはなく、吾等の前に生ぜる事物も亦今と異なるなし。

といふ如き、頗る陸王の面目を偲ばしむ。

寂靜心

ストア學派と時を同うして行はれたるエピクロス派も亦主觀的にして肉慾上の快樂を棄て

精神上の快樂を旨とし心を平靜ならしめて湛然水の如くならしむる寂靜心の涵養を以て修養の第一義と見、新アカデミーヤ學派も亦、心の平靜これ吾人の眞幸福なりと説き、少しく

フイ
ロン

後れてフイロン(折衷學派)出でプロティノス(新プラトーン派)出づるに及びて其の説

は稍神祕的傾向を帯び來りぬ。フイロンは此の宇宙を以て神と物質との對立とし、神は光明にして物質は闇黒なり、神が此の闇黒なる物質に光を與ふるには「ロゴス」なる媒介物あり「ロゴス」は神の語にして猶ほ太陽より發散したる光線の如く神より出でたる神の思想なり、

アリストテレース及び其以後の學説

恍惚境
プロ
テイノ
ス

萬物は此の「ロゴス」によりて整然たる秩序を得、人性中にも此の「ロゴス」あり、これを天賦の理性とす、人は皆一面此の神より得たる理性を具ふると共に他面に於て物質に繋がれてこゝに情慾あり、されば此の物質の繫縛を脱して神より得たる眞正の智識によりて情慾を斷離し無念無想の恍惚境エクスタシスに住するを以て修養の道を説き、プロローティノスも亦萬物は神より進り出でたるものにして神に近きものは完全なれど神を離るゝ遠きに從ひて不完全たるを免れず吾等の精神は神に近けれど物質は神を去るこゝいと遠ければ此の物質界の慾を制して心靈の満足を望み、凡ての思想を超越したる恍惚境に入りこゝに神人一致の怡悦を得べしといふ、希臘哲學の人性研究はこゝに至りて全く宗教と一致し來れりといふべきか、請ふ次章に於て論議せしめよ。

第四章 罪惡の起源

一、罪惡と自由意志

支那に於ける人性研究は性の善惡に發揮して漸次に心性の本源に溯り程朱陸王に至ては巧みに佛教の學說を融和し來りて其の根底の宇宙の妙理と脈絡貫通するを言はざるを得ざるに

人生の
思索

至り、希臘に於ける人生研究はソクラテースの汝自身を知れの一語に起りて知即徳の研究はプラトーン、アリストテレースを経て理性の來由を辿りストア、エピクロスよりフイローンプロローティノスに入りて終に之れを神に歸せざるを得ざるに至り、未知に初りて知に半ばしたる人性の思索は遂に不可知に終りて之れを神といひ、佛といひ、天といひ、理といふ絶對神祕の靈體に其の根底を置かざるを得ざるに至りぬ。既に其の根底を絶對神祕の靈體に置く然らば人性の本源は絶對善ならざるべからず、既に絶對善ならば何が故に人性に罪惡なるもの存するか、此の問題にして解決せられずんば性善説は未だ遠かに首肯する能はざるなり、罪惡は如何にして生ずる、此の問題を客觀的に解釋せるものを基督教とし、主觀的に説明するものを佛教とす。先づ其の客觀的解釋を一瞥して更に主觀の方面に於ける解釋を見ん。

神と魔

人の眼は先づ外に向つて而して後、徐ろに内に向ふ、古代民族は眼を上げて客觀世界の千狀萬態にして而かも秩序整然たるを見て、其の靈妙なるに驚き不可知神祕の神の顯現なりと思惟すると共に、時に大破壊の其の間に行はれ大暴力の加はるを見て魔の顯現なりと考へざるを得ず。融々たる春光に神の恩寵を感謝したる彼等は疾風迅雷を目して魔の跳梁なりとし、て恐れざるを得ず、神と魔との二思想は密接不離の關係を爲し宇宙は此の二者の争闘軌轢に外ならずと觀察して、こゝに善惡二神の存在を想像したるものは有名なる波斯のゾロアスタ

ゾロア
スタ

猶太教

一教にして此の教に於ては善神オルムツを以て宇宙の創造者、支持者、保護者、防禦者にして善行の完成者として之れを仰ぐと共には悪神アーマンは宇宙を破壊し人生を毒害する禍害の權化なりとして之れを恐れ、正意と正語と正行とを以て働くことによりて此の禍害より脱離し得べしと思惟したり今云はんとする基督教並に其の祖たる猶太教も純然たる一神教にしてゾロアスターの教義と全然其の趣を異にすといへども亦太古民人思想の形式として二元

サタン

的傾向を免れずして「以賽亞書」には其の一神エホバを以て、
我は光を造り、又くらきを創造す、我は平和を造り、又毒害を創造す、我はエホバなり、
我凡て此等の事を爲す。

と見て其の崇敬の中心たるエホバにも此の善惡の二性を具すとし、惡魔サタンをも亦ホエバ幕下の一臣僚にして神に對する信仰の厚薄を試みる天の使の如くに感じたりしなり。かゝる二元の思想は其の原罪に關する傳説に於ても認むることを得べし。創世紀は先づ人類の起源を以て神のアダム、イアの男女を造りたまひしにありとし、神は此の二人をエデンの樂園に置きたまひしに、

原罪

エホバ神の造り給ひし野の生物の中に蛇最も狡猾し、蛇、婦に言ひけるは、神、眞に汝等園の諸の樹の果は食ふべからずと言ひ給ひしや、婦、蛇に言ひけるは、我等園の果を食ふ

ことを得、されど園の中央に在る樹の果實をば神、汝等之を食ふべからず、又之れを搦るべからず、恐くは汝等死なんと言ひ給へり。蛇、婦に言ひけるは、汝等必ず死することあらん、神、汝等が之を食ふ日には汝等の目開け、汝等神の如く爲りて善惡を知るに至るを知りたまふなりと、婦、樹を見れば食に善く目に美麗うつくはしく、且智慧からんが爲に慕はしき樹なるによりて遂に其の果實を取りて食ひ、亦之を己と借なる夫に與へれば彼食へり、是に於て彼等の目、俱に開きて彼等其の裸體なるを知り、乃ち無花果樹ちぢくの葉を綴り裳を作れり、彼等園の中に日の清涼き時分歩み給ふエホバ神の聲を聞きしかば、アダムの妻即ちエホバ神の面を遮りて園の樹の間に身を匿せり、エホバ神アダムを召して之れに言ひ給ひけるは、汝は何處に居るや、彼いひけるは我が園の中に汝の聲を聞き裸體なるにより懼れて身を匿せり。エホバ言ひたまひけるは、誰か汝の裸なるか汝に告げしや、汝は我が汝に食ふ勿れと命じたる樹の果を食ひたりしや、アダム言ひけるは、汝が與へて我と借ならしめたまひし婦、彼其の樹の果實を我に與へたれば我食へり。エホバ神、婦に言ひたまひけるは、汝が爲したる此事は何ぞや、婦言けるは蛇我を誘惑して我食へり。エホバ神蛇に言ひたまひけるは、汝是を爲したるに因て汝は諸の家畜の野の諸の獸よりも勝りて呪はる、汝は腹行して一生の間、塵を食ふべし、又我、汝と婦との間及び汝の苗裔と婦の苗

裔との間に怨恨を置かん、彼は汝の頭を碎き汝は彼の頭を碎かん、又婦に言ひ給ひけるは我大に汝の懐妊の劬勞を増すべし、汝は苦みて子を産まん、又汝は夫を慕ひ彼は汝を治めん、又アダムに言ひたまひけるは、汝その妻の言を聽て我が汝に命じて食ふべからずと言ひたる樹の果を食ひしに由りて土は汝の爲めに呪はる。汝は一生の間勞苦して其より食を得ん。

さ、これを猶太の原罪説とす。此の系統を引ける基督教も亦此の原罪説を繼承し人類の祖先既に神の命に背きて罪を犯せるが故に、其の子孫たるものも亦罪の子として責罰を受くるを免れず、悲哉、吾等は祖先の罪業に縛せられて永劫に其の苛責を受けざるべからず。嗚呼如何にして此の苛責を免るべきか、こゝに曠世の聖人耶穌基督なるものあり、自ら神の子と生れ普く人類に代りて其の罪の報を受け十字架上の露と消えぬ。吾等は此の基督に縋り此の基督に依るとによつて始めて救はるべしとの教義を以て立教の基礎として、從來神と人との關係を以て恐怖に置きたりし猶太思想を一變して愛の福音を説き、吾等人類が永劫の苛責より遁れて救はるゝは神の恩寵に外なられば、吾等は先づ此の身の罪多きことを自覺し、此の罪多き身の當然受くべき責罰を免れ得るは、偏へに神の冥助に依るべきを確信し、且つ神が此の罪多き身に冥助を垂れたまふは、基督が吾等に代りて受けたまひし苦痛と吾等が基督に對

基督

信、愛、望

當死罪
當釋罪

内心の
正

する誠忠の情によるものなりとし、渾身の愛を神と基督とに捧げ、神の一切人類を愛し給ひ、各人類は亦基督と同一人性を有するものなれば、吾等も亦神と基督とに對する愛を普く人類に及ぼし此の信と愛との力を以て罪業多き吾等の前途にも輝ける希望の光を認め得べしとし、信、愛、望の三者を以て基督教道徳の三要素と立て、以て修養の根本となしたり。

彼等は此の世を以て悪魔の治下とし吾等を以て罪惡の子とせるが故に敬虔なる中世の基督教徒は痛切に我が心の脆弱にして迷惑多きを感じ熱心に之れを免れんことを計り、日夜自ら省みて自尊の行爲なかりしや貪慾憤怒の念なかりしや、嫉妬矜驕の心なかりしやを責め、罪を分ちて當死罪(Deadly sin)や當釋罪(Nemial sin)とし、前者は一定の教規により懺悔し懲誠するの苦楚を経るにあらざれば永劫の墮獄より脱れ難き重大の罪をいひ、後者は祈禱施與等によりて保釋し得らるべき罪を指し、教會はこれらの罪によりて各々其の滅罪の形式を定め、或る罪は三日以上の斷食を要し、或る罪は生涯の懺悔を要する等、煩鎖なる教條を設け、法律的に外より其の罪を犯さざらしめんとするに至りぬ。

中世の基督教徒は一面に於てかゝる教條を設けて外より其の精神を修養すると共に又基督教道徳の骨髓たる内心の正(Inwardness)を維持することを努め、吾等が正を求め善を望む心を以て神に向ひつゝあるものとし、眞に神を愛するものは神を憧憬して忘我の境に入り、こ

に靈の眼開けて神の姿を見るに至らざるべからずとし、靜坐冥想の要を説きて内的修養を爲すの一面を有しき。

基督教が罪惡を觀じ且つ之れが解脱の方法として説ける所は略ぼ上述の如きも、是等の根本には尙ほ一問題の遺れるものあり。若し夫れ這般基督教徒の云ふ如く吾等を以て祖先アダム以來免れ難き罪業を遺傳し來れりせば、吾等が悪を爲すはこれ先天的必然性のものにして蓋し已むを得ざらざるべからざるか、吾等の惡行爲にして已むを得ざるに出づるものせば吾等は、何故に自ら其の責に任ぜざるべからざるか、人に自由の意志ありて隨意に善を選び惡を選ぶことを得ることなすにあらずんば、善の賞せられ惡の罰せらるべき理由なきにあらずや。自由意志の有無これ實に中世基督教神學主要の問題にして、修養の根本義も亦此の解決によつて定められざるべからず。

上に掲げたる原罪の論議は主として教父哲學の泰斗と云はれたるアウグステイヌスの所説を擧げたるものにして、彼れば人に若し先天的罪業なくんば人は救はるゝの必要なくして基督の救世も意義なきに了るを見たれども、英吉利の僧侶ベラギヌスは此の宿命的必至論に反して自由意志の説を立て、人には善を選び惡を避くるの自由あり、此の自由あるが故に自ら善を作して神の恵を受くるを得るものにして若しアウグステイヌスの如く自から善を爲し

アウグステイヌス
ベラギヌス

アンセルムス

アペラドウス

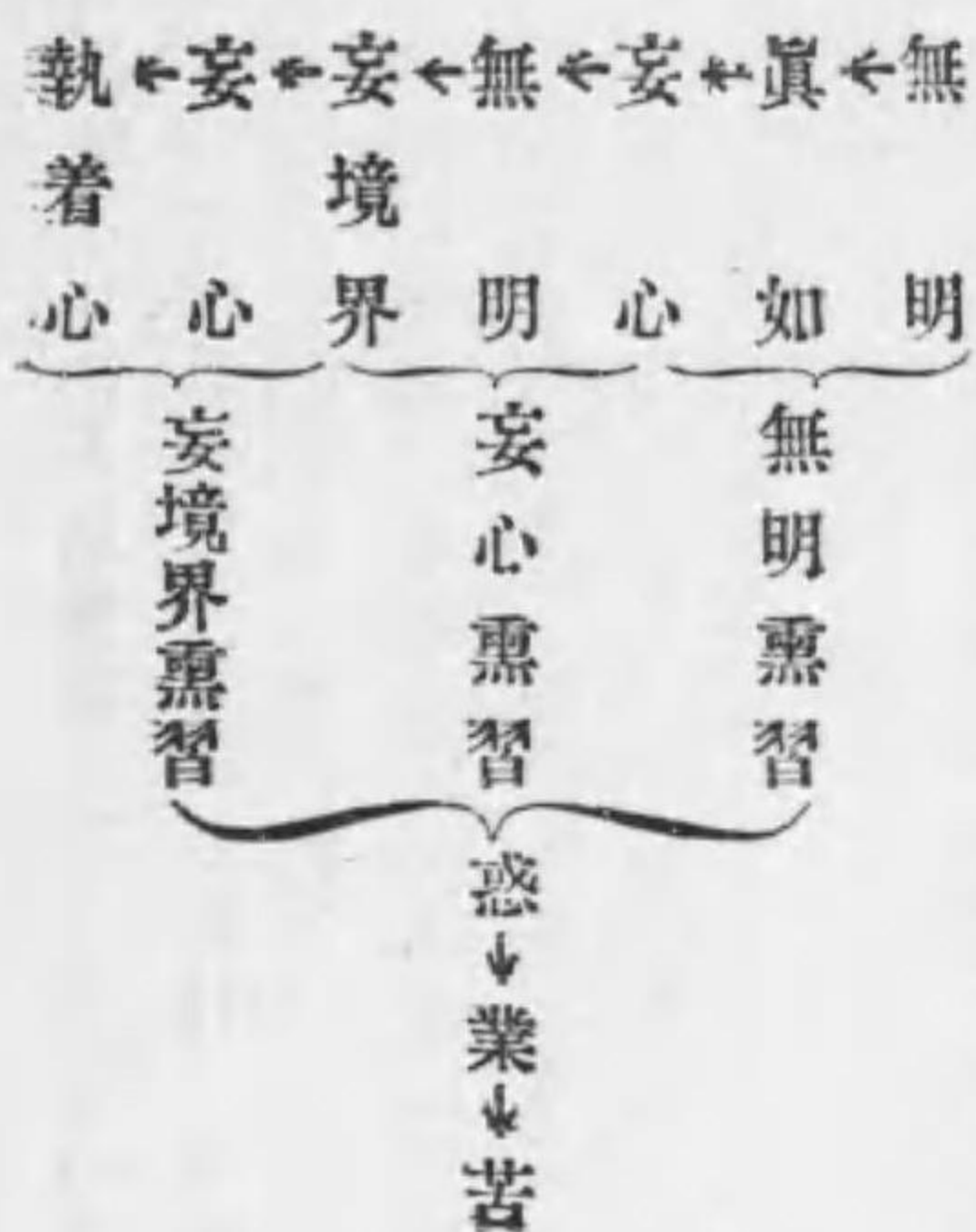
トマスアクイナス

得るの力なしとせば、人は道德上に於て無責任のものとならざるべからずといひ、下つてアンセルムスに至つては此の自由意義を究めて人に自由なしといふは其の罪の子たりといふ點に於て斯くいふのみにして、必らずしも吾等に善を意識するの力なしといふにはあらず、始祖アダムが罪を犯ししより吾等が善を爲すの力は衰へて常に惡に向ふと雖も、未だ全く其の力の失せたるにはあらずして、一種の潛勢力となりて人性の中に藏れ、神の恵みを得て顯はるゝものと説き、次でアペラドウス出でて吾等が祖先より遺傳し來れる罪即ち惡を作る性向は、未だ以て眞の罪といふべきものにあらず、又唯外部に現はれたる結果のみを以て罪と目すべきものにあらず、眞の罪は自己が悪なりと意識して行動する内的動機にあり動機にして善ならば結果を問ふ所にあらずとして意志の自由をいひ、基督教を合理化せしめんと努力したるスコラ哲學の驍將たるトマス、アクイナスも亦吾等は自然の合理的欲求によりて善を求め、自から理性の洞察によりて其の爲すべき行を決定し得るものとして、意志の自由をいひしかも其の理性の指示する所に従ひ善を思惟し善を行ひ得るは神の恵にありとして、基督教の信仰と調和し、此の自由意志と神の恵みとによりて眞の福祉を得らるべしと説く、トマスアクイナスの説はアウグステイヌスの、人は先天的に罪惡ありと見たるを異りて、人性には善を求むるの欲求ありと見たれど、それは全く神の恵みに歸したるが故に幾分の制限を意志の

熏習

用ひ、無明の眞如に熏習して妄心を生ずるを無明熏習といひ、其の妄心が更に無明に反熏して妄境界を生ずるを妄心熏習といひ、此の妄境界又妄心に反心して終に執着の心を生ずるを妄境界熏習といひ、

熏習の義は、世間の衣服實に香なし、若し人、香を以て熏習するが故に香氣あるが如し、これ亦此の如し、眞如の淨法は實に染なし、但だ無明を以て熏習するの故に則ち染相ある、無明の染法は實に淨業なし、但だ眞如を以ての故に淨用あり。
と説き眞如熏じて惑となり、惑に由て業を生じ、業によりて苦を生ずること猶ほ次の如しとす。



性悉有佛

性徳と修徳と

客觀的に見たる基督教に於て吾等の祖先は神より出でて純潔なりしと見る如く、主觀的に考察したる佛教に於ても其の心性の本源を以て眞如平等諸佛と相同じきものなりしが、忽然としてサタンの魔風に吹き荒されて終に罪の子となると説く、終に罪の子となる、されど其の初めや佛と相同じ、此に於て佛教は人性の根本を以て一切衆生悉有佛性に置き、梵網經には汝は是れ當成の佛、吾は已成の佛、

と示して佛と衆生と二あるにあらず、今は暫く其の相を異にすも、其の本源に遡れば共に佛たるの性格を有するものなれば、吾等が心裏の奥底には常に佛陀無限の靈光を藏し、一たび無明の闇を破りて智眼明かに德行圓かならんか、吾等は直に佛陀と其の資格を同うするを得べしとし、其の先天的内在的に有するものを性徳といひ、其の潜めるを顯はし其の隠れたるを開き其の曇れるを磨きて本來の性を發揮するを修徳といふも、性修も不二、性あるが故に修も功あり、修あるが故に性も亦現はる、

濁は本有といへども全體これ清し。

濁惡の吾等の本心にも清淨の佛性あれば、永嘉大師は、

無明實性即佛性、 幻化空身即佛身、 覺了法身無一物、 本來自性天真佛。

といひ、實大乘の極義としては敢て煩惱を斷離するに及ばず。毒を變じて藥とし、鐵を點じて

佛性と罪惡

六五

戒定慧

金を爲す、不斷煩惱得涅槃といひ、密教に於ては父母所生身即證大覺位とて吾等が肉身そのまゝに大覺者たる佛陀の位を證すべしと説き、各宗各派言議多端なりといへども、所詮は一切衆生悉有佛性の觀にあらざるなし、されば其の修養を説くに當ては自力各宗に於ては吾等の本來に此の佛性の存すべきことを第一義として之れの徹見を發揮を旨とし、佛陀の教示によりて道義を實行(戒)し、靜思冥想して内在的の性佛を求め(定)、智見を明かにして(慧)、迷惑の境に陥らざらしめんことを計り、華嚴經には、

如來の智慧

爾の時、如來、無障礙清淨の智眼を以て普く法界一切の衆生を觀じたまうて、是の言を作したまはく、奇なる哉、奇なる哉、此の諸の衆生如何にしてか、如來の智慧を具有しながら、呆痴迷惑して知らず見ざる、我れ正に教ふるに聖道を以てし、其れをすて永く妄想執著を離れしめ、自ら身中に於て如來廣大の智慧、佛と異なるなきを見せしむべし。即ち彼の衆生をして聖道を修習し妄想を離れしめん、妄想離れ已んで如來の智慧を證せん。

本源清淨心

此の本源清淨心、常に自ら圓明にして偏く照らすも世人悟らず、只だ見聞覺知を認めて心と爲し、見聞覺知に覆はれて清明の本體を見ず。といひ、プラートンが心性の本源を遠くマテアの理想境に求め、吾等が善を望み眞を求め美に

内熏と外熏

あこがるゝを以てイデアに對する追慕憧憬の情と見たるが如く、佛性たる眞如は吾等をして吾等の罪惡を自覺して善に向はしむるの用ありて、前に擧げたる大乘起信論には之れを眞如内熏の力といひ、既に此の内熏の力に動かされて智眼漸く明かならんとして眞善美を求むるや、こゝに吾等の妄心は又動て眞如に向ひ、内外相應じて終に涅槃解脱の境に入るこし、其の眞如の内より動くを内熏といひ、妄心の眞如に向ふを外熏とす。



吾等が道に志すは眞如内熏の力にして内に潜める佛性の湧然として迸り出でんとするの傾きとも見るべく、其の之れに達せんとする一切の修行は皆なこれ妄心の眞如に向ふ外熏の作用とも云ふべきか。

眞如に此の内熏の力ありと雖も、迷妄の雲深く其の光を翳せる吾等の身は、自ら其の光を尋ねる能はず、偶ま道に志すも其の方弱くして之れを遂ぐる能はず、知らず識らず罪惡の荂に沈淪して生死浮沈の苦を受く、佛之れを愍みて解脱の大道を開示し一切衆生を救はんとしたま

佛性と罪惡

信仰

ふされば吾等は此の佛の力に縋り其の光明に攝取せられて初めて離苦得樂の境に入るべし、之れ宗教としての佛敎成立の根底にして唯だ信能く之れを遂ぐとし、信は道の元、功德の母、一切の諸の功德は信を以て使命と爲す、諸の寶の中に於て信の財を最第一と爲す。

(大莊嚴經)

(梵網經)

罪惡と信心

一切の行は信を以て首と爲す、衆徳の根本なり。

とし、他力を説く宗派に於ては此の信を唯一解脱の道として教義を建立し、吾等罪惡に迷へる凡夫の心、もごより佛に向ふ素質あるべきにあられば、此の信の一念も皆な之れ佛陀無限の大慈によりて惠まれたるものに外ならずとし彼の自力諸宗が其の源に遡りて本具佛性をいふに反し、吾等が現在の心に着眼して殆んど性惡説とも見るべき説を立て善に向ふべき意志の自由をも缺如する如くに立言し、ひたすらに佛に依附し信賴せしめんとす「眞宗教要鈔」にいふ。信心とはまことのこゝろさよむなり、行者の方に起す故に我が心より起ると思へども、もご如來の御心よりおこさしめ給ふなり、もし行者の心といはゞ偽り曲りてかたましければ、まごこの心とは申し難し、如來のすぐなる御心なるが故にまごこの心とは申し難し、まご偽り曲りてかたましきは吾等の心なり、唯だ佛に頼りてのみ救はるゝことを得、此の點に於て佛敎も亦基督教と同一見地に立つと見るべきか、蓋し佛敎は高遠にして各派の教義も一な

自力と他力

らず、其の罪惡斷離の方法も各宗其の見を異にし事に輕重ありと雖も、要するに自力に屬する宗派(天台、華嚴、眞言、禪の如き)の立言は哲學的倫理的にして支那希臘諸賢の説に似通ひ、他方に屬する宗派(淨土、眞宗の如き)の立言は全然宗教的にして基督教の言ふ所と相類するの傾きあり、前者は本性の淨善なるこゝに注目せしめんとし、後者は今の心の濁惡なるこゝを自覺せしめんとす。大道二義なく達者途を同うす、去て他の問題に向はむ。

第五章 自由意志

一、宿命と自由意志

佛性本具の吾等も今は宿業に縛られて出離の途なく神の子たりしアダムの子孫も今は罪の子となりて墮落の淵に沈む。吾等の意志は自由なりと見るべきか、將た不自由なりと觀すべきか、其の論議は暫く後段に譲るも一切の宗教が其の成立の根底に於て幾多意志の自由を制限し神の豫定を説き宿業の免れ難きをいふの一事は、一應の觀察を要すべきこゝにあらざるや、三世因果を標榜せる佛敎は、

前世の因を知らんことを欲せば則ち今世に受くる所のもの之れなり、後世の果を知らんことを欲せ

宿命と自由意志

定業と自由

ば則ち今生の爲す所これなり。

さいひ、現世に於ける運命を以て前世の業因に歸し、

深山洞穴さいへども、世界中定業を免るゝ所なし。

さいひて宿業の如何をも爲し難きを説き、神の豫定に立つ基督教は宇宙萬象悉く神の攝理にあらざるはなく、

我が天の父の植ゑたるものは皆な抜かるべし。

さいひ、救世主基督の出現も亦神の豫定に外ならずと、

我は神より出で来ればなり、夫れ吾は己れに由て来るにあらず、神、吾を遣し給へるなり。

(馬太傳)

と示し、馬太傳には、

二羽の雀は一錢にて售るにあらずや、然るに爾神の父の許なくんば其の一羽も地に陥るゝとあらず。

回々教の宿命説

と説く、飛禽走獸、何者が神意ならざる、宿業に縛られ神意に左右せらるゝ、何の所にか意志の自由ある。回々教に於ては更に深く此の宿命の説を信じ、コーラン經に於て人事は皆な神意によりて人爲の如何をも爲す能はざる所なり。

さいひ、

誰か一定の運命を左右するの權能あらんや、死は高塔に坐するも之れを避くべからず、天地未だ開けざる前、上帝既に各人の命數を定めたまへり。

と爲し、支那に於ては宿命を信ずること最も甚しく、人事は天象を以て卜すべしとして陰陽の兩儀より乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤の八卦を劃し以て萬象觀察の標準とし易の繫辭傳には「聖人、卦を設けて象を觀じ、辭を繫きて吉凶を明す」といひ、「天地位を設けて而して易其の中に行はる、成性存々道義の門なり」と説き、木、火、土、金、水の五行を以て萬物運用の根本とし、此の氣に順ふものは福を得、之に逆ふものは禍を招くと示し、五行によりて甲子を生ず、「劉氏通鑑外紀」にいふ、

黄帝、大撓に命じて五行の情を探り、始めて甲子を作る、甲、乙(木)丙、丁(火)戊、己(土)庚、辛(金)壬癸、(水)、これを幹といふ、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、これを枝といふ、枝幹相配して以て日に名く。

と、此の十干十二支によりて人の運命を卜し時間的には生年月により空間的には方位に配して其の吉凶を定め、人の一生を以て先天的に定められたる天命以外一歩も出づる能はざるものとす。かくては意志の自由なるものは全然失はれて人の道德的責任は歸するに由なく善に

宿命と自由意志

易

十干十二支

袁了凡

就き悪を去るの修養も何の意義なき閑事業たらんことす、明の袁了凡が陰騭録は自己の閱歴を陳べて能く宿命説の妄を辯す、請ふ其の行實を摘録せしめよ。

袁了凡、幼にし父を失ひ、母の勧めにより醫を學びて衣食の道を得んことし、偶く一老翁の白鬚長く飄々仙の如きに遇ふ、老翁、凡を熟視して、「吾は姓を孔といひ、易の正傳を得たり百發百中、千に一を誤らず、試に子を卜するに子は、これ仕を求むるの人、須く醫を廢して書を讀め、郷學にては第十四席、郡學にては第七十二席、國學にては第九席を占め、某の年より某の年までは何程の扶持を受くべく、其の後四川の知事となり政務に従事すること二年有餘にして歸京すべし。其の死するは五十三歳八月十四日丑の時に當る、惜むらくは子なきの一事なりと。凡。これを録して一生の覺悟を定め老翁の言を實際に徴するに符節を合するが如し、進退命あり遽かに改むべからずと深く宿命の説を信す、後、南雍に遊び、棲巖寺に雲谷禪師を訪ふ、禪師了凡が宿命の説を信するを笑ひ、喝破していふ、

愚なる哉、汝、二十年來、命數に縛せられたる了んぬ。

と、了凡膝を進めていふ、

命數、得て逃るべきか。

雲谷曰く、

然り、禍福門なし、唯だ自ら招く所、汝孔公の算定に従ひ官は知事に止り命は五十三歳を限り、又子あることなしとすか。

了凡曰く、

然り、予や薄福、功を積み徳を累ぬること能はず、直情徑行、輕言妄談如何か高位に上り得べき、且つ水清ければ魚なし、予、清潔を好む、これ子なかるべき理の一なり、和氣能く萬物を育す、予怒り多し、これ子なかるべき理の二なり、愛は生々の本たり、予己を捨て、人を救ふ能はず、これ子なかるべき理の三なり。其の他、多言氣を損じ、暴飲精を害ひ徹夜神を亂す等過惡多し。

雲谷、聽き了りていふ、

汝、今己れの非を知りて度す所なし、これ福に轉するの徴なり、されば務めて徳を積みんことを要せよ、汝が従前の積惡昨日死するが如く、従後の積善は今日生る、が如し、天の作せる孽は猶ほ避くべし、自ら作せる孽は避くべからず、孔生が汝、高位に上らず子を生ますと算のたるはこれ天の作せる孽に過ぎざれば猶ほ避くべし、汝、今より徳性を磨き善行を務めばこれ自ら作るの福なり、何ぞ得て受けざらん。

と、了凡深く其の言を偉なりとし、直に往日の罪を懺悔し善事を力めしかば、孔公の算には

宿命と自由意志

五十三歳といひし死期をも過ぎ鏗鏘として壯心未だ衰へず云々。
命は天にあらすして我にあり。此の一話能く宿命説の妄を破るものにあらずや、然らば意志は絶対的に自由にして宿命に於て制限せらるゝことなきか、曰く然り、曰く然らず、吾等の行動の常に何者にか掣肘せられつゝあるは事實にして、吾等の思念が自由自在なるも亦否定すべからず、更に精細の思索を費すにあらずんば遽かに此の問題を決すべからず。

二、自由意志と人格

ホーロが「義人なし、一人もあるなし、人皆な既に罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず、唯だキリスト、イエスの贖によつて神の恵を受け、功なくして義せらるゝなり」といへるに崩し、アウグステイヌの原罪説となりて確認せられたる基督教の意志必至、宿命的定道論は幾たびか自由意志説と戦ひて中世哲學の中堅問題となり來りしことは前章既に叙述するところのごとし。其の後、哲學漸く宗教の羈絆を脱し近世に入りても此の問題は依然として倫理問題の要點となりて近世哲學の唱首と稱せらるゝデカルトは意志必至、宿命的定道論に傾きし中世哲學の主張に反して全然意志の自由なるべきを揚言し、道德は神の命令にして之れに従ふに従はざるは吾人の自由なり、人の神と相似たるは繋りて此の自由の存するにありと

デカルトの意志自由説

スピノザの意志必至説

ライプニッツの制長的自由説

カントの批判

いへり。されどデカルトの云へる自由は絶対放任の自由にあらずして其の眞なり善なり美なりと思惟する智識に於て行ふの自由なりと爲すものなれば、其の修養は主として智的にして先づ理智の明を味ますの情を卻け、意志をして罪惡の根源たる情の奴隷たらしむるにありと説き、スピノザは此の意志自由説に反して人の一切の動作は悉く神の顯現にして吾人の一作一動は皆な自然の理法に纏縛せられつゝあるものなれば一歩も其の以外に出づる能はざるものなり。されば人は此の自然法に服従してこそ至上善と云ふべけれど、天地の大法を仰ぎ永恒一如の本體を靜觀して我が本性を完うすべき寂靜主義を説き、其の他ライプニッツは此の二者を排して制限的自由説を採り、意志は其れ自身絶対的に自由なるにあらずして其の理性の指示し思念の活動する範圍内に於ては自由なるべしといふ等、幾多の論議を経て恰かも百川の大海に朝宗するが如く精到なる批判と深遠なる考索とを以て近世哲學のオーソリティたるイマニユエル、カントに入れり。自由意志に關するカントの思想は頗る穩健なり、彼れは先づ純粹理性に於て吾等の智識を以て全然人類生具の自性より發するものなりとせる主心派と、我が心は白紙の如く外界より來る經驗によりて智識を成すといへる經驗派とを批判し統合して、かゝる外來の經驗と素材を我が心の本具の形式に収めて初めて智識たるべきものなれば、吾等の智識は其の經驗し得る現象界にのみ限られて其の現象の根底たる實體界

自由意志と人格

實踐理性

に於ては何等の智識だも得る能はざるものとし、智識の對境たる現象界に於ては凡べての事物悉く相對差別にして絕對善を認めず、悉く機械的必然の關係に支配せられて毫も自由なる形跡を存せざれど、吾等が自然の道德的要求として絕對の善を望み意志の自由を思ふ、こはこれ趨然經驗現象の界を超えたる實體界の上に根據を有する實踐理性の要求なりとし、凡て此の世に於て又此の世以外何れの處に於ても無制限に善と云はるべきものあるなし、其の之れあるは唯だ善意のみ。

無上大法

さいひ、善意を以て普遍の法則にありとし、我が行爲の法則が同時に萬人に通ずる普遍の法則と意志し得る法則にのみ従うて行動せよ。さいひ、此普遍の法則を以て實體界の太源より流れ出でたる無上大法の命令とす。吾等にして唯だ此理性の存するのみならんには唯々、諾々、無上大法の命を奉じて之れに違はざること恰も自然界一切の現象が因果必至の法則に従ふが如くなるべけれど、吾等の心には理性の外に感性なるものあり幾多の情欲を有するが故に、動もすれば其爲めに囚はれて此命令に違却し不義の渦中に陥らんこと、これ我が實踐理性は命を下して之を止めんとし、茲に意思自由存在の根據を築く、若し夫れ吾等の意志にして不自由のものたらんか、吾等は此命に従はずと欲するも能はざるべし、此に於ては彼れいふ、「我れ爲し能ふ、何となれば我れは當に爲すべき

カントの意志自由説

人格と品位

ヘツケル意志自由説

ものなればなり」と、當に爲すべき命令の存するは之れ爲し能ふの自由あるが故にあらずや。カントは現象界と實體界とを峻別し自然法と道德法とを分ち現象界に行はるゝ自然法は必然的關係に支配せらるべけれど。實體界に根底を有せる道德法は其れ自身に於て自由なりとし、吾等は其の普遍的なりと意志し得る法則に従ひて行動し、かく意志し得ずば行動すべからずと教へ、此法則に従ふの意志は其れ自身尊重すべきものにして敢て他の目的によりて評價せらるゝものにあらず、意志は其れ自身を目的とす、其れ自身を目的とするの意思を有するものを人格とさいひ、こを他によりて評價せらるゝ物品價格(Piece)と分ちて品位(Dignity)といひぬ、人は自己の中に自己が終極の目的を有し終極の價値を有す、これを發揮する上に修養の功は存するにあらずや。

カント以後に於ても自由意志の論議は止みたるにあらずして現象界に重きを置く唯物論經驗論の主張は意思不自由説を唱へて、

今日吾人の見る所を以てすれば意志の作用は一切自餘の心的活動と同じく其の個體の身體構成によりて定り、又時々刻々の外圍境遇によりて定まるものにして、努力の性質は夙に父祖より遺傳せられて定り。一々の行動に對する決定は刻下の境遇に對する順應にて定り此順應は最強の動機に従て行はれ動機の強弱は感情界に行はるゝ法則に従ふものなり(ヘツ

自由意志と人格

ケル「宇宙の謎」

さといひ、経験以上に思索を運らす唯心論合理論の主張は意志自由説にして、動物の活動は目前の衝動並に感情感覺等によりて定められて思慮、疑惑、決意等の暇なれば人間に至りては決意によりて其の行爲を定む、其の決意は思慮の結果にして其の初め多くの可能的行爲を自己の目的と見合せて其の適當なるものを選ぶにあらば吾人の行動は自由意志にして定めらるるといふべし（パウルセン「倫理學原理」）

さ、相互其の主張を異にすも雖も、之れ必らずしも調和せられざるにあらず。事物を客觀的に查究する科學者の見地より視れば宇宙萬象は悉く必然の理法に支配せられ吾等が心理的現象も亦それ／＼必然の理法に掣縛せられて一步も其の外に出づる能はざるべけれど、暫く主觀の思索に任じて吾等が一事を爲さんとする當時の心的状態を思へ、諸種の想念は競ひ起つて右せんか左せんか、凡て吾等が任意の選擇に委ねられたるが如く感ぜらるゝにあらずや、如何に必然の理法のみなりと主張するの人々も日常の些事、例へば花を墨堤に探らんか、月を東臺に眺めんかといへることに何等の自由なくして必然花を探るべく定められたり月を眺むべく定められたりとは思惟し能はざるべく、起たんか坐せんかその自由だも吾等に存せざれば思ひ能はざるべく、如何に意志の自由を唱道する人々も自然の法則を無視して渴して水を需

パウル
センの
自由意
志説

自由
必然

めず、餓ゑて食を求めずさといひ能はざるべく、況んや羽なくして天空を翔り、船なくして水上を行くをや吾等の自由には制限あり、吾等の不自由にも程度あり、吾等の足の地を離れざるが如く吾等は常に必然の理法に支配せられ吾等の眼の遠く天を望むが如く吾等は意志の自由を有す吾等の肉の獸と相距る遠からざるが如く吾等は自然の衝動によりて行爲し吾等の靈の神に近づくべきが如く吾等は又別に自由の決意によりて動く、まことやトルストイのいへる如く「吾等の行爲は皆な自由と必然との調和より成るものにして、如何なる行爲にても、一々に之れを吟味したらんには必ず自由の或る分量と必然の或る分量とを有するを發見せずんばあらず、而て必然の度大なるに従ひて自由の度小に自由の度大なるに従ひて必然の度小に、此の二は反比例を成す」單に必然の理法のみを見て意志不自由と云はんとするものは人性の自然に戻り唯だ意志の自由をいうて必然の理法を無視せんとするものも亦日常の経験に反す。

想ふに他の動物は目前の衝動並に感情感覺に動かされて運爲するが故に唯だ自然の大法に驅られて其の行動に何等の統一なけれど、人は一切の心象を統一して其の目的に向て行動せんとするが故に唯だ外部の刺戟にのみ動かされずして自由の選擇を有す。これ人の他の動物と其の品等を異にして別に人格なるものゝ存する所以にあらざるか、人の心は時々刻々に動かされ其の思想感情も日々に變化し行けば、常にこれを自我なる一觀念の下に統率し、其の

人格的
意識

自ら志す所に動く、此に統一あり繼續あり自由あり、以て人格の根底を築く、セームスの心理學は意識過程の四性質を示していふ、

- 一 心意の状態は人格的意識の一部となるべき傾向を有する事、
- 二 人格的意識の諸状態は絶えず變化し、ある事、
- 三 人格的意識は連綿として相繼續する事、
- 四 人格的意識は常に其對象中の或者を歓迎し或る者を拒斥しつゝある事

こ、人の精神生活は猶ほ國家組織の如く、個々の心象唯だ個々に動きては完全なる能はざれど悉く自我なる人格的意識に統一せられ、其の意識は常に活動變化の状態を爲しつゝ、しかも連綿として繼續せられ、此の主權者の好む所のものを採り好まざる所のものを斥く、既に其の好む所のものを採り好まざる所のものを斥く、取捨自己にあり、自己は自己の範圍に於て自ら自己の行爲を決定し致して他の干渉を受けざる猶ほ主權者の其の領土内に於て自由に行動し得るが如しされどおのづからなる制限は其の至上權の上にも加へられて如何に自由なりとも國史を蔑如し國憲を蹂躪する能はざるが如く、自己決意の動機は又おのづから自己の性格に基かざるを得じ、吾等の性格は吾等が過去に於ける意志活動の積集したる結果に外なられば、此性格を離れて自由なるにはあらず、所詮吾等の行動は必然と自由との混淆に成るものなれば、此

精神と
國家組織

の必然の部分のみを見て過去の業因とも宿世の運命とも見られざるにあらざれども、將來の運命を開塞し、未來の結果を左右するの自由存せずとは思惟する能はず。自由と必然、これ吾等が行動の凡てに於て認めらるべきのこゝたり。

三、性と自由意志

自由意志の論議は略ぼ定められぬ、暫く論歩を蹴して自己決定の主體たる自我なるものを査究せんか、問題は復た本の性善惡論に歸らざるを得ず。現在の我には罪惡あり過誤あれど其の本性は果して罪惡なく過誤なき清淨のものなるか、抑も亦罪惡あり過誤あるが吾等の本性なるか、同上上來略述したりし性論の歸結は吾等の本性の源頭を尋ねて終に心即理といひ、神に出でたりと説き、佛と同じと示せざるを得ざりき、プラトンのイデアの都より出でたりといふも、孟子の良智良能と説くも、宋儒の太極といひ本然の性といふも、佛教の眞如といひ如來藏心と談ずるも、カントの理性といひ無上大法といふも、其の名異にして、説に深淺の別ありと雖も、皆な其の根底を絶對無限の靈性に置かざるはなし。殊に近世倫理學の泰斗として儼然其思想界の一大勢力たる英國の碩儒グリーン一派の學說も其の歸する所は吾等の意識の本源を宇宙大意識の顯現にありとし、こゝに意志自由の根據を定め、倫理の目的を以て

性論の
歸結

眞我

眞我(True Self)の實現にありとす、眞我これ宇宙の大意識と脈絡貫通する吾等が心靈の本性なり。此の眞我の満足は、これ吾等が倫理的な要求にして心裡の靈光が指示する大道にあらずや。子思の所謂誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なるもの亦之れに外ならじ、山鹿素行はいふ。

已むを得ざるもの之れを誠といふ、純一にして雜らず、古今上下易るべからざるものあり維れ天の命、あゝ穆として已まざるなり、聖教未だ曾て誠を以てせざるはなし、道といひ徳といひ、仁義といひ、禮樂といふも皆な人々已むを得ざるの誠なり(中略)已むを得ざるの誠を致せば即ち一言一行一事一物の間に誠ならざるはなし(聖教要録)

既に已むを得ざるの誠といふ、意志必至にして自由なきに似たり、されど此の已むを得ざるの誠と致すと致さざるは繋りて自己の自由であり、吾等は實に爲すべきを知つて爲さざることあり、爲すべからざるを知つて爲すことあり、これ豈に本來の性が物欲の雲に掩はれ、理想の我が現實の掣縛を受けたるの結果にあらずらんや。修養の要は此の掣縛を脱して天地の露性と融合し、此の雲を排して自由の妙光を認めんとするにあり。

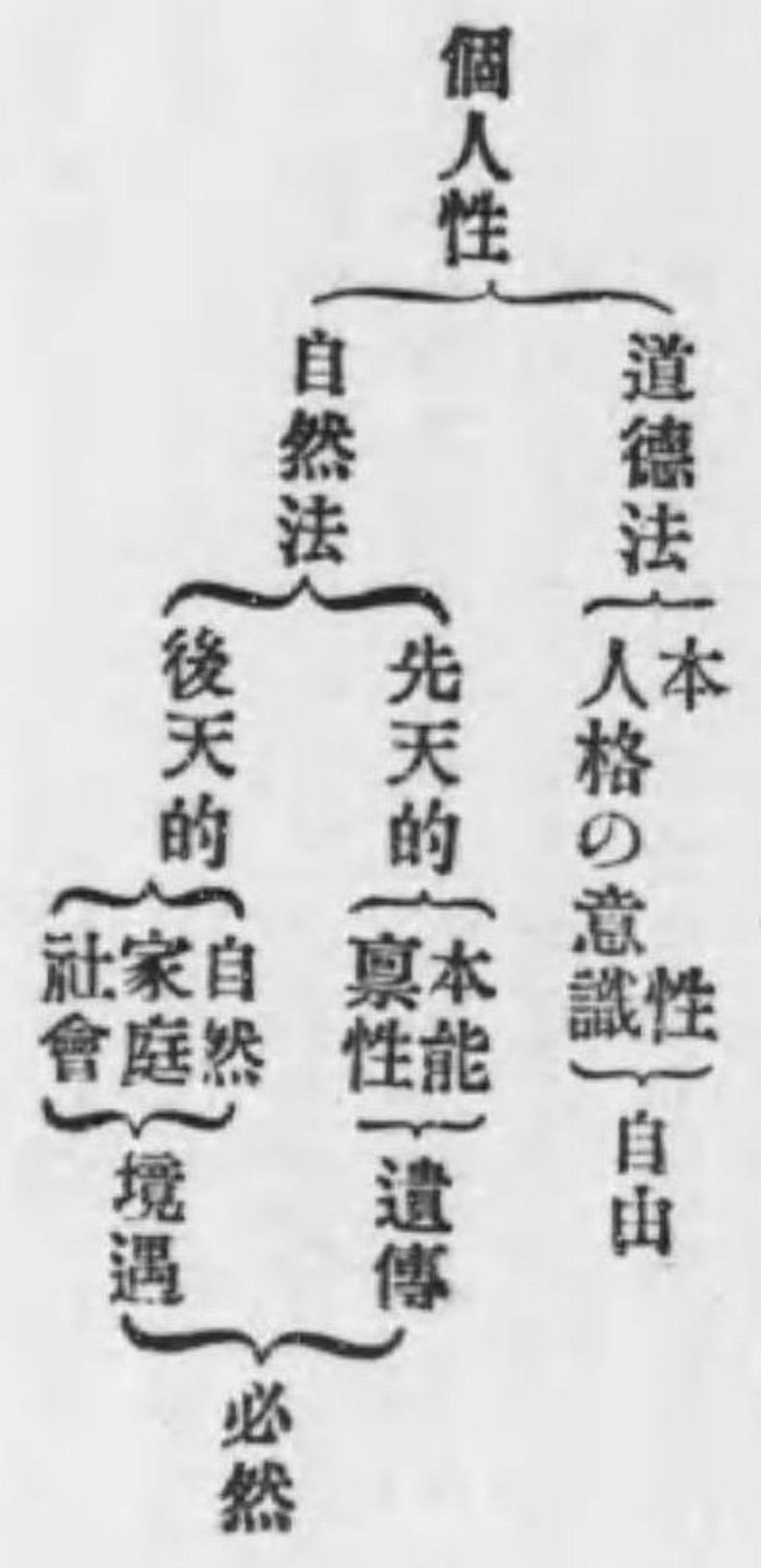
如何にして我が靈性は掩はれ、如何にして我が自由は掣縛せられしか、吾等は過去の遺傳によりて父祖の性癖を受け、現在の境遇によりて周圍の壓迫を蒙り、心ならずも此の爲めに

已むを得ざるの誠

靈性の隠覆

縛られ、知らず識らずも此の爲めに掩はれたれど、尙ほしかすがに棄て難き先天の靈性は内に輝き、本有の自由は其の面影を存するにあらざるか、現實に於ける吾等の個人性を分解し見んか、一面は本有の道徳的要求に従ひて自由の天地を有すれども、他面に於ては自然の大法に動かされて其の羈絆を脱する能はず。

個人性の分解



大約此の如くにして吾等が行爲は定めらる、既に道徳法に關する論議の大要は略ぼ悉くしたれば、去て自然法に移りて遺傳と境遇とが如何に吾等の性格に影響するかを見て修養の能不能に及ばん。

性と自由意志

第六章 個性の要素

一、遺傳と個性

道德法に於ては宇宙大意識の顯現なりと認められたる吾等も、自然法の眼中には獸と相距らざる一肉塊に過ぎずして、飛禽走獸に施され草木土石に布かれたる法則は何の容赦もなく吾等の頭上に加へられて寸毫も之れを離るゝことを許さざれば、吾等は自然界一切の法則に縛られ、殊に生物進化の大則たる遺傳の理法は吾等が個性成立の一大要素となつて不識の間に得來りたる心身は吾が運命に大關係を及ぼさんとする。賢愚多く父祖に稟け、強張も皆遺傳に因す。幸なるものは則ち可なり、不幸なるものに至つては終に訴ふる所なきなり。

吾等の不幸は之れのみならず、自然法研究の進歩は曾ては宇宙の縮寫なりと誇りたる我が肉體も今は飛禽走獸と異なるなき細胞組織に過ぎずと嘲り、曾ては神の子なりとして其の特寵を祝ひし我が身も、今は醜き獸と其の祖を同する子孫なりと咀はれ其の身は魚鳥の血を承け、其の心は螻蛄と趣を同する、自然法の研究者たるエルネスト、ヘツケルは遺傳に關する最近研究の結果を示して云ふ、

一 個々の人間は其の初めに於ては他の高等動物と異なることなき一個の單細胞に過ぎず。

自然の
大法の心身の
遺傳の

二 此の根本細胞 (Cytilia) の生ずる状態は凡ての場合に於て同一にして男の精蟲と女の精卵との二個の細胞が互に融合するに由る。

三 精蟲と精卵との生殖細胞には各々細胞精神 (Cell-soul) を有し其の感覺と運動との形式を異にす。

四 受胎の場合には此の二個の生殖細胞の原形質と核子とが融合するのみならず、其の細胞精神も亦相融合し、これ等細胞の中に潜在せる緊張力も亦抱合して更に新しき緊張力を生じ、こゝに根本細胞が有する精神の萌芽たり。

五 かくて個人は父母より其の身體及び精神の特質を受く、詳しく云へば遺傳により精卵の核は母の特質を傳へ、精蟲の核は父の特質を傳ふ。

吾等の身心は此の如くにして父母より繼承し來れるなれば更に其の祖に遡り其の先を尋ねれば、吾等の身心は下等動物と同じき一個の單細胞より開發し來れるなり。ヘツケルは又吾等が精神發生の階段を語りて、人類の祖先は他の動物と同じき單細胞の原生動物にして其の心的作用は無機物の化學作用と高等動物の精神作用とを連結せる一個の橋梁と見るべき細胞精神を有するに過ぎざりしとす、

第一段 單なる細胞精神を有する單細胞動物即ち滴蟲類

遺傳と個性

人類の
精神の
萌芽の
發生の
階段の

個性の要素

- 第二段 群集細胞精神を有する複細胞動物即ちカタラクメア
- 第三段 表皮精神を有する最古の後生動物、即ちプラトデス
- 第四段 簡單なる直立腦髓を有する無脊椎動物、即ち蠕形動物
- 第五段 頭蓋骨なく只だ單純なる髓管を有する有脊椎動物、即ち無頭蓋動物
- 第六段 頭蓋骨と腦とを有する動物、即ち有頭蓋動物
- 第七段 大脳の皮質の特に發達せる哺乳類動物
- 第八段 思考機關を有する高等の人猿及び人類

この段階を経來りて終に今日に於ける吾等が精神となれるものにて之れ實に科學的に證明せらるべき確乎の事實なりと説く。吾等の身には禽獸の血を存し、吾等の心には下等動物の面影を遺しつゝ、祖父母より父母に、父母より吾等に進化の大道を辿りつゝ、遺傳し來りしものなれば、吾等は生來他の動物と異らざるの本能を有す。本能とは意識したる何等の目的なく且つ豫備的教育なくして生來に其の目的に向つて行動する性能にして、セームスの心理學に「本能的と稱する行動は、凡て反射標型に屬するものにて猫が鼠を見て之を追ひ、犬を見ては逃げ又は争はんとするの状を呈し、壁土又は樹上を歩みて落ちず、火又は水を避けて之れを踏まざる如き皆これ其の場合場合に於て斯く行動せざるを得ざるが故に斯く行動するにて

本能とは何ぞ

解本能の

決して猫に一定の目的あつて然るにあらざりて其の身體組織が鼠を見ては追はざるを得ず、犬を見ては避けざるを得ざるやうに構造せられたるに由るなり」と云はれたる如く、全く生來の身體組織に關聯せるものにして、福來博士の「心理學講義」には更に適切な例を引て、一定の目的の自覺もなく、又之を遂行すべき豫備的教育もなくして該目的を遂行するやうに行動する先天的性能を本能と謂ふ、例へば飯粒の過ちて氣管に入りたる時に噴嚏を發するが如し、此の噴嚏は飯粒を氣管より逐ひ出すの目的に適合す、然れども此の場合に於て人の噴嚏するは、此の如き目的を遂げんとするの自覺を以てするにあらず、又何人よりも斯くすべく教へられたるが故にもあらず、唯飯粒の氣管に與へたる刺戟が反射的に噴嚏を解發し、而して此の噴嚏が飯粒驅逐の目的に適合したるなり、故に生理的に定義すれば、本能とは一定刺戟による感神經の興奮と之に對する動神經の一定の反應との先天的聯合と謂ふべきなり。

第一本 本能の種類はいさ多けれど、吾等が下等動物と異ならざるは第一本能とも稱すべきものにして渴して飲を求め、飢ゑて食を求むる飲食の本能、一定の年齢に對して起る生殖本能及び父母（殊に母）が子に對する愛情の如き種族保存の本能の如きこれなり、此の本能はやがて慾望となりて發達し、更に進みては人類に於て多く見得べき第二本能と目すべき利己的要素

遺傳と個性

求となりて何物にても之れを我が有たらしめんとする食欲の萌芽となり、社交的動物なるの故を以て自己の存在を同類によりて認められんとする名聞の念となる。皆是れ吾等が動物の昔より繼承し祖先によりて傳へられたる先天の本能にして悉くこれ我が靈性を味ますものなり。

吾等の繼承し來れる本能は之れのみならずして中には靈性の微光を認め得べき知識要求の本能、美を愛好するの本能、他に對する同情の本能等を算し得べければ、本能を以て直に惡なりと云ふ能はざれど、其の最も著しき本能は慾望と密接の關係を有する動物性のものに於て殊に著しきを見る。

吾等は今、進化の過程にあるものなれば、其の身心には幾分の動物性を遺すといへども、別に神に向ふべき萌芽を存す。遺傳に遺傳を重ねて來りし吾等が又遺傳に遺傳を重ねて進み行く所は獸を離れたる至靈最高の境にあれば、此に人と獸との明かなる區別を認め得べし。しばしば云ふ如く人は一面獸にして他面は神たるべき資質を父母より遺傳し其の進化の過程は漸次に獸と離れんとす、これ人の人たるの資質にあらずや。此の人の人たるの資質を遺傳するものを普遍遺傳といひ、同じく人なりと雖も、其の間、亦賢愚強弱の差あるを特殊遺傳といふ、瓜の蔓に茄子の生らざるは普遍遺傳にして其の瓜に大小あり美醜あるは特殊遺傳た

人の地

普通遺傳
特殊遺傳

四稟質

り既に特殊遺傳せらる、個々其の資質を異にし人々其の個性を同じくせず、天下の廣き亦一人の同一身心を有するものあることなく所謂乾坤唯一人たり、之れを稟賦の性といふ。稟賦の性は人々同からずと雖も、而かも異中に同を求めて研究の便を計らんとする學者の查究は古來人間の稟質 (Temperament) を血液汁によりて分類して、多血質 (Sanguin) 神經質 (Melancholic) 膽汁質 (Choleric) 粘液質 (Phlegmatic) とし、近世の學者之れに新意味を付して個性の説明に供す。請ふ諸家の言ふ所を綜合して其の要を語らしめよ。其の之れを東西の人物に配當せるものは主として西村茂樹氏の「心學講義」に據る。

- 一 多血質 此の體質は血液の補給迅速にして顔の色美はしく、主として丸顔にて物に應じ易けれども、忘るゝこと速く、常に快活の狀を保ちて俗にいふ血の氣の多く煽動し易き質にして、氣早やなれども極めて樂觀的なり、其の長所をいへば鋭敏なれども其の短所をいへば輕卒なり。國民としては佛蘭西人は此の質に屬するものにして、個人としては平清盛、足利義政、織田信長、漢の武帝、唐の玄宗など此の體質なるべし。
- 二 神經質 先きの多血質の樂觀的なるに比して之れは悲觀的にして幽鬱に、先きの多血質の速くして弱きに比して速くして強き精神力を有し、俗に謂ふ苦勞性にて深沈寡黙なれば輕佻の恐れなれど、兎角隱遁主義に流れ、保守的にして進取の氣象に乏しく

遺傳と個性

思慮緻密なれど實行の力を缺き、顔面圭角多く身も亦瘦せたるが如く。猶太のエレミヤ、希臘のホーマー、伊太利のダンテ、獨逸のシルレル、支那にては屈原、陶淵明、杜子美、我が國にては菅原道真、鴨長明等此の質の人なるべきか。

三 胆汁質 筋力強健にして血液の運行盛んにして志謀膽氣大に且つ之れを強行する忍耐の力あり、如何なる抵抗に遇ふも屈せず、事を爲すに熱情あり、俗にいふ剛膽、腹の大きい人にて、多血質の如くに鋭敏なれど難に當て動かす、神經質の如く幽鬱ならねど思慮に熟す、即ち遅くして強き精神力を有する人なり、若し其の缺陷を云へば主我的にして同情の念に薄きにあり、古來英雄多く此の質に屬す、羅馬のシーザー、魏の曹操、唐の太宗、我が國に於て武田信玄、上杉景勝、近くは星亨の如きは此の質の人なるべし、此の質は之れを善に向はしむれば大丈夫たるべく、惡に向はしむれば暴虐の人たるべし。

四 粘液質 此の質は血管の運行平靜にして粘液の性强きものは重鬱にして遲鈍たるを免れず、されど其の質適當なる時は平凡なれども忍耐の力に富み、俗にいふ實體な人なるべし。米のワシントン、支那の孔明、我が邦の徳川家康の如きは其の最良なるものにして其の劣れるものに至ては下女下男に多し。

坪内博士は其の著「倫理と文學」に於て此の四稟質を詳説し、終りに要を示して多血質は「才子肌、世才家、感情家、空想家、又は肉體の慾に溺れる人、斯ういふやうな人を餘計含んで居る」神經質は「普通智慧者と稱する質である、策略家といふものも、から出れば、慷慨家、熱誠家、精神家、厭世家、懷疑家なども、から出る」粘液質は「愚人肌といふべきもので（中略）總じて慾氣の薄い樂天家は此の仲間である、君子、善人、篤實な人、實體な人、正直者、律義者、後生樂な人、恬淡家、冷淡家お心よし、ウスノロ、間拔、拔作、ボンツク、ぼん太郎、頓問、愚圖、意氣地なし、ぐうたら、甲斐性なし、おひきずり、などといふのは皆此中から出る」胆汁質は俗に豪傑肌といひ「剛腹家といふのも、これから出る。大いなる事業家、十分に斷行し得る事業家もこれから出る、沈着に大事を行ふ人も此の質、あの人ば落着いた人だな、眞面目に事業をやつて屹度仕遂げるなど評する、其の代り大泥棒もこれから出る、大罪人もこれから出る、鐵面皮な圖々しい、押の強い奴、糞度胸の据わつた、思ひ切つたことをする、非を遂げるなどといふも此の質」と説かれぬ、以つて稟質の特性を知るに足らんか。人の稟質は斯く四種に分類すべしと雖も、それは唯だ大體の傾向にして個々の人に對して彼れは何質なり此れは何質なりと明かに指示し得るは少し。或は多血三分に神經七分なるあり、或は胆汁五分に粘液五分を交へたるあり、或は各稟質の長所のみを有する

直接遺傳
間接遺傳

あり、或は各稟質の短所のみを有するありて、個々其の質を同うせず。吾等は此の同じからざる稟質を父祖より遺傳し來れるものにして、事多く先天の素因に屬す、此の遺傳に直接なるものあり、間接なるものあり、彼の子の父若くは母に似たるは直接遺傳にして、父には似ざれども祖父に似たりなどいふは間接遺傳（又隔世遺傳）なり。唯だ見易き祖父母のみならず、遠く數世を隔てたる祖先の稟質を受くることも少からず、斯く見來らんには吾等の稟質は殆んど先天的に固定せられて動かすべからざる運命に縛せられたるに似たり。されど此の稟質も亦周圍の境遇によりて變化せらるゝことなき能はず、同じく進化論を唱ふる中にてもダーウキンは此の遺傳に重きを置きたれど、ワイヅマンは、雙親の經驗并に特質の直に子に傳はるものゝみを見ずして、人は初より土地境遇等偶然の影響を受け、又雙親の膝下にあるの故を以て知らず識らず其れに同化せらるゝこと多しと説きぬ。先天的素因は略ぼこれを見たり、更に後天的素因に向つて研究の歩を移さざるべからず。

二、家庭の薰陶

父祖の個性が其の子に遺傳して其の性格に多大の影響を與ふるは生物進北の大法が指示する所にして之れを實驗に徴して否むべからざる所なれど、ダーウキンの云へる如く遺傳のみ

ダーウ
キンズ
ワイ
マン遺傳
家庭

を以て其の子の性格を論定せんとするは早計にして、實際に於てはワイヅマンのいふ如く人にはおのづからなる模倣の性能ありて常に近接せる兩親の氣風と態度とを模し、知らず識らずの間に其の性格に影響するものなれば、個性の後天的要素として第一に指を家の状態に屈せざるべからず。彼の進化論者の唱音チャーレス、ダーウキンの祖父はエラスマス、ダーウキンさて有名なる博物學者にして其の子はジョーシ、ダーウキンさて天文學者たり、ジョーン、スチュアード、ミルの父にセームスミルありて父子共に名を學界に走せ、頼山陽の父に頼杏坪あり子に頼三樹あり、伊藤仁齋の子に伊藤東涯あり、北村季吟の子に北村湖春あり、楠氏三代其の忠誠を傳へ、源家世々武將の資あり、所謂將門、將を出し、詩人の子多く其の想を傳ふる如き、一面より見れば確かに遺傳を以て言ふべからざるにあらざるも、他面より見ればこれ又家庭の薰陶が其の子をして親の如くならしめ、模倣の性能が自然に親の志を繼ぐに至らしめしにあらざるか。春風駘蕩たる家庭に養はれし子の自然に溫和の性を有し、秋風蕭條たる家庭に育まれし子のおのづから偏僻の性を具するは吾等が日常目撃するの事實にして、金殿玉樓に人々爲りし者と賤が伏屋に成長せし者との間に其の品位の異なるものあるも亦否むべからざる事實たり。されば雙親が子に施す薰陶の如何は其の子が生涯を左右するの力あるものにして、古來の偉人多く賢母に育まれしは史の正しく證明する所たり或る人が「芳野

家庭の
影響

偉人
賢母

個性の要素

山若木の花をおほひつゝ、そのかげの高くもあるかな』と咏じて小楠公が忠誠の一半は家庭の薰陶より出でたりさいひしが如き、北條時頼の母が破れ障子を繕ひて其の子をして天下の執権職に在て而かも質素の生活を送るの素を養はしめしが如き、又は體質虚弱なるヴィクトル、ユーゴーをして能く八十四歳の高齡を保ちて佛國文豪の華冠と稱せしめしが如き、英國の大宗教家ジョン、ウエスレーをして「予の今日あるは幼時に於ける母の感化なり」と云はしめしが如き枚擧に遑あらず、殊に家庭の個人に及ぼす感化は其の幼時に於てのみならず。生計の難易、配偶者の良否は直に其の人の社會的活動に影響し、生計の困難に忙殺せらるゝものゝ心内に餘裕なくして修養に志す能はず常に配偶者の爲めに苦めらるゝものゝ墮落の淵に沈み易く、生計に餘裕あるものには衣食足て禮節を知るの風あり、配偶者に慰安を得るものに品性の高きを見る如き其の事例に乏しからず。歐洲の外遊界に辣腕を振ひたる鐵血宰相ビスマークは自ら「予が妻に負ふ所の如何に多きは之れを口にする能はず」といひ、英國近來の良宰相たりしグラッドストーンは配偶者によりて、英國の富を以てするも買ふ能はざる心の慰安を得たる如きは其の一例に過ぎず。

偉人
神偶者

人は家庭に生れ、家庭に長じ、家庭に死す。人の生涯を通じて最も近接せるものは家庭なり、其の目睹し、聽聞する所の事、豈に其の個性を動かさざらんや。更に的確なる統計の事實に由つて家庭の人の性行に及ぼす影響如何を見せしめよ。

謀故殺
家庭

謀故殺は人の大辟にして社會の害毒たり、最近の統計を見るに、犯罪者一年に五百九十三名を出す、而して其の因由を探るに、

因	由	男	女	合	計
家内不和親族利益上の争		八一	一一〇		一九一
失愛嫉妬放蕩		一一七	五		一二二
怨恨報仇		一四五	五		一五〇
姦通		九	二		一一
貪欲		二	四		六
種々の因由		二七	四		三一
因由不詳		六	〇		六

以て如何に多く家内不和親族利益上の争ひが此の大辟の因由たるかを知るに足らむか、こは

自殺と家庭

これ最近の統計に於てのみ然らばならず、明治四十年の調査たる第二十八統計年鑑が斯の如き数字を示すと共に三十九年には總數五百九十三の中二百四十三、三十八年には總數五百八十二の中、二百二十四、三十七年には總計六百四十七の中、二百五十四にて常に其多數は此の家庭に因するものなり。更らに自殺者の統計を見んか。一年間總數九千一百八十名。日本國內に於て常に一時間に一名以上の自殺者あるの比例にして其の原因の主要なるものは精神錯亂の結果にして其數四千二百九十八名、其の他に於ては統計年鑑は之れを細別して、病苦に因る者一千六百四十、活計の困窮又は薄命を歎きて一千〇〇五、痴情又は嫉妬四百二十八、前非を悔い又は慚愧に因る者二百二十六、親族の不和に因る者、三百三十四、罪の發覺を懼れ又は刑の免れ難き爲め、百〇二、將來の事を苦慮して、六十八、商業の損失又は負債償却に困み、百二十八、淫逸放蕩八十六、親又は夫の懲戒譴責に因り、十三、離縁せられしを悲み、十九、夫又は子等の不行狀を歎て、十七、私通妊娠を憂て、三十三、老衰身の不自由を苦慮して、三十三、結婚を忌みて十八、身體の不具なるを歎て、十四、鬱憂、十六、憤怒の餘り、五、親又は妻子の死を歎て、十一、老耄、十二、縁談上の困難、三、其の他二百〇三、不詳なる者、四百六十八と示す、これのみにても其の如何に家庭に因するもの多きかを知るに足らむ。若し夫れ其の半數たる精神錯亂者も深く其の因由を尋ねたらんには多くは家庭の事情

のにあらざるなからむや。

更に煩を厭はず法律上の罪人として刑を受けたる者の父母の有無を見んか、

父母と犯罪

受刑者	父	母	存在	在	兒	女
	父又は母のみ存在	父母共に死亡	棄		男	女
	一六、一二五	二〇、五三六	五二		五八	
	九七二	一、五五一	六			
	一七、〇九七	二二、〇八七				
	二一、八三二					
	一一、二九〇					

雙親健在の者は犯罪少くして、其の一を缺くもの又は共に缺くものに犯罪多きは、之れ家庭の犯罪に及ぼす大なるものあるを看取するに難からず、其の資産の有無を徵せんか、これも亦家庭と犯罪との關係の密邇せるを知るに足るものあり。事實は吾等に示していふ。

個性の要素

受刑者	資産ある者	稍資産ある者	資産なき者	赤貧の者
	女	女	女	女
	男	男	男	男
	五九一	四、一六九	三二、七〇九	二一、一三〇
	一〇一	一八四	二、〇八五	一、五四四
	六〇一	四、三五三	三四、七九四	二二、六七四

犯罪と資産との関係も明かなる数字を吾等に示すにあらずや、恒産なき者に恒心なしの格言も亦確かに一面の眞理なり。

一斑を以て全豹を推すを得べくんば、吾等が上來略述せる諸種の關係に於て個人が後天的に家庭より受くる影響の頗る多大なるを得ん。されど人は家庭のみにて生存にするにあらずる自然あり。此の二を逸しては未だ完全に個人の性格を論ずべからず。次に云ふ所のもの則ち是れ。

三、社會の感化

個人に個人の稟質あり、家庭に家庭の特風あり、個人の集合に成り家庭の團結に成るの社會、豈に亦特種の稟質あり氣風なからんや。蓋し個人は社會の成員にして社會は個人の集團なり。集團たる社會の意志は成員たる個人の意志に成り、成員たる個人の意志は、集團たる社會の意志に動かさる。妙なる哉、人。自ら社會を作りて自ら其の爲めに規制せられ、自縛、脱れんと欲して脱れ難きものあり。古來英雄、時に回天席地の業を畫して社會の氣風を一變するものありと雖も、彼れ自身も亦時代の潮流に掀翻せらるゝことあるを免れず。時勢、英雄を生み、英雄、時勢を制す、よし人に聖凡の別あり、勇怯の差あるとも、斷然、時勢の外に立ち、毫も社會の氣風に浸染せられざるものあるなし、時代に時代の潮流あり、社會に社會の氣風あり、之を名けて時代の精神といひ、社會的意識と呼ぶ。茫々五千載、史の示す所は此の精神推移の行路にして、東西學者の頭を悩ます所は此の意識開發の狀態なり。歴史の證明する所社會學の研鑽する所、吾等は確かに個人の社會に動かさるゝものを看取せずんばあらず。個人は遺傳の大法によりて父母の稟質を繼ぎ、模倣の本能によりて其の氣風を受くることを免れず。生れて父母の膝下にあり、其の見る所のものは時代の風習が産み成

社會的
遺傳

せる衣食住にして、其の聞く所のものは社會共通の言語にあらずや、彼れは先づ其の言語を模倣して自己の意志を他に傳達する方法を學び、其の風習を繼承して社會の一員たるの素を養はざるべからず。其の見聞する所のものは社會の習俗にして、其の學修する所のものは時代の智識なり。此の如くにして養はれ、此の如くにして長ず、其の個性に影響する所のものは深且大ならざらんも得べきことならんや。況んや人は社會的動物にして、其の本能には模倣の性を有するをや。

個人は社會を離れて生存する能はず、其の衣、其の食、其の住、悉く他の力に頼り、共同團結相互補給して生存を完うするが如く、其の意識し行動する所も亦社會的意識を離れ、時代精神を超越する能はず、吾等が意識の素材となれるものは皆なこれ時代の經驗にして、吾等が行動の主因となるものは悉くこれ社會の順應のみ、偶々獨創の見あり發明の舉ありて、時代を超越し、社會を卓絶せるが如きの感なきにあらざるも、仔細に點檢したらんには多く前人苦心の苦果に基き僅に一步を轉じたるに過ぎざるを見む。人は到底社會の羈絆を脱する能はず、言語に縛られ、文字に縛られ、習慣に縛られ、流行に縛られ、輿論に縛られ、言語と文字とは意志發表の機關にして之れなくしては自己の思想を他に傳達する能はず、而して其の言語と文字とは獨創のものを許さずして必らず社會共通のものたらざるべからず、修辭

意識の
素材言語と
文字

習慣

流行

輿論

政治法
律

「學者は命じていふ、「造語を禁ず」と、自家製造の言語文字は以て思想傳達の媒たる能はざるなり習慣も亦これ社會が前代より繼承し來れるものにして、今や一個の形式となつて個人に迫り、其の以外に出づることを許さず、年賀は虚儀なりと思惟するものありとも、獨り之れを廢する能はず、送葬は不必要なりといふものありとも、父母の葬は之れを營まざるを得ず流行に至りては能く過去の習慣を打破して新時代の氣風を表現し、終には偉大の壓力となつて個人を動かすものあり、何人か今日社村の服装を以て宴席に列し得るものありや、何れの青年かチヨン鬚を以て白晝市街を往來し得るものあるや、輿論は時代精神の顯現にして社會意識の發表なり、一たび起つて翕然として天下之れに歸し何人も亦之れを如何ともする能はず、勿論、社會の意識は個人意識の反映にして時代の精神は時人各自の集合に外ならねば、個人の思念する所に誤謬あるを免れざる如く、輿論にも亦過誤なきを保せずと雖も、概れ公正にして個人の缺けたるを補ひ社會發展の進路を示し、其の服従を要求す、されど尙ほ是等は強ひて其の束縛を脱し難きにあらざるも其の政治となり法律となつて現れたるものに至ては絶對の威力を以て之れに臨み、曾ては個人の意志を以て作成したるものなりとも、今は脱るゝを許さずして悉く服従せざらんも能はざらしむ、佛國の社會學者チュルケーン社會の組織の要素を以て一種の壓迫にありとし、多數の思想、多數の習慣は積集して偉大なる

勢力となりて個人を壓迫し來る、個人が之れに服従する所に社會組織の根本要素存す。蓋し一面の眞理にして、個人は到底此の壓迫を脱する能はざるなり。

個人の社會に動かさる、此の如きを以て、社會の状態によりて個人の氣風を察するに難からず、文明の社會には文明の稟質あり、野蠻の社會には野蠻の性情あり、彼のモンテスキューの「壓制政體の人民は恐怖を以てし、君主政體の人民は名譽の念を以てし、和共政體の人民は徳義を以てし、各其の社會に生活しつゝあるものなり」と云へる如く政體の國民の氣風に影響するに頗る大にして、君主專制の時代に在つては國民殆んど權利の思想を缺如して、唯だ服従の徳を想ひ、立憲の政體となつて初めて權利の觀念盛んなり、昔は横井小楠尊王の大義を提げて諸藩を遊歴するや、三個の標準を設けて國情視察の網格とす。

横井小楠國情視察の網格

- 一 士の容體質朴なるは士風盛なる所、
 - 二 町家の繁榮なるは其の國の富みたる所、
 - 三 農政行屈き民心を得たるは仁政の行はるゝ所、
- と云ひたる由、偉人の着眼、自ら凡を絶す。社會の状態を以て個人の氣風を察すべし。個人市中に玩物多く賣り居るは奢侈の國なり。

の氣風を以て社會の状態を察すべし。これ個人の自ら社會を作りて、しかも自ら其の感化を受くるの證にあらずや、

産業の氣風

これ唯だ政治制度に於てのみ見得べきにあらず、産業の上よりいへば農産の盛なる社會に於ては、人の思想保守に傾きて識見固陋を脱せざれども愛郷の念深く、商業を本位とせる社會に於ては其の思想は進歩的にして其の智力は發達して頗る鋭敏なれども輕薄を免れず、比較的愛郷の念に薄くして、利のある所千里も亦避けず、漁業の地方は冒險の氣風に富みて節儉の念少く、工業は商業の如く進歩の思想を伴へども、常に一事に専らなるが故に眼界固陋を免れざる等、職業が一面個人に影響し他面に於て社會の風を爲す、こと見難きにあらず。宗教上より云へば活潑なる社會には活潑なる宗教を要求し、因循なる社會には因循なる宗教を要求し、其の宗教が又社會に影響し、我が國の例を見て云へば神儒佛三道の勢を得たる地方には保守の念厚く、基督教徒の多き地方には進歩の念盛んに、同じく佛教の中にも天台眞言の行はるゝ地方は上品なれども儀式に流れ、禪の行はるゝ地方は質素なれども疎豪の嫌あり淨土眞宗の行はるゝ地方は人品下れども未來の信念深く。日蓮宗の行はるゝ地方は現世的にして活潑の氣象ありて各々其の趣を異にする等、各種の方面より社會状態が個人の氣風を動かすの要素たるに少からず。

宗教の氣風

犯罪と
社會

先きに擧げたる家庭の如きも、其の組織の良否生活の難易も亦深く其の根底に入りて由來する所を尋ねれば社會組織の完否に萌すものにして、其の犯罪關係の如きは主として社會の産みなす所たり。刑事人類學者ケトローといふ「年々現はるゝ所の犯罪は吾等の社會的組織の必要産物たるに外ならざるが故に、之を改造するにあらざる以上は到底犯罪の減少を見ること能はず」と、又いふ「犯罪を爲すものは犯罪者其人なりと雖も、犯罪者をして犯罪を爲すに至らしむるものは社會即ちこれなり」と、社會の風俗習慣は個人を壓し、其の制度文物は個人を制し、殆んど人をして罪を犯さざるを得ざらしむるに至ることなきにあらず。罪は個人にありと雖も、個人を促して此の罪惡に陥らしむるもの社會與つて力あり。

個人と社會との關係は相互に主となり、伴となり初めは個人の意志を主として成れる集團も、すでに社會の意志主となりて個人を動かす、其の個人の意志は社會に現はれて社會の意志となり、其の社會の意志は又た個人の心に宿る、主伴交互するに雖も、個人の意志は弱く社會の意志は強し、これ人の社會の羈絆を脱する能はざる所以か、さらに外より此の社會的意識を制し、此の個性を束縛するものあり、之れを自然的なる風土の影響とす。

四、風土の影響

地と人

東西兩
洋の氣
風と地
理

地を離れて人なく、人を離れて家庭なく社會なし、家庭并に社會の個人に及ぼす感化薰陶大なるを認めたるの眼は此の暗黙の間に多大の影響を與ふる風土の關係を逸すべからず。時代にはおのづからなる時代の色彩あるを許したる吾等は又國土には自然に行はれたる國土の聲調あるを許さざるを得ず。試に東西兩洋に於ける國民の性格を比較し見よ、其處に不動の地理的關係を有するにあらずや、歐洲の地、山嶽起伏し縱横に國土を區劃す、これが爲めに古來一統の事業を立つるに難く、羅馬初め之れを席捲して未前の大帝國を組織せしも榮華は久しからずして北方蠻族の爲めに蹂躪せられ、其の版圖は分れて數個の獨立國となり、シヤールマン大帝も亦一たび統一の業を成せしも、帝の屍未だ乾かざるに國土は既に分裂を始め、其の後ナポレオン大帝あり、身はコルシカの孤島に起りて、絶世の偉略風雲を叱咤して殆んど全歐の覇たらんとして一敗地に塗れ、終に幽囚の身となるを免れず、歐洲の歴史は幾たびか統一せられんとして分裂したるの痕跡を示せど、支那の地は茫々千里、時に丘陵の國を劃するものなきにあらずと雖も、山嶽しからずして英雄の作業を妨げず、統一の大事は夙に太古に定められ堯舜禹湯を経て周の代となり、其の末に當て國土分裂して群雄割據、春秋戰國の時代を演ぜしも、分裂は永續せずして秦の始皇に統一せられ、秦亡びて漢亦統一の業を繼ぎ、漢亡びて三國の分裂となり、五胡十六國の亂となり南北朝の對立となりしも、地は之を

許さずして隋の統一となり、唐之れを承け、宋之れに継ぎ、元となり、明となり、清となり、幾度か分裂せんとして統一せられつゝあるを示す、統一せられんとして分裂する歐洲の民人は獨立の氣象に富めど、分裂せられんとして統一せる支那の民人は服従の精神を有し、彼れに權利の思想盛んにして、此に義務の念深き、共に地理的影響が鼓吹したるの聲調にあらざらんや。

史家はいふ、文明は河流に淵源すこ、埃及の文明はナイルの河畔に出で、小亞細亞の文明はユウフレテース、チグリスの河畔に發し、此の二派の文明は流れて西の方、希臘に入り、希臘の文明は更に西の方羅馬に入り、羅馬の文明は西方に汎濫して歐羅巴全土の文明となり、海峽を渡つて西、英吉利に入り、英吉利の文明は大西洋を越えて西の方、米合衆國に及び、合衆國の文明は又々西して森茫たる太平洋を横りて我日本に来る。これ一脈西洋の文明にして其の徑路に自然の指示あり、地理的關聯なしと云はむや。印度の文明はカンヂス、インダスの河畔に起り、支那の文明は黃河、揚子江の畔に出づ、二派の文明は東洋文明となつて、朝鮮に入り、又れ我が日本に来たる、これ斷じて偶然にあらず。地理を離れて歴史を研究すべからざるは何人も知悉する所、然らば其の歴史の原動力たる個人が地理風土の影響を蒙ること大なるも亦否む能はざる所なるべし。

文明と河流

人、生れて見聞する所、家庭及び社會に現はれたる人事百般のみにあらず、巍峩たる山嶽は其の雄姿を吾等に示し、澎湃たる海洋は其の絶調を吾等に通じ、葦花咲く野邊も水雞鳴く小川も、皆な吾等が日常の伴侶となり、不言の感化を幼けなき腦裏に浸染せしめたるにあらずや、故郷忘れ難し。

愛郷心

霜月正高鸚鵡洲。美人清唱發紅樓。郷心暗逐秋江水。直到吳山脚下流。

帝城春雨送春殘。

夜雨愁聽客枕寒。

莫入郷園使花落。

一枝留待我歸看。

さいへるものこれ唯だ詩人が悲調のみならんや。南洋浩渺の噴火島、時々爆發の慘を演ずる地に住する蕃民も、層氷積雪、四時殆んど天日を拜せざる北海の島民も、其の土を去ること好まず、と聽く、羈鳥、舊林を戀ひ、池魚、故淵を思ふ、人に愛郷の心あり、發して愛國の念となり、憂國の情となる、芙蓉の雲、琵琶湖の水は我が國民の誇にして芳野の花、松島の月は我が國民の深く心に印したるものにあらずや。人の國土を念ふ此の如し。國土の人心に影響する所、頗る大なるものあるや疑ふべからず、予、曾て「日本宗教地論」を著して其の地理的關係を示す、立論、主として宗教にありと雖も、亦以て風土の個性に及ぼす影響を看取し得れば煩を厭はず左に摘録せん。

風土の影響

火山國

(上略) 吾人は之れを我が島帝國の地理的形態に求めて、其の一を得たり。曰く我が日本は火山國なり、亞細亞大陸の火山脈はカムサツカ半島より千島に入りて、碁布せる群島となり、進んで北海道に雌阿寒嶽、有珠嶽、駒ヶ嶽等となり、奥羽に入りては一面中央山脈となり、南に走りて吾妻、盤梯の諸山となり、一面は日本海岸を縫うて鳥海山となり、妙高山となり、南洋よりせるものは臺灣、琉球を経て薩南列島となり、九州に入りて霧島山となり、阿蘇山となり、溫泉ヶ岳となり、四國に入り、本州に入り、終に北東の火山脈を合して富士火山帯となり、東南に走りて伊豆七島となり、硫黄島となり、小笠原島となり、我が日本は實に噴火山頭に舞踏するものなり、噴火山其の數實に百六十五座、其中三十七座は現に焔々火を噴くものなり。太古民人が是等の火山に對して疑懼の情を抱き、是を神視し、是を崇拜し恐懼して冥罰の及ばざらんことを祈りしは人情の當に然るべき所なり。聞く富士はアイヌ語、火神の義にして、有珠嶽も亦浮石を削り出す火神の義なりと、史前のこと今暫く云はず、歴史あつて以來、火山に贈位せるもの枚擧に遑あらず、出羽の鳥海が朝敵征伐に功ありとして位一級を進められ、伊豆の神津島、物忌奈神社が噴火毎に位階を上げられたる如き其の一例なり。若し夫れ現今著名なる火山が神社として如何に待遇せらるゝかを見れば、思ひ半ばに過ぐるものあらむ、富士山には官幣大社淺間神社

地震と
風氣

あり、霧島山には同じく霧島神宮あり、阿蘇山には官幣中社阿蘇神社あり、英彦山には英彦神社あり、大山には同じく大神山神社あり、湯殿山には同じく湯殿山神社あり、以て我が邦人が火山に對する信仰を見るに足らむか、然れども予の云はむと欲する所は此にあらずして寧ろ、火山と密接の關係を有する地震にあり。

我が島帝國は世界有数の地震國なり、日本全國を通じて平均一年の震數六百五十四、殆んど日に二回に垂んとす、桑田變じて海となるの光景は我が邦に於ては稀有のことにあらず。

象潟の櫻は波に埋もてれ

花の上こぐ蟹の釣舟

と西行法師の咏ぜし八十八島、九十九林の光景も、今は麥青く秀で、其の倂尋ぬべくもあらざるの類は到る所に詩人の魂を消せしむ。さればかゝる天變地妖の人心に影響すること深く、知らず識らずの間に邦人の氣象を陶冶して、何事をも一時的ならしめ、突飛的噴火山的ならしめ、持久の念に乏しく、忍耐の心薄く、發して萬葉の櫻となるの美はあれども、凝て百鍊の鐵となるの強なく、空理空論の迂を避けて現在の實を取らんことを欲し、死を見ること歸するが如く、さればさて隱遁厭世の風に染まず、何處までも活動的に向ふ所、

風土の影響

これ活潑々地たる禪宗の我が邦人の嗜好に投じ、現世祈禱を主とする天台、眞言乃至日蓮の諸宗の盛んに行はるゝ所にあらざるか。試にこれらの宗旨が全國に於ける配布を見るに、其の最も多數の寺院を有するの地方は地震の回数多き關東并に奥羽にして、天台は千葉、群馬、茨城、東京（別に本山所在地として滋賀）に多く、眞言は千葉、埼玉、東京、福島、茨城最も多數にして、本山所在地たる和歌山、宗祖有縁の四國地方に優る。日蓮は宗祖降誕の地たる安房、七里法華を以て有名なる上總を含める千葉縣最も多く、山梨、静岡、東京これに次ぎ、禪に至ては曹洞臨濟共に静岡に多數の寺院を有し、宮城、岩手、青森、山形秋田、長野の各縣に於ては禪宗（主として曹洞宗）、各宗寺院の上であり、之を西の方三重滋賀、京都、大阪、奈良、兵庫の各縣に於て浄土門（殊に眞宗）の多きに比しては何人も其の地理的影響の大なるを看取するに吝ならざるべし。

然れども日本の地理的特長は單に火山國たり、地震國たるのみならずして、亦實に世界無比の降雪國なり。これを矢津昌永氏が「雪の日本」（太陽第十卷第一號）に徴するに世界の寒地を以て目せらるゝ北米カナダのオタワに於ける二月より翌年に至る四ヶ月の降水量は二百三十二耗にして、これを悉く雪とするも、其の深さ六尺一寸餘に過ぎず、露西亞のモスクワは百四十七耗、これを同じ計算法を以てする時は三尺九寸たるを免れず、然るに

風雪と氣

我が降雪地を以て目せらるゝ日本海岸地方に於ては加賀の金澤は九百八十九耗にして正に二丈六尺一寸の深さに達すべく、越前の福井は二丈四尺六寸、能登の輪島は一丈八尺四寸越中の伏木は一丈七尺六寸、伯耆の境は一丈七尺二寸、羽後の秋田は一丈三尺に相當するといふ、雪は抑も何等の教訓を與ふる、想ふに雪の人生に及ぼす影響一二にして止まらずと雖も、かゝる多量の降雪が人類に與ふる最大の教訓は貯蓄心の養成にあり、龜田鵬齋が半年一日の晴なしといへる降雪地に於ては嚴冬の候は交通全く杜絶して、少くとも二ヶ月長くは六ヶ月に亘りて雪中に蟄居せざるを得ず、故に其の間の食料は之れを雪未だ降らざるの時に於て準備せざるべからず、こゝに於て貯蓄の必要は自ら感ぜられ、持久の精神、忍耐の氣衆は自然に養成せられ、永遠の計圖を畫するに至る、これ未來教たる浄土門殊に眞宗の雪國に於て隆盛なる所以にあらざるか。日本國中最も降雪量の多き石川縣は眞宗の隆盛なるの地にして、全縣寺院總數千二百四十七、而して眞宗は實に八百八十七、他の天台、眞言、浄土、臨濟、曹洞、日蓮、時宗を合せて僅かに三百六十三ヶ寺に過ぎず。富山縣に於ても眞宗は千百八十八ヶ寺、殘餘各宗は總計三百〇七ヶ寺、新潟縣に於ても亦優に各寺院の半ば眞宗たり、これ豈に偶然の結果として看過し得べきことならんや。これ僅に一端なり以て全體を察すべし。職業の人心に及ぼす感化は前節既に之れをいひぬ

其の職業は風土の影響を受けて各々其の便なるものを選び、海岸の人は漁業に従ひ、平原の人は農業を事とし、山國の人は樵業に就き、都會は商業に宜しく、村落は生産の地に適する等、悉く地理風土の關係にあらざるはなし、更に予が舊著「人格の養生」に云ふ所を繰返さしめよ。

偉人
山水

偉人、山水に生れ、山水、偉人を生むか、人は畢竟自然の兒なり、ヒマラヤの山高く、ガンダスの流清き所に、思想高遠、性行皎潔なる釋迦を産み、アラビヤ平原、熱砂千里、而して峻烈なるマホメットを生じ、コルシカの一島森茫たる海に臨む所に氣宇廣濶なるナポレオンあり、山遠く地廣き尾三の平原に織田出で豊臣出で徳川出づ、これ豈に偶然ならんや、山國の人は自由の精神に富み獨立の氣象を有するも、偏狹に失し頑固に流るゝを免れず、アルプス山系、峯巒の中にある瑞西、ヒマラヤ山脈中に獨立を保てるニーホル、ブータンの二國ある知きは其の例證にして、人國記の著者（北條時頼と傳ふ）は山國たる甲斐を以て人の氣鋭く傍若無人の事多しといへども、強勇にして能く事に耐ふと見、飛驒の國を評して、

健直にして愚なり、日本は廣しといへども、我が國の如きことなしと思ひ、他國の望もなし、井の中の蛙、大海を知らざる如し。

山國

平原國

さいひ、美作を目して「片意地にして人の教訓を聞入れず」さいへるは其の短所を認めて長所を逸したるの嫌なきにあらざれども、全くさることなしと云ふべからず。山國は沈思冥想には適すべけれど、實地應用には適せず、山國は修養の地にして活動の地にあらず、平原國は人文發展の地なり。されば此の國の人は卑屈に流れ服従に失し、彼の山國の如き獨立自尊の心に乏しく輕佻浮薄に陥るの嫌なきにあらざれど、寛裕にして快活なる長所を有す、所謂大陸的氣風なるものは此の地方に於て初めて認め得べきなり、黄河揚子江の流域たる支那平原若くはヴォルガ、ドニエプ沿岸なる露西亞民族に於て其の長所をも短所をも認め得べきにあらずや、之れを我が國の例に見るに、人國記の著者は淀河平原たる攝河泉の人情を叙して攝津は「武士にして町人百姓のなす如く」さいひ、和泉は譬へばはがれなき剃刀の如く」を爲し、河内を以て「雪のあしたの庭面の柳、たゆむといへども、終に折るゝことなし」をさし、尾張の平原を評して「國民巧才なる所あり」といへるも亦以て其の一斑を察し後べきにあらずや。

支那に於て江南江北其の趣を異にし、我が邦に於ては關東關西其の風を同せず、山陰山陽其の心を共にせず、歐洲に於ても南歐北歐其の氣を一にせざるを見れば風土が個性に及ぼす影響亦嗚々を要せざるべし。

第七章 修養の可能

一、個性と修養

個人の、性格遺傳によりて定められ、境遇によりて動かされ、毫も自己の意志を以て左右し能はざるものこそせば、修養の事終に無意識に了らざるを得ず、然り全然無意義の事なりと主張する論者あり。シヨーマンハウエルの如き其の最なり。彼れは宇宙の根本原理を以て意志とし、吾等が有する意志は宇宙其の者の本性なれば人性は決して變化すべきものにあらず。

各個人の性質は生來固定せるものにして技術を以て製作せらるべきものにあらず、其の根底に於て全く遺傳的のものなり。

と道破し、教育の力を疑ひて訓誨教化の方便を以て人性を改造せんとするは鉛を點じて金と爲さんと欲するが如しと嘲笑しき、シヨーマンハウエルの言は、よし哲學的空想として棄つるも、刑事人類學者ロンプロゾーの如きは犯罪者の骨相を調査して皆な其の生理状態を同す。彼等は自ら好んで罪を犯すにあらず、先天的遺傳の制約によりて斯く爲すものにして、

シヨ
マン
ハウ
エル

ロン
プロ
ゾー

遺傳
と
變化

改めんと欲して改むべからざるものあるに由るといふ。こも亦修養の可能を否定するものにあらずや。

彼等のいふ如く吾等の個性に遺傳的性向あるは否むべからずと雖も、遺傳なるものは決して保守的固定的のものにあらずして、變々化々する進化の大法を説明する唯一の根據たり、既に進化の大法を説明するに此の遺傳を以てす、其の固定的なるを許さずして變化すべきものなることを是認せざるべからざるは論理必然の結果なり。既に其の變化あることを是認す、修養を以て不可能なりとする理由、何の處にかある。殊に遺傳は僅に先天的傾向たるに過ぎずして、家庭に動かされ、社會に動かされ、自然に動かさるゝ如きものあるをや。自然、言はず。暫く之れを後章に譲り、人を以て變化せしめ得べきものを舉ぐれば家庭の教育あり、社會の教育あり。未だ生れざる前に於ても母の修養は直に胎兒に影響する胎教あり。「列女傳」に文王の母、

胎教

其の身あるに及んでや、目に惡色を視ず、耳に惡聲を聽かず、口に惡口を出さず、胎に教ふるを以てなり。

とあり「大戴禮」に、

周後の成王を身に娠むや、立つて跛せず、坐して差はず、獨處して居らず、怒るも雖も、

個性と修養

罵らず、胎教の謂なり、之を玉版に書し、之を金櫃に藏し、之を宗廟に置き、後世の戒と爲す。

さいへるものは是れ。

家庭教

出産後の教養に於て其の性格に影響すること大なるは前章云ふ所の如し。ヘルマンシルレルが兒童の小學校入學の際、心意發達の試験を行ひしに、某町にては二百九十七人の入學者の内自己の氏名を完全に發音し得るもの一人もなかりしは、兩親共に勞働者にして家に居ること少く家庭の注意不行屈の地方なりしを示せる實驗によりても、家庭教育の性格變化に力あるを認むるに難からず、されば發達せる社會に於ては兒童の教養を以て家庭のみに一任せず公共的に教育する學校制度を採り、以て家庭の缺けたるを補ひ、進んで國民全般の智能の啓發、徳器の成就を計る。これ國民教育の中堅なり。我が小學校令第一條に曰く、

學校教

小學校は兒童身體の發達に留意して道德教育及國民教育の基礎並に其生活に必須なる普通の智識技能を授くるを以て本旨とす。

と、我が學校教育の目的は此にあり。これを發程として中學あり、高等學校あり、大學あり外に特殊専門の學校ありて品性の陶冶、技藝の修練、智識の發達に資す。之れ皆教育者の力により外より導きて以て被教育者の偏癖を矯め、其の人格を完成せしめんとするに外ならず、

社會教

學校教育のことは自ら教育學の範圍に屬して此に詳論するの要なしと雖も、學校以外の教育即ち社會教育なるものに至ては吾等の論議と相渉ること多し。蓋し學校教育は教育者によりて具案的に施され、被教育者は半ば命令的に之れに服従せざるべからざれど、社會教育は施設者其の人に具案の事ありとも、之に依りて教育せらるゝと否とは全く個人の自由に存す、自由に存せりと雖も其の風化の個人に及ぼす力や大なり。何をか社會教育といふ、(社會教育あり一は社會的教育にして他は社會の教化制度なり)社會の教育も亦學校教育の人心の各方面に向ひて智育、徳育、美育、體育の四に分ち得るが如く、社會民人の智識増進の爲めには、

智育

- 一 圖書館の設置
- 二 通俗講演會の開催

等、其の主要なるものなるべし。書籍は智識の寶庫にして、通俗講演會は智識普及の良法なり。圖書館の有無は以て其の地の智識を卜すべく、通俗講演の開催は其の社會の程度を知るに難からず。頃者我が國に於ける圖書館の増設は智識の發展の結果にして、各地に於ける夏期講習會の開催の如きも亦人文進歩の一現象と目すべし、其の他博物館の如きも亦此の目的と美育とを兼ねたるものなり。徳育に於ては、

個性と修養

德育

- 一 道徳團體の設立
- 二 寺院教會の感化

に由るこそ最も多し。學校以内の德育は教育者之れを計るべけれど、一たび其の門を出づれば之を社會の教化に委ねざるを得ず。歐洲に於て教育が専ら德育を掌れる如き其の一例にして、我が國に於て寺院の徳性涵養に力ありしは何人も知悉するの事實なり。美育に於ては、

美育

- 一 美術展覽會
- 二 音樂會
- 三 演劇

の類を算すべし、これらは皆な以て國民の趣味を向上せしむるに力あれど、彼の徒らに公衆の嗜好に投ぜんが爲めに藝術の神聖を害し、妄りに世の喝采を博せんが爲めに下劣なる趣味を鼓吹するもの、如きは風教を害するものたるや論なし體育に於ては、

體育

- 一 體育場の設置
- 二 衛生組合の組織

の如きさいふべきか。體育競技の行はるゝ社會に健全の人多く、衛生組合の完備せる地方に病弱者少きも亦社會教化の一現象なり。

プラト

這般の社會教育が個人を感化すること多きは既に社會の壓力が如何に個人に及ぶかを看取したる吾等に取ては毫も疑ふ能はざる所。遺傳によりて定められたる吾等の稟質も此の如き家庭學校社會等の施設によりて動かさるゝ所多し、これ實に教育の可能なる所以にして、プラトーンが理想的國家の建立を以て初めて徳性を涵養せらるべしと説き、荀子が禮を以て外より性を矯むるを以て修養の道程と爲したるもの亦實に此現象に注目したるに由る。されど吾等は唯だ外より教へらるべしといへる意義のみに於て修養の可能を説きて満足するものにあらず、吾等の云はんとする所は寧ろ内面的に深く人心の根底に入りて此の可能を承認せんとするにあり。

二、修養の理想

性を論ずるものに諸種の説ありて、各々其の歸趣を同うせざることは業に已に之れを述べたる所にして、其の論議の趣向する所も亦之れを見たり、想ふに彼等が善といひ惡といふは要するに着眼の差にして必しも根本に於て異なるにはあらず、其の惡なりといふものは主として第二性に立論し、其の善なりといふものは主として第一性に立論す、第一性は宇宙玄妙の靈體と脈絡貫通するものにして、子思の天の命之れを性と謂ひ、プラトーンのイデアの面

第一性

修養の理想

第二性

影を指し、程朱の本然の性といひ、道心と示し、陸王の心即理と説き、佛教に眞如佛性と説じ、ストア派の神性といひ、基督教の神の子と語り、カントの理性といひ無上大法と斷じ、グリーンンの眞我と示すものにして、第二性は此の本然の靈性が昏惑せられてイデアの都を迷ひ出で終に物質の爲に繫縛せられたる吾等が今の心にして、程朱の所謂氣質の性、物欲に掩はれたる人心、佛教に所謂生死流轉の凡夫、信業の生みなせる心、基督教に所謂罪の子たる現在の身たり、更に語を換へていへば吾等が遺傳によりて繼承し來れる本能並に稟質にして外、必然の理法に縛られ、内、先天の宿業に汚さる、誰か之れを見て惡傾向を有せずと云はむ。此に着眼するもの、惡を矯め非を正すを以て修養の要義とし、禮儀を談じ形名を説き、神の力をいふ等、主として客觀的修養に立論するこれ亦當に然るべきのことたり。されど、其の惡を去り非を正して汚されたる心鏡を再び明かに、曇りたる靈體亦此に輝かんか誰か其處に本源の性あるを認めざらん。此に着眼するものの本心を磨き木性を發揮し無碍自在の心地を開拓するを要とし、或は禪定、或は靜坐、或は冥想、或は存夜氣、或は養浩然、或は寂靜、或は不動を説き、重きを主觀的修養に置くも亦當然の事たり。修養の法異なれり雖も其の歸する所や一、吾等は一を取つて他を捨つべからず、二者交々用ひて以て品性の陶冶人格の完成に資せざるべからず。太田錦城曰く、

性の三別

性は人の天に受けて生るゝを云ふ。生るゝ先を譯したる妙なり。性は一なり、されど三性を立つべし。一には道德の性といひ、仁義孝悌は人の天より稟けて生るゝものなり、孝經の父子之道天性也、中庸の徳性、孟子の性善、皆なこれなり。二には情欲の性といふ、人の情實、私欲の異、又天より稟けて生れざるはなし、孟子の食色性也といふ、又目之於色四肢之於安佚性也といふ、これなり。三には、形色の性といふ、人心の短長、面色の黒白の異、是又天より稟け生れたるもの也、孟子の形式は天性なりといふ、これなり、

さ、錦城の所謂形式の性は體質遺傳にして、情欲の性は此に謂ふ所の第二性、仁義孝悌道德の性といへるもの、これ則ち第一性なり。第一性は天より稟けたる性にして人々異なるを見ず。人々異なる所なく悉く本有の靈光を藏し、個々先天の理性を具すも雖も、教へずんば知ることなく修せずんば現るゝことなし、此に於て外より之れを誘發するに教育なるものあり生れて呱呱の聲を放つや父母之れを鞠養し、漸く學齡に達するや社會は之れを容るゝの學校を設け、以て其の本性の誘發を務め、教ふるに時代の智識を以てし、導くに道德の要義を以てし、新時代に處し、活社會に居して阻む所なきの人たらしめん。これ幸なるに似て不幸なるものあり。人生、字を知る憂患の始、其の未だ教育せられざるや、知る所少きが故に迷ふ所も亦少く、禽獸に等しきの行を敢てして其の不可なるを知らず。

紀州の山奥に其の父を殺して其の罪たるを知らず、自らいふ、我れ我が父を殺す何の不可
 かあらん、況んや其の父は暴飲時に亂行を演じ他を害する多きをやと、紀の南龍公之れを
 刑せんとして其の無學にして人倫を辨へざるを憐み、これを藩營の使丁の宅に養はしむ。
 居ること三年、諸生の言説する所を聽きて孝道の肝要なるを知り、蹶然として先非を悔い、
 自ら進んで刑せられんとするに至れり。

此の事、人口に膾炙す、これ教へられて其の過を知りしものにあらずや、知るが幸か、知
 らざるが幸か、人の幼なるや知るとなし、唯だ氣質の性によりて行動するが故に煩悩なし其
 の長じて自我の存在を自覺するの齡に至るや遺傳によりて稟け得たる氣質の性(第二性)と、
 教養によりて誘發せられたる本然の性(第一性)との衝突を生じ、外、必然に支配せられて、
 内、自由の燃ゆる如きあり心内の競争甚しく、悶々懊惱の域に遭遇せざるもの少し。此の時
 に當ては他より我を導く教育の手は既に離れて獨り自ら教へ獨り自ら導く修養の期に入り、
 遺傳と教養とによりて造られたる我が品性を向上せしむるに墮落せしむるは繋りて一に我
 が肩上にあり。試みに人心發達の徑路を檢するに、幼時にあつては外界に順應して反抗の念
 薄かりしも、長ずるに従ひて自我の存在漸く明かに、外界に對する取捨安排の心を生じ、物
 欲の誘惑愈々多くして、本有の理性も其の光を蔽はるゝを好まず、第一性に従ひて靈の慰安
 を得んが、第二性に驅られて本能の満足を買はんが、諸種の社會教育は其の墮落を防がんこ
 すれど、周囲の事情は又向上を妨ぐるに吝ならず、一代の運命此に決せられ、順逆の二路此
 に岐る。

俊傑馬上郎。 揮鞭指楊柳。 謂言無死日。

終不作梯航。 四運花自好。 一朝成萎黃。

醍醐與石蜜。 至死不能嘗。 (寒山)

人生の危機は此の時代にありて修養の要亦此の時より切なるはなし。

此の時、此の際、吾等は如何に我が心内を調理し、如何に我が四周を圍繞せる誘惑に打ち
 勝つべきか、我が氣阻み、我が心迷ふ、されど一度奮勵一番、第一性を提げ來りて心の全面
 を支配せしめ、自己人格の中心より迸り出でたる良知の靈泉を以て物欲の汚穢を淨め、心裏
 の奥底に潜める本有の徳光を以て煩悩の闇を破らんが、第二性は全く第一性に隸屬して其の
 用を爲さんことを欲し、曾ては外界の爲めに左右せられたる吾等も、今は却つて外界を左右
 し、八風吹けども動ぜざる泰山の如くにして、亦能く土壤を讓らざる寛容の量を具ふるに至
 らん。此の不動の心念と寛容の度量とあつて能く自ら肅む秋霜の如く、人に接する春風の如
 きの品性を養ひ、徒らに他に順應して自己何等の操守なき凡庸の徒たるを免れ、事毎に自我

を主張して反抗の念は悶々の情となり獨り自ら苦むの愚を離れ、悠然凡俗の上に立ちて、然かも凡俗を攝取し塵上の明鏡、妍醜の來るに任せて、毫も其の光を妨げず、天空の大月、雪の去來に任せて毫も其の明を失はざる如く、身は塵俗に處するも、心は清淨の境に住し、行は必然の理に支配さるゝも、靈は自由の天地に逍遙するを得む。心、此の一境に繋るが故に悉く差別の事象を超越し、又時空の檢束を受けず、臨機應變、應用自在、以て新時代の新要求に應じ、新運動を試みるに足らむか。第二篇以下論ぜんとする所のは實に此の境地に至らんとする手段たり、方法たり。

第二編 修養の方法

第一章 理想と現實

一、修養の困難

吾等が全格を發揮して乾坤手に在り萬化身に生ずるの力を以て世に處し事に當るは修養の極致にして決して不可能の事にあらずと雖も、人生蹉跎多く、事毎に心と違ふ。自ら宇宙の靈性を稟け得たりと思惟すべき吾等の身抑も幾許の力がある。身長僅かに五尺、これを一億九千六百萬九千萬方哩の地球に置き、更に直徑に於て地球の百倍強なる太陽の光熱を受けて生育す、地球と太陽との間、九千二百七十萬哩、されど之れ僅に太陽系中の一部のみ、太陽は此の地球の外に水星、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星の七大遊星と四百有餘の小遊星を率ゐて天の一方に覇たり、聞く太陽と海王星の距離は實に二十七億八千哩。されど宇宙の大はこれを以て限られたるにあらず、太陽以外に四千餘座の恒星ありて、其の最も太陽に近きものも亦太陽と海王星との距離に三千七百倍し、其の遠きものに至つては殆んど

宇宙に於ける人

微小觀

算數を絶す、然かもこれ僅に今日に於て究められたる一小部分にして、全宇宙の大は終に其の涯際を知るべからず、涯際なき此の宇宙の中に五尺の身を以て抑も何事かを爲し得べき、吾等が身は大海の一浮漚のみ。更に其の此の世に生存するの時間を見よ、天地は無始無終にして、宇宙は往古來今を貫き、生物あつてより幾億年、人類あつてより幾十萬年、而して我が世にある僅に五十、七十を以て古來稀れなりとす。天地の悠久にして宇宙の永遠なるを想へば、吾等の一生は露の乾ぬ間の朝顔にも似たらすや。然かも人生の果敢なきは之れに止らずして無常の風、時を擇ばず。老少亦定まる所なきに似て、朝に紅顔世路に走るの人、夕には北邙一片の烟と消ゆ。

行く川の流れは絶えずして、しかも、もこの水にあらず、よごみに浮ぶうたかたはかつ消え、かつ結びて、久しく止ることなし、世の中にある人々住家と、又かくの如し。玉敷の都のうち、棟を並べ鬘を争へる、高きいやしき人の住ひは、代々を経て盡きせぬものなれど、是をまことかきたづねればむかしありし家は稀なり、あるは去年やぶれて今年は作り、あるは大家ほろびて小家となる、すむ人も之に同じ、處もかはらず、人もおほかれごいにしへ見し人は、二三十人が中に僅に一人二人なり、朝に死し、夕に生るゝ習ひ、只水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る。又知らず、

人生苦

價額に違す。これ實に吾等が處世の劈頭に來るの困難にあらずや。人皆な其の生存の爲めに心身を勞し、我も亦其の渦中に入り、激甚なる競争を演ぜざるべからず、而して此の身は日に老境に向ひて活力の衰ふるを覺え、時に病魔の襲來を受くるも亦た競争の地を離るゝと能はず、一たび競争の地を離れんか、復び之れを得るに難く、浮漚に似たる此の身だに支ふることを得ず、一身既に支へ難し、何ぞ全人格を發揮して修養の理想を實現することを得ん、人生の苦楚はこれに止らず、生別又死別を兼ね、杖とも柱とも頼みにし先輩は我を棄て、黄泉の客となり、半生の伴侶と頼みし愛しき人にも相別るゝの時なき能はず、外界の辛酸いよ／＼加はりて、内に慰安の途なく、浮世の義理に迫られて怨みたる人とも遇ひ、憎める人にも會せざるを得ず、意に満だざる事に當り快からざる物に處し、行はんとする道を遮られ、爲さんとする業は妨げらる天下意の如くならざるもの豈に啻だ鴨川の水、壽語六の賽、山法師のみならんや。人生萬事、我が意に違ふ。此の苦境に處し、此の難事に當る。然かも其の身は小にして其の力や弱し。徒らに外界の推移に連れて醉生夢死する尙ほ且つ難事たり、況んや乾坤手に在り萬化身に生ずる底の大業を畫するをや、我に無限の靈力あり、遠く天地の神秘に觸れ、無礙自在の用ありと聽けど、現實の我が身には其の自在は制限せられ、其の力用は束縛せられ、脱せんを欲して脱し難く、免れんと欲して免るゝに途なし、理想は高く無

不如意

理想と現實

人口と食物

假の宿、誰が爲めにか心な惱し、何によりてか目を悦ばしむる。其の主と住家と、無常を争ひ去る様、いはゞ朝顔の露に異ならず、或は露落ちて花残り、残るさいへども、朝日にちりぬ。或は花萎みて露尙きえず、消えずさいへども、夕を待つこゝなし。(方丈記)

小にして短、然かも此の小身を持して此の短命を保つ、尙ほ且つ非常の努力を要す。太古草昧の代、人は水草を追うて移住し、食を尋ねて漂泊したり。春に於ては生活は比較的容易なりしも、時代の経過は人類の増加となり、人類の増加は食物の缺乏となり、幸に世運の發達は生産力の増加となりて食物の缺乏を補ふに力ありと雖も、數學級數的に増加する食物は未だ全く幾何級數的に増加する人口の需要を充たす能はず、現時文明各國は皆其の供給を殖民地若しくは外邦に受けざるなし。若し其の國內の生産物のみを以て之れに充つるこせんか食物の最も多量なりと云はる、埃太利匈牙利に於ても一年に六日の不足を生じ、佛蘭西は三十五日、獨逸は八十七日、英吉利の如きは實に二百八十六日の不足を生ずといふ。我が國の如きも、米のみを以て算すれば一年四千九百五萬二千〇六十五石にして、之れを人口四千八百十六萬八百二十五人に配當すれば一人約一石強、一日約三合に當り、漸く露命を繋ぐに足るが如しと雖も、此の米悉くが飯料に供せらるゝにあらずして、酒其の他の材料に供せらるゝもの多きが故に年々食料に不足を生じ、外國より輸入せらるゝもの米のみにて三千萬圓の

礙の一境にかゝれども、身は囚はれ現實の囹圄にあり。理想の追求する所は眞喜美の圓滿にして、現實の状態は偽醜醜の集團なり。理想は理想として消え行くべきものにして、現實の缺陷のみ獨り吾等に殘るにあらざるか、理想なくんば則ち止む、内に理想の輝あつて、外之れを行ふ能はざるほど世に悲惨なるはなし。理想と現實、抑も何の時にか融合すべき。尙ほ少しく語らしめよ。

二、現實の悲哀

悲むべきは吾等が今の身なり。なまじひに追求すべき理想を有するが故に、現實の悲哀常に最も切なるを覺ゆ、曾て「中年の悲哀」を稿して自家の感想を披瀝す。採て以て前節の缺けたるを補ふに足らんか。

希望は光にして追悔は涙なり、希望の光薄らぎて追悔の涙いさゞ繁しきは中年の悲哀にあらずや、青春の心失せにしこは思はれど、曾ては紅顔の美少年、今は鬢邊既に數莖の霜を戴くに至ては、誰か我が生の短縮せられ、我が存在の否定せられつゝあるを感ぜざらむ。

花に悲み露に泣く青年の悲哀は、優しき詩的美を以て彩らるれど、人生の逼迫より來る中年の悲哀は些の美趣なき現實的のものたるを免れざれば、相思の熱情して我、吾を忘れ「天

存在の否定

青年の
悲哀の
中年の
悲哀

の原ふみささるかし鳴る神も、おもふ中をばさくるものかは「さいへるが如き美はしき戀は中年には見る能はずして寧ろ醜き性慾的の戀のみ残れるにあらざるか、中年に美しき戀なしは云はず、されど一意之れに向はんには餘りに思慮の熟して低徊願望の餘裕あり。相思ふの人に添はれずして煩悶懊惱氣も狂はしくなりしは青年の昔にして、今はかゝる場合に於ては唯だ目的の不成功によりて感ずる不満の心あるに過ぎざれば中年には失戀の悲哀なしと云ひ得べからざるにあらず。殊に普通の狀態として此時代には既に配偶者の存すれば、若し失戀類似のこゝろありせば、そは配偶者との別離より生ずる悲哀に外ならじ、如何に情熱の褪せたる中年者とても配偶者の死に對して悲哀を感じざるものはあらじ。されど其悲哀は自ら青年時代と趣を異にして、多年影の形に添ふ如く自己と同體となし來りしもの、缺損によりて生ずるの悲哀にして其の本質は頗る現實的のものなり、唯だ青年時代の追憶が之に加はりて此現實的の悲哀を美化して詩趣あらしむるにあらざるか、月下相携へし昔の夢、花前相語りし當時の思ひ出を除きたらんには、此悲みは頗る自利的の者なるやも知るべからず、情には脆き女の心より見るも、青春時代に離婚を拒むは情緒纏綿相離るゝを厭ふにあれど、中年時代のそれは身の振方を案するを主とせるにあらずや、所謂二十後家は立ち三十後家は倒るの俚諺は確に一面の眞理を道破したるの言なり、青春の夢今覺めたり、理想にあこがれしは過去に

生活難

糊口の
途

屬して眼は唯だ現實にのみ注ぎ來る中年の悲哀は靈にあらずして肉にあり、如何にして慰められんかとの問題にあらずして、如何にして食はんかとの問題なり、社會は學窓より眺めたるが如く簡單なる者にあらず、人生は机上に論じたるが如く單純なるものにあらず、曾ては霜を隔て、花を見るが如くに感じたりし社會人生は今觀面に其被覆を脱して我が行くては蜀の棧道よりも嶮しき懸崖の一路あるのみ。行路難！行路難！これ實に中年者が頭上に下れる痛苦にあらずや。試みに青年の業を求むるものに聽け、彼等はいふ、我は政治家たらんと欲す、我は文學者たらんと欲す、我は實業家たらんと欲す、各々其志す所を告げて其道を得むとす。しかも中年者の業を求むるものに聽け、彼等は一齊に糊口の途なきかといひて其業の何たるを云はず。憐れ、彼等は糊口に急にして其業を選ぶの餘裕たも有せざるなり。人生に於ける至難の問題は如何にして生くべきかの問題なり、中年時代は切實に此問題に觸れ、諸種の痛苦と夥多の悲哀とは皆な之れを中心として起る、此に於て彼等の多くは青年時代の理想を放擲して小成に安んじ、唯だ食はんことを思ひて他を思はず、當年の秀才、碌々として生きんが爲に生くるの凡庸漢と化石し、僅かに家庭の團樂を得て、せめてもの慰藉を爲すに至る。夕顔棚の下涼み、晚酌の膳に臨める彼等を見て幸福なりといふは、餘りに彼等を侮蔑したるの言なり。往年の志望を追憶して現下の境遇に至るの時、知らず、酒杯に落つる涙な

現實の悲哀

時代遅れ

からすや。
 遮莫、好運、我を驅りて志望漸く達したりとも、中年者には更に深刻に更に痛切なる悲哀の動機あり。虎狼の後より我を追ふが如く、時代の進運は急激に、これを享受する青年の意氣壯なるが故に、新進の人才は數歩の後に立ち、少しく躊躇すれば所謂時代遅れとなつて生きながら葬られんさし、前途を見れば人生剩す所幾年ぞ、下に深淵湛へる絕壁は我が墜落を待つて行くてにあり。「嗚呼終に死せざる能はざるか」願れば半生、我何をか爲せる、秋風蕭條、我が影の消えゆくを想ふ。人生豈に此の如き悲痛あらんや。

死の道

髪を染めて戦陣に臨みし古武士を珍とする勿れ、中年者流誰か我が思想に染むるに新しき色彩を以てし時代に遅れざらむことを望まざるものあるべき。壯氣未だ消えず、心は青年と伍せんとして我が氣萎み我が力阻むを想ふ、老年者は既に諦め了れり。中年者は諦むる能はず、諦むる能はざるが故に痛苦一層深く、或は自暴自棄に陥りて爲し得べきの力を抛ち、或は超絶主義を執りて浮世のすね者となり、或は成功を急ぎて手を投機事業に下し、終に健全なる社會と没交渉たらんとす。中年者の心情惘然すべきものあるにあらずや。

萬人悉く感想を一にせずと雖も、中年者に此の悲哀なきはなし、これ人生の現實なり。現實に悲哀多し、されどこれ吾等が理智明かならざるの眼に映じたる悲哀にして、執意強から

缺陷の世界
圓滿の心

ざるが爲に招ける痛苦にあらざるなきが、人生に缺陷多しといふ者はこれ自ら心に缺陷あるを示すものにして、悲喜苦樂亦我が心に出づ、豈に修めて除き難く、養うて轉じ難きことならんや。明の視世祿いふ、

世界はもと缺陷、人心はもと圓滿、吾人は當に圓滿の人心を以て缺陷の世界を圓滿にすべし、當に缺陷の世界を以て圓滿の人心を缺陷にすべからず。

さ、悲む勿れ。外に我を苦むるの事情ありとも、内に我を慰むるの心境あり。修養は其の根底を此の境地に置かざるべからず。

三、實在の風光

人生、缺陷多く、現實、悲哀に富む、されど是れ豈に人生の全面、現實の一切ならんや、靜かに其の眞趣を味へば、他の半面に於て之れを圓滿にして之れを慰藉するもの存するを看取し難からず。單に缺陷と悲哀との一面を見て喪心落膽し、塵俗、吾を累すとなすものは未だ人生を洞察し現實を理解せるものといふべからず。其の暗黒面を見れば涙の谷なり苦の海なり。秋風落葉、四顧寂寥、蟬蛸に似たる生は逼迫せられ、毒蛇に等しき死の手は常に頭上を去らず、人は唯だ利を事とし、世は長へに修羅の巷に似たれど、其の裏面には人々相和

人生の
二面

實在の風光

して温情薄くが如く、個々業を盡くして然かも相侵さず、春風駘蕩花笑ひ鳥謳ふの光明面あるにあらずや。悲喜相對し、苦樂相待ち、生死も亦相依るもの之れ人生の現實なり、歡樂極つて哀情多きは月滿ちて虧くるが如く花開いて散るにも似たる一面の事實なれど、哀情極つて尙ほ一道慰安の境あるは霜雪の下に春草の苗々たるに等しき一面の現象ならずや。

宇宙の大を以て我が小をいふ、小は小なりと雖も、此の小なるもの亦彼の大なるものを離れず、天地の悠久を以て我が生の短きを啣つ、短は短なりと雖も、此の短なるもの亦繋つて彼の悠久なるものと結ぶにあらずや。暫く宇宙の根本、天地の實在に向つて其の風光を看取せしめよ。

精緻周到の眼を以て天地の事物を觀察し、宇宙の現象を徹見す、森羅萬象、個々其の相を異にし、物々其の狀を同うせず、乾坤又一の同形同體のものあるなし。一葉頭上萬顆の露、露さまぐの趣あり、

よしの山霞の奥はいかならん

見ゆる限りは櫻なりけり

春山一抹の雲、仔細に點檢すれば、花々其の態を異にす、哲學者の叫んで個別の理といひ獨立の義とする者これなり。之れを人に見る、人々其の面貌姿態を異にし個々其の性情を同

宇宙と人生

個別の理

變易の相

うせず、甲の好む所、必らずしも乙の好む所にあらず、丙の易しとする所、必らずしも丁の易しとする所にあらず、戊己庚辛亦各々異なるものあるは略ぼ上來説述する所の如し、個別の理や疑ふべからず。

更に時間的に其の存在を計らんか、宇宙萬象又一として變易せざるものあるなし、満つる月に虧くることあり、咲く花に散る時あるが如く、期に長短あり、時に遲速の別あれど、

萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草

づれか秋に遇はで果つべき

人に千年の壽なくして、地に萬年の榮えなし長へに動かぬ姿と立てられし山容も、萬古變ぜずと見られし水態も、悉く變易の運に遇はざるはなく、進みては吾等が住める地球、これに光熱を分與する太陽も、皆な此の變易の渦中のものなり。無常の風に誘はれ生死の巻にさまよふもの何ぞ唯だ人のみに限らんや。

宇宙の萬象は空間的には個々差別にして、時間的には物々變化の相を具す。これ一應の觀察なり、皮相上の瞥見のみ。更に銳利の眼光を以て此の異中に同を求め。變易の中に不變あるを見んか、驚くべし、曾て差別と見たり、個々の異相は皆なこれ同一體にして、先きに變易と見たる物々起滅の狀は唯だこれ不變海上の萬波千波に過ぎざりしなり。一月千本の櫻花、

同一の理

實在の風光

花々何の異なる所がある、萌ゆるさひ枯るさ見たる野邊の草、千秋何の時か盡くるの期あるべき、異別と見たるは假相の上のみ、變易と見たるは現象のことのみ、人々は其の面貌と性情を異にす、しかも其の人たるや異なるなく、羽毛鱗介の族其の動物たるに於て人と相同じく、巖角に倚る老松も、道の邊に咲く野菊も、其の生物たるに於て人と其の質を共にす、若し夫れ其の原質に廻りて之を探らんか、土石と人と何の異なる所ぞ、同じくこれ元素の抱合にして等しく皆な實在面上の假相たるを見ずんばあらず、天地は同根にして萬物は一體たり王陽明いふ、

一氣相通す

天地萬物は人と原是れ一體なり、其の發露の最も精なる處、これ人心一點の靈明なり。風雨露雪、日月星辰、禽獸草木、山川土石、そも只だ一體なり、故に五穀禽獸の類は皆な以て人を養ふべく、藥石の類は皆な以て病を療すべし。只此の一氣を同うするが爲の故に能く相通するのみ。

と、中江藤樹はいふ、

萬の物は皆な大本より生ずれば四海の人悉く連れる枝なり。

と、これ唯だ吾等が架空の思索に止らず、實驗科學は之れを證明して餘りあり、彼の詩人ゲーテの「動物植物は其の起原を共にし、漸次發達して一は高等植物となり、他は動物となりて

不變の理

無窮無限

終に人類の如き高等のものに達せり」といへるを以て想像上のことと思ひしは昔の夢にして近並科學の精髓たる進化論は人類の祖を推して動物に至り、其の動物の祖を推しては終に動物共同の祖たる單細胞に至らざるを得ず、此の單細胞を組成するの元素は無生物と異なるものにあらざらるを發見し、源に廻り本を尋ねては混沌微細の一物の普く萬有に渉るものあるに達せざるを得ず。而して那箇の一物不生不滅思索の推す所、實驗の證する所、吾等は空間的に萬物一體の理を否認する能はざると共に又時間的に不變の本質あるを拒絶する能はず。哲學者フイヒテはいふ「天地萬物は無始無終の聯關相續にして永劫に互りて斷ゆることなし」

と、科學の根據より宇宙を見たるヘツケルはいふ、

- 一 宇宙は永劫的にして無窮無限なり。
- 二 其の本質は物質と勢力との二屬性を有し、無限の空間を填充し、永劫の運動を爲す。
- 三 此の運動は無限の時間に互りて渾一的の發展を爲し、其の間死生消長の周期的變化あり。

と、生さひ死さひも本體に於て何の變化あるにあらず、渾然たる宇宙、往古來今一物を増さず、一物を減ぜず、然かも其の増減なき本體の上に増減の相を現じ、生死なき實在の上に生死の變を示し、平等一如の理上に個々差別の象を具す、一は即ち多にして、多は即ち一

實在の風光

變化の當相の奥には不變の本體あり、不變の本體の表には變化の當相あり、無一物の處、無盡藏、花あり月あり樓臺あるもの眞に宇宙の妙趣なり。此の妙趣を看取して我が微小の身を見る。小なりさいへども、宇宙と其の體を共にし、短なりさいへども、天地と其の命を一にす、予曾て平易に此の理を説明していふ。

吾等の身體は時間的にも空間的にも有限なるものであるが、此の有限なる身體は決して宇宙の外にあるのではない。上下四方を宇さいひ、往古來今を宙さいふ。で、此の宇宙さいふものは時間的にも空間的にも無限なるものである。既に無限であるから絶対全一で。相對差別のものではない。相對差別のものではないが、又相對差別のものを容るゝ、この出來ない不完全不自由のものではない。されば此の宇宙も吾等とは全く關係のないものではなくて、微小なりさいへども、吾等も此の宇宙の一部分である、一部分を缺けば宇宙を以て完全なるものさいふことは出來ない吾等の存否は直に宇宙の不完に影響するのである。吾等と宇宙との關係は水と波との如きものである。波には生滅の相あれども、其の本體たる水は不生不滅である、しかも此の水を離れて波なく、此の波を離れて水なし。波たる現象は即、水たる實在である。其の波には怒濤あり、狂瀾あり、細漣あり、小波あり、或るものは山の如くに動き、或るものは水沫の泡と消え、千狀萬態異種多様であるが、其の水たる上より見れば悉くこれ平等一如、別に異りはないのである。宇宙の現象も亦又此の如く千狀萬態異種多様一として同じきものはないが、其の本體よりいへば一つとして異なるものはない。我といへば乾坤只一人で、外に同じきものは一つもないが、人といへば地球上十五億萬皆なこれ同一である、同一の人にして別個の我、別個の我にして同一の人である。我であるから人でないことはなく、人であるから我でないさいふことはない。これ唯だ人の上に就ていふのみではない、更らに此の考察を廣めて動物といひ生物といふに至ては、天地同様宇宙一體、我と物と何の異なる所はない。試に眼前の茶碗を見よ、茶碗と我とは何の似る所もないやうであるが、此の茶碗の體はこれ土、我は土に養はれたる米を食ひて生存す、されば米は我母にして土は米の母たり。これこの茶碗我が祖母たる土によつて作らる。然らばこれ我れと最も近き親戚の關係を有するのではあるまいか。哲學者は之れを名けて萬物一體の理さいふ、萬物は音に其の體に於て同一なるのみならず、其の用に於て相互に密接不離の關係を持つて居るのである。我が此の書を稿するの筆は此の書とは密接の關係あることはいふまでもない、既に此の書と密接の關係あれば此の書の讀者とは亦不離の關係があるのである。假りに此の筆を以て兔毛に成れりさせよ、然らば野山に遊ぶ兔と此の書の讀者とは不離の關係があるのでないか、此の兔は草を餌にす、此の草は太陽の

一部分
宇宙の
個人

實在の風光

相關の理

光と地の土さによつて養はる、此の太陽の光と其の地の土さは、次ぎから次ぎへ考察して行けば、宇宙萬物が互に密接不離の關係を會得することが出来る、更らに我が身に直接なるものに就て考へよ、衣も食も住も他人の力に由り、自然の助を受く、我を主として考へば、萬象は悉く我に向つて働く如くに感ずることが出来る。これを萬物相關の理といふ、萬物互に密接不離の關係あり、されば我が一舉一動は直に宇宙全體に影響する大事業ではないか、能く此の理を了解する時は我が身の微小なるを慨くの要はないのである、微小なりと雖も、我は天地の一員にして宇宙の一部たり、しかも其一舉一動は直に全宇宙に影響し、其の存否は直に宇宙の完不完に關するのである。曾ては我が身の微小なるを嘆じたる吾等も學理の此の説明によつて此の身の偉大なるを感ずるのである。(求道の精神)

宇宙に於ける覺悟

- 即ち吾等は初めに宇宙の現象を看取して、
- 一 空間的に個々別々たり。
 - 二 時間的に變化生滅あり。
 - 三 空間的に平等一如なり。
 - 四 時間的に不變永劫なり。

と感ぜ、更らに此の現象と本體とが別個の存在にあらずして現象即本體たるを見、

- 五 空間的に微小なる吾等も直に無限の宇宙の一部分にして其の存否は宇宙に影響し、
- 六 時間的に變化ある吾等も直に悠久なる天地に繋りて其の連鎖たり。
- 七 而して個々の事物は相互に關係して渾然一體を爲す。

を悟得したらんには、曾て其の暗黒面のみを見て悲觀したりし吾等も此に一道の光明を見出すにあらずや。殊に況んや、此の宇宙は秩序整然として一絲を紊さず、自然の大法は嚴として一點の私なし、至公至平、各其の守る所を守りて毫も相侵さず、火は必ず焼き、水は必ず濕し、地は堅固、風は動搖、千歳の翠を湛ふるの巨松は、老龍の蟠屈するが如く、雲を凌ぐの古杉は直立傑士の風あり、柳緑花紅、山高水長、皆おのづからなる姿ありて、しかも各々其の性を操持し、其の相融するに至てや、

一性圓かに一切の性に通じ、一法偏く一切の法を含み、一月普く一切の水に現じて一切の水月一月に攝す。

(永嘉大師)

相即相入無盡に影響して調和融合の趣を示し、

十方大地是れ我が一個身、十方衆生是れ我が一個漢。

(宏智禪師)

たり。妙と云はんか、未だ盡くさず、幽と云はんか、未だ中らず、靈と云はんか、未だ足ら

實在の風光

至公至平

言語不到の境

ざるを覚え、玄云はんか、未だ得ざるに近し、理智を推しても尙ほ其の靈妙に驚歎せざるを得ず。之れに施すに情感の色彩を以てせんか、吾等は實に幽玄なる宇宙の懷に抱かれつ、あるなり、宗教家の目して久遠の佛陀さひひ、全能の神さひふものも亦暫く此の言語不到の風光に命名したるに外ならじ、冷やかなる理眼に映じても、自然の法則が微に入り細を悉くし、普く行はれ、廣く通じて誤ることなきは何人も少しく心を止めて諦觀したらんには肯ひ難きことにあらず。されば實驗以外に何等の眞理なしと公言する科學者も、「學ぶこと益々深くして宇宙の意匠の益々密なるを證明せずんばあらず」と云はざることを得ず羅馬のセネカは、

假令宇宙の徳に何等の敬意を捧げずとも、其の千萬無量の光明を見、又其の行程と變化とを見んか、何人が驚異と崇敬とを以て天を仰がざらん。

と、溫き情致を以て見ばらウオルツウオルスが、

極めて微かなる花にも、涙に餘る幽邃の思想を與へざるものなし。

といへるが如き美はしき意義を認めざるを得ず。東坡が、

溪聲便是廣長舌、山色無非清淨身。

といへるも亦詩人特殊の視察にあらずして、露伴が「天うつ浪」に、

詩的感想

山河、下に布ける此の天地の大にして大なるをおもひ、萬年萬々年の前に、萬年萬々年あり、萬年萬々年の後に萬年萬々年ある此の歲月の久しくして久しきを思ひ、さて此の天地の立てる所以をおもひ、歲月の經る所以をおもひて、此の天地と歲月との存在を、たゞ無意義なる事實のみと認めなば誰かは味氣無き感に撲たれて悲み傷まざらん、されど此の天地と歲月との存在の眞に無意義の事實のみならず、其中に意義あるなりと認むる時は、誰かは乳房を探り得たる嬰兒の如く無限の喜悅に胸を躍らさざらん、意義あり、意義あり無意義ならず、神の御心即ち意義なり、佛の御心即ち意義なり、化醇の大法はこゝにあるなり、歸善の定數はこゝにあるなり、大慈の光明は柔かに山村水郷を包めるなり、大慈の音楽は斷ゆる聞もなく、古往今來に互へるなり、我は此の溫暖き意義の中より生れたる子なり、神の子なり、佛の子なり、正眞の子なり、我と神佛とは血の相通へるなりと、如是思ふ時、おのづと悦ばしからば……

さあるはこれ吾等の論議を美はしく云ひ現はせるものなり。實在の風光を看取して此に至る吾等抑も何の不安あかるべき。吾等の宗教はこゝに在り。

四、宇宙の大道

宇宙の大道

一元的傾向

機械論
と
目的論

宇宙の萬象個々同じかざらるは何人も看取する所にして、其の本體の歸一すべきも亦多く疑ふものを見ざれど、其の歸一の根底を物質に取るものと精神に置く者との差は唯物唯心の二論となりて各々見解を異にせしが、兩者共に全楯の一面を見たるのみにして未だ其眞趣を穿てるにあらず。兩者を兼ねんとしたる物心二元の論は頗る便宜なるが如しと雖も、物心合一の本相に違却せるが故に、思索の進歩は之れを許さず、近世に至てはスピノザの汎神的一元論となり、バアクレール、ヒュームの觀念論となり、ラメトリー、ボルバツヒの唯物論となり、フイヒテの主觀的唯心論となり、シェリングの客觀的唯心論となり、ヘーゲルの絶對的理想論となり、一元的傾向は終に物心の二元を包含して洩さざる渾一の實在を見ることに努め、其の本位とする所の物質にあるもの（ヘツケルの如き）精神にあるもの（パウルゼンの如き）の差ありと雖も、要は宇宙の本體を以て全一なりとせざるはなく、其の活動を論ずるに於ても唯物的傾向の論者はこれを機械的のものなりとせしめて、何等意匠の其間に伏在するにあらず。宇宙は無目的に動き必然に働くとし、唯心論的傾向を有する論者は、無意識的盲目的なる活動を見ずして、目的あり意義ある活動なりとす、前者は之れを機械論といひ、後者は之を目的論と呼ぶ、此二者は往古に於ては相反するものとして觀察し來りしが其の究竟目的の所在に於ては此の二者必ずしも調和せられざるにあらず。蓋し宇宙の究竟目的を論ずる

超絶的
目的論

ものに二種あり。一は超絶的目的にして、こは宇宙以外に宇宙の支配者即ち神なるものありて其の意匠によりて活動するものとし、萬物を以て神の意匠に成り、天地を以て神の攝理に出づとす。されど此の論は合理的の思索と相容れず。吾等は既に宇宙の無限にして絶對たることを見たり。宇宙既に無限なりとせば神抑も那邊に在る、宇宙の外にありといへば宇宙は神に制限せられて絶對なる能はず、神は宇宙に制限せられて全能なる能はず、絶對なる能はずとすれば宇宙の義に反し、全能なる能はずとすれば神の義に背く、超絶的目的論は終に何等の論據を得る能はず、此の超絶的目的論に反して宇宙内に神あり、宇宙其自身に目的ありとするものを内在的目的論とす、内在的目的論は自然即ち神の顯現にして參差たる萬象皆これ神の面影ありとし、宇宙即神の説を立つ、超絶的目的論は一神教徒の喜ぶ所にして、内在的目的論は汎神教徒の賛する所なり。機械論と調和し得べきは此の内在的目的論の見地なり。拙著「宇宙論」にいふ所を繰返さしめよ。

内存的
目的論

これを客觀的にいへば自然現象は悉く一定の法則に従ひ、機械的に活動して何等の目的なきが如しといへども、主觀的に觀察せんか、一草一木も亦目的なしに成立したりとは爲す能はず、植物は機械的に發育し生長すべし。然れど吾人は之を以て全く無意味なりとは解する能はず、吾人は生れて而して死す。其の間一日も自然の機械的法則を無視する能はず

宇宙論

ず、然れども吾人は如何に思考するとも吾人の一生を以て生より無意義に死に達する機械
木人の如きものなりと解する能はず。吾人の生活は一切自然の法則に支配せられ、同一の
結果を生じ、全然機械的活動あるべきも、吾人は吾人の生存を以て無意味なり、因より果
を生じ、果は因となり、因は果となるのみにして、何等の究竟目的なしとは爲す能はざる
なり、即ち或は目的に達せんが爲めに活動しつゝ、ありと思惟せずんば止む能はざるなり。
路を行く人を以て唯だ機械的に前足と後足を交替せしめつゝ、ありと吾人の思惟せんと
欲して能はざる所にして、其の必らず達せんとする目的地あるを豫想するは人心自然の趨
勢にあらずや。吾人は實に其の一生を因果の無意義なる相續を以ての活動なりとは思惟す
る能はざるなり。これ豈に僅に吾人人生に於てのみいふものならんや、廣く萬有相互の關
係を視察せよ。まことにフオン、バエールのいへる如く、動物は植物なくんば生存する能
はず、植物は又土壤によらずんば生存する能はず、而して其土壤も亦しばしば雨によりて濕
潤せられざるべからず、而して其の雨は水の水蒸氣となりて上騰し更に寒冷の空氣に遇ひ
て凝結したるに外ならず、而して此の水の水蒸氣なるには太陽の熱を要するものなれば
一莖の草といへども、其の實太陽系の排星運動に由るにあらずんば存在する能はず。全宇
宙は此の如く齊整せられ調和せられつゝあるなり。これを如何ぞ偶然の結果なりと思考し

宇宙の
齊理

得んや、イムマミエル、カントは「有機體の組織を理會するには目的の觀念を離るべから
ず」といひて、すべての有機體が自己の中に或る目的を有することをいひぬ、宇宙は彪然
たる有機體なり、吾人の一隻の眼も、一肢の手も、これを組織せる各部分は全體をして其
の目的を遂げしむるが爲めに綜合したるに外ならずして、其の眼や手も亦其の全部身體の
目的の爲めに動く身體にあらずや……

吾等と宇宙とは全と分との關係なり、分たる吾等の行動はこれ悉く全たる宇宙の目的に従
順せんとするにはあらざるか、吾等が第一篇第四章に於て論じたる自由意志と必然の理法と
の見解は移して以て此の論の説明に充つべし。吾等は必然の理法に縛らるゝ雖も、尙永へに
自由意志の伏するあるが如く、宇宙の活動は機械的なるべきも、其の裏面に究竟目的の存す
るは吾等が思索の然らざるを得ざる所なり。されど其の究竟目的の如何なるものなるやは、
事吾等が経験以外に互るが故に追尋するに難しといへども、僅かに示されたる経験の範圍を
以て之れを見るも單より複に粗より細に進化の大道を辿りて歩みつゝあるや疑ふべからず。
殊に人文發展の徑路を回顧せんか、時に興廢隆朽の跡なきにあらずりしも、大體に於て其の
智識は進歩し、其の趣味は發達し、其の道念は向上して歩々眞善美に近づくつゝあるは歴史
の實證に照して否むべからず。人は宇宙の最も進歩せるものなり。人の理想はこれ最も宇宙

宇宙の
理想

道は
何ぞ

老子

ロゴス
菩提

の目的に近きものにあらずや。否な吾等は此の理想を以て宇宙と脈絡貫通せる本然の要求とし、天の命なり神の心佛の性なりと思惟し、此の性に率うて宇宙の大道を顯するを以て人類の本務なりと信ず、見よ、宇宙萬象の個々分立して各々其の守るは吾等に正義の守るべきを示すものならずや、其の同一調和して圓融無碍なるは吾等に仁愛の美德を教ふるものにあらずや、誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なり、道豈遠きにあらむや。大道脚下に横はり、靈光心裏に宿る、永嘉大師はいふ、

至道無難、唯嫌^ニ^ニ煉擇、但莫^ニ憎愛、洞然明白毫釐有^レ差、天地懸隔。

と、洞然明白たる宇宙の大道、老子は之れを、

道の物たる唯恍唯惚、恍たり惚たり、其の中、象めり、恍たり惚たり、其の中、物あり、窈たり冥たり、其の中、精あり、其の精甚だ眞、古より今に及ぶ。

といひ約翰傳に、

太初に道ある、道は神と借にあり、道は即ち神なり、この道は太初に神と借にありき。萬物は之れによりて造らる、造られたるものは一として之れに由られしはなし。

と、いへる道即ちロゴスなるものも亦大道を指すに外ならざり、佛教は梵語の菩提 (Bodhi) を譯するに此の語を以てし、無上正等覺又は無上正偏智ともいひて、性體周遍妙用無碍なる宇

平常心
是道

宙の靈光とし、これを感じて自己と一致するを以て佛陀と名く。教に深淺、説に高下の別ありといへども、宇宙の本體、自然の妙用を指すに至ては多く異なるを見ず、既にこれ宇宙の大體、自然の妙用なり。眼前耳後、何の處か道ならざるべき。昔、僧あり、趙州に問ふ、道何の所にかある、州曰く塙外底と、塙外に道あるは其僧も亦之れを知る、故に曰く那個の道を問はず。州いふ、那個の道をか問ふ。僧曰く大道。州いふ、大道長安に通ず。大道坦々、長安の帝都に通ず。言ひ得て妙なるにあらずや。別時、僧あり、又趙州に問ふ、如何なるか是れ道と、州いふ、平常心是れ道と。此の語、喝破し得て痛快、脚痕下を離れて何の處に道あり、平常心を離れて焉ぞ道を求むべけん。

はりつたふ鼠の道も道なれど

(行誠上人)

至誠

まことの道ぞ人のゆく道

至誠以て宇宙の歸趣を諦觀し、至誠以て天地の妙用に隨順す、これ吾等が道を求むるの筈諦にして、道を行ふの要義なり。覺錢上人の、

圓寂、外には求むまじ、我等が眼の前にあり。

佛身、遠くまします、衆生本有の悟なり。

とあるものは是れ。吾等は此の根底によりて人生の本務を演釋し來らざるべからず。

宇宙の大道

個人と社會

宇宙は調和の理法によりて無盡に渾融せられ、社會は共同の生活によりて圓滿に組成せらる。人は此渾融せられたる宇宙の一部分にして圓滿せられたる社會の一員なり。まこと社會は個人によりて成るも、個人の生存は社會によりて初めて完備せらるゝものなれば、如何に獨立獨歩他の補助を仰がすといふものも、孤立しては其の生命をだに維持する能はじ。其の衣する所のものも、の食ぶ所のものも、其の住む所のものも皆な他の力に頼らざるべからざるにあらずや。汝の手にする所の箸は之れ汝の造りたるものなるか。汝の足に穿つ所の靴は之れ汝の造りたるものなるか。其の中の一物だも尙ほ自らすること難し。よし茲に技巧の人ありて其の一は敢てすといふことも、其の材、其の料は之れ他によりて得、其の敢てすといふ方法は亦他によりて學びたるものにあらざるか、人は畢竟社會を離れて生存する能はず既に社會を離れて生存する能はず。吾等は實に共同生活の恵みに浴して漸く其の露命を繋ぐに外ならじ。然らば吾等も亦此の共同生活に向つて何等か貢献する所あつて他を利し人を益するの行なかるべからざるは當に然かあるべきの數にあらずや、自ら他より利益を享受して何等他に施す所なくんば、共同の理に背き、調和の律に反す。調和といひ共同といふものは

人と人の調和と
人道の本義

自は他を助け、他は自を補ひ、初めて成立すべし。由來道德の根底は人と人の調和を企て此の共同生活を圓滿にするにあり。儒教の仁を以て道本とし、基督の愛を以て教源とし、佛教の慈悲を以て傳道の主眼とする、其の名異りも雖も其の實は一にして、基く所は宇宙の大道にありて、古聖先賢敢て其の見を異にせざる人道の本義此に在り。

此の利他を教ふるに二方面あり、一は積極的に他を利するの行動にして、他は消極的に他に不利なる行爲を敢てせざるにあり。他に不利なるを行はざるは自ら操持する所堅く、非を防ぎ惡を止め、規律を嚴守して犯さざるの謂にして、他を利するの行爲は博愛、慈悲、親和、協力、常に同情の念を以て他に接し、一舉一動、人を益せんことを計るにあり。其の積極的なるものを布施といひ、消極的なるものを持戒と名く。太陽の赫々として光熱を吾等に施し、水の潺々として濕潤を吾等に與ふるは布施にして、柳絲花紅、各々其の守る所を持して相犯さざるものは持戒の相たり。吾等も亦積極的に相助け、消極的に相犯さずして社會の共同生活に貢献する所なかるべからず、これ宇宙の理法、社會の常相より來る人生の本務なり。

此無盡に行はるゝ調和の理法、此の無限に現はるゝ共同生活の實は、空間的に行はるゝのみならず又時間的にも不斷に行はれ無窮に現はる。汝が今日是の如くにして存在し得るの共同生活の本務

祖先の
恩澤

同生活の恵に存するは既に之を云へり。されど唯だこれのみが汝を幸にするにあらず、實に汝の今日ある汝の祖先が汝に遺せる恩徳にあらずや。人の世に在る僅に百歳に足らずと雖も、此の百歳に足らざる人々が諸種に企畫し、諸種に施設したる文明の惠澤は、子孫より子孫に受け來りて以て今日の盛を致す。吾等の今日の生活は前代人類の苦心焦慮の結果たるや疑ふべからず。然らば吾等も亦此の社會を今一層完全に、今一層善美にして之れを吾等に續く後代に引き渡すべき責あるにあらずや。進歩は宇宙の徑路にして。向上は人類の理想なり。歩々、進歩の徑路を辿り、着々向上の理想を實現するは吾等が正に爲すべき當然の任務なり。歩手しばし左の譬喩を以て人生を説明す。事陳腐にして理や明晰。

人生譬
喩

人生猶ほ旅客の如きか、夕に宿して朝に出づ。五十年の夢、忽ち覺むれば、身は已に他境の客となる。光陰はまことに百代の過客にして、人生は逆旅の如し。

いづくをも定めなき世と知りぬれば

家をもたびのこゝちこそすれ

既にこれ前代より後代に達する一旅舎、吾等の社會は吾等の宿舎なり。其の共同生活を助け、進歩向上を計るものは此の宿舎に拂ふの賃錢にあらざらんや。若し夫れ此の社會に生息して何の爲すなく、此の宿舎に泊し、何の貢獻するなくんば、これ則ち無錢飲食の徒の

み。(人生觀の一節)

吾等は空間的に博愛仁慈ならざるべからざると共に。又時間的に勇猛精進ならざるべからざるの所由茲に存す。日々、日は東より出で、怠ることなく、夜々、月は西に沈みて倦むことなし。斷ゆることなき水の力の能く石を穿つが如く、吾等が不斷の努力、豈に又天地の化育を助くるに足らざらんや。

生存の
意義

かくて、社會の共同生活を助け其の進歩發達を計る所に人の人たる道あり。以て宇宙の大道を體現す、此理を等閑にしては人生の眞義終に解すべからず。吾等抑も何の爲めに生く、生きんが爲めに生くることも死するの時あり。必然來るべき死を豫想しつつ、而かも生きんが爲めといふ、これ無意義なり。吾等は生きんが爲めに生くるにあらずして、道を行はんが爲めに生くるなり、道にして行ひ得べくんば車夫馬丁と雖も、我喜んで之れを爲さん。道にして行ひ能はずんば高位大官と雖も、我に於て何かあらん。人は一個の小天地なり、以て天地の化育を實行すべし。人は一個の小宇宙なり、以て宇宙の大道を體現すべし。生死も關する所にあらず。況んや利害得喪をや。生きて以て道を行ふべくんば我即ち生きん。死して以て道を行ふべくんば我即ち死せんよし事、志と違ひ、道未だ行ふ能はずして斃るゝとも、吾、我が世に居れるの間、盡くすべきを盡くし爲すべきを爲す、何の恨む所かあらん。吾等は此

道を行
ふ

人生の本務

勇の二種

に安意の境地を得、此の勇奮の趣味を感ず。
 勇に二種あり、積極的に發奮向上するを精進といひ、消極的に堅忍不拔なるを忍辱と爲す。池塘の能く水を貯ふるが如く忍は能く勇を貯ふ。唯だ進むを知つて守るを知らざるものは眞の勇にあらず。眞勇は此の二を兼ねざるべからず。而して先きにいふ所の仁、今いふ所の勇共に其の爲すべきを爲し、爲すべからざるを分ち、守るべきと守るべからざるを知る、之れ沈重なる思慮と明敏なる觀察とに待たざるべからず、沈重なる思慮は智の消極的方面にして、明敏なる觀察は其の積極的方面なり。前なるものを禪定といひ、後なるものを智慧といふは佛家が常套の分類にして、仁と勇とに此の智を加へて三徳と爲すは、古來東洋に慣用し來れる道義の根底たり、之れを人心の三方面に配すれば、智は智、仁は情、勇は意にして、此の三は實に道を行ふの要具なり。

三徳



三毒

而して此の明敏なる觀察を妨ぐるものは迷妄愚痴の見解なり。此の沈重なる思慮を妨ぐるものは動搖散亂の心なり。此の博愛仁慈を妨ぐるものは慳貪我欲の心なり。此規律の遵守を妨ぐるものは放埒破戒の心なり。此の勇奮向上を妨ぐるものは懈怠の心にして、此の堅忍不拔を妨ぐるものは瞋恚の心なり。蓋し愚痴と散亂とは痴に基き、慳貪と破戒とは貪に出で、懈怠と瞋恚とは瞋に發す。此の三は三徳の明を蔽ふの妄雲にして、本務遂行の前程に横はる毒蛇たり。之れあるが爲めに遲疑し、之れあるが爲めに懊惱す。此の三毒を打破して共同生活の美を發揮し、進歩發展の實を擧げしむるもの資に道義の根底たり。

第二章 國民道德

一、東西道德の比較

道義の根底は萬古不易にして宇宙の大道は素と方所を絶つと雖も、個人は社會を離る、能はず、社會は又個人を離る、能はざるこそ上來縷述する如きが故に、其の共同生活の美を發揮するに於ても、社會狀態の異同は直に道德に關係し、甲の社會に於て可とするもの直に乙

社會狀態と道徳

東西道德の比較

時代と
道德

階級的
の道
徳
無階級
的の道
徳

義務本
位と權
利本位

の社會に應用すべからず、君主專制治下の道義は直に移して共和政體の國家に充つる能はず、其の進歩發達を計るに於ても、時代の推移は直に道德に影響して、丙の時代に於て賞すべきもの、必らずしも丁の時代に賞すべきものにあらず、野蠻時代の剛健主義如何に可なりとも何の變ずることなくして之れを今日の文明時代に適用する能はず。所詮の歸趣は個人を満足せしむると共に社會を満足せしめ、社會を發展せしむると共に個人を發展せしめて歩々理想の實現に向ふべきなれど、國、異にして制度同じからず、時、異にして習俗一ならず、右よりするものあり、左よりするものあり、風土に支配せられ歴史に左右せらる。暫く東西兩洋の道德を大觀するに、東なるものは差別的階級的にして、君臣義あり、父子親あり、長幼序あり、夫婦別あり、名を立て教を行ひ、上下の別を判然にし、上は慈、下は順なるべしとす。鉛垂線的なる縦の道德を主眼とし、忠臣、孝子、貞婦を以て其の模範とするに反し、西なるものは平等的無階級的にして、人類等しく神の奴婢たり、同等の權利を有す。君といひ臣といひ、父といひ子といひ、兄といひ弟といひ、夫といひ婦といふ、假りの世の假りの區別に過ぎずとし、唯だ愛を以て普通の道とし、水平線的なる横の道德を要とし、民權擴張自由鼓吹の志士を以て龜鑑とす。されば前者は服従の精神に富むも、因循の風を脱せず、後者は獨立の氣象に富むも、從順の美を缺く、一は義務本位にして、他は權利本位なり。義務

家族本
位と個
人本位

家督相
續と財
産相繼

本位なる道德には正義の觀念薄くして、權利本位なる道德には忠孝の思想疎なり。我に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ。と絶叫したるパトリック、ヘンリーの聲は西洋思想の權化にして、臣敢て股肱の力を竭し、忠貞の節を效し、之に繼ぐに死を以てせん。といへる諸葛孔明の言は東洋道德の典型にあらずや。更に他の方面より兩者の道德を比較すれば、一は家族本位にして、他は個人の本位なり。服従に富む東洋道德は家族本位にして、長を尊び幼を慈み祖先の祭祀を斷たざるを以て子たるの道とし、家の爲めに個人を犠牲に供するを辭せず、獨立に富む西洋道德は個人本位にして、夫婦の愛は之れを云ふも祖先敬慕に於て足らざる趣あり。されば其の相續法に於ても東洋は家督相續を用ひ父は子に其の家を譲り。子なきものは他人の子を養ひて家名を維持する事に努め、西洋は遺産相續を用ひ、死後の財産を指定の相續人に譲りて又家名の繼承を云はず其の他瑣末の點に至りては兩者趣を異にするこゝ一にして足らず、これ皆風土人情を異にし、歴史宗教を同うせざるに由るものにして、各々長あり、短あり、未だ遽かに一を擧げて他を貶する能はざれど、其の長を採り短を補ひ、渾然圓融、以て新時代の新道德を組成すべきものこれ東西文明の融合地たる我が日本國民の責務にあらずや。

同化力
儒教

佛教

されど土壤、肥沃ならざれば花木長ぜず、我が日本は果して新道德培養の素地を有するか靈妙なるは我が國體の精華にして奇態なるは我が國民の性情なり。皇室を中心として四海一家の如く、祖先に奉事するの心を以て、皇室に奉事し、忠孝一致、億兆未だ曾て其の道を二三にせず。支那の儒教入りて此の精華を培ひ、印度の佛教入りて其の根底を養ひ、支那流なるものも、印度流なるものも、一たび來つて我が蜻蛉洲裡に入るや、悉く我が中心思想に同化せられ、儒教に附隨したりし革命の風は我が國を侵さず、先覺の士、早くも、

(菅原道真)

凡そ神國一世無窮の玄妙に致て窺ひ知るべからず、漢土三代周家の聖經を學ぶも雖も、革命の國風深く思慮を加ふべきなり。

さいひ、世界的なる佛教の教義も國家的となりて王法擁護を以て主眼とし、鎮護國家といひ興禪護國といひ、

(蓮如上人)

佛法をもて王法をまもり、王法をもて佛教をたつること、鳥の兩翅、車の兩輪の如しと心得て、よくよく佛法王法ともにかけみちなくまもるべきこと。

と示し、一千有餘年、儒佛の二教は相待つて國民の道念を培ひ、此に爛漫の美を呈し、

數島のやまごにしきに織りてこそ

(光格天皇)

西洋道徳

外來の道徳を皆我が數島の和錦に織り成せる、これ豈に東洋道徳のみならんや。維新以後、西洋の思想滔々として我が國に入り、其の平等的無階級的なるものは我が國民に活氣を與へ其の權利の思想は自覺の念となり、個人本位の道徳來るも亦舊習を存し、其の取るべきを取つて棄つべきを棄て、西洋道徳の支配者たる基督教も亦漸次日本化して今や我が日本は一切の文明を悉く自家の藥籠中のものとし、此に新道徳を組成するの氣運に接し、曾ては我に物質文明を貢獻したるの西洋も亦其の精神的方面に於ては我に求むる所あらんとするものあるにあらずや、近時歐米に於て日本研究の聲盛んに、我が特長たる武士道も亦研鑽せられんとするの傾向を生ぜるもの偶然ならんや。

宇宙の大道方を絶し、道義の根底は萬古不易なりと雖も、國、各々情を異にし、時も亦其の趣を一にせず、幸に吾等は此の日本に生れ、此の氣運に遇ふ、先づ我が國民道徳の標準に遵據して大體の體現に向はざるべからず、況んや我が國民道徳の標準は獨り東洋の一孤島たる日本民族のみの小範圍に行はるべきものにあらずして、直に宇宙の大道と密邇せるものあるをや。何をか國民道徳の標準といふ、他なし、明治二十三年十月三十日に下し賜へる教育勅語即ち之れなり。

同化の標準

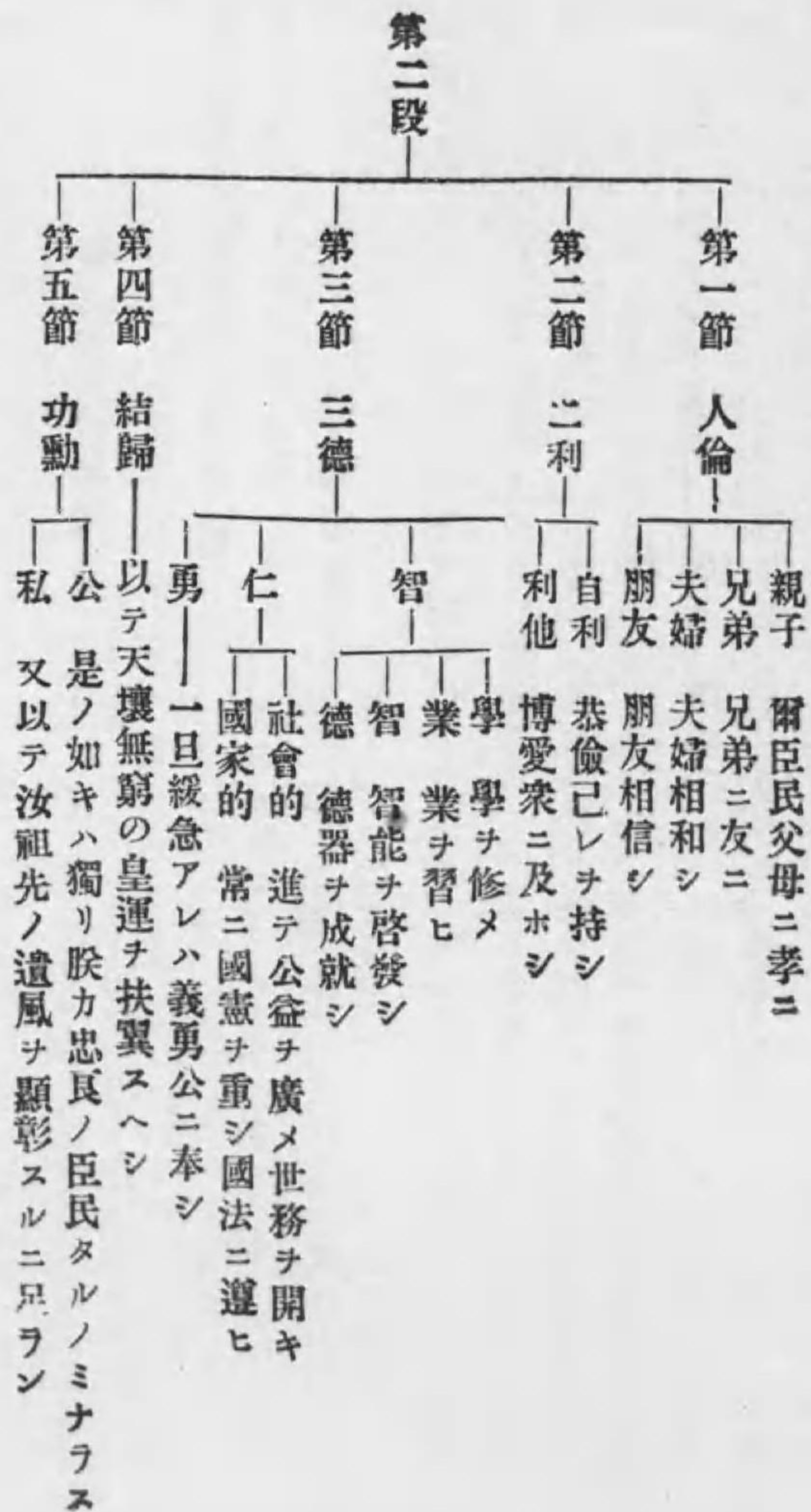
二、國民道德の標準

教育勅語は我が國民道德の標準にして、然かも亦時間的に古今に通じて謬らず、空間的に中外に施して悖らざる宇宙の大道を示現し、道義の根底を説明したるものなり。大内青巒氏曾て科段を分ちて其の主旨を顯揚せらる。科段的確、能く聖旨を領得せしむ。即ち分ちて三段とし、第一段は經、第二段は緯、第三段は結、第一段を以て君臣の大道とし之れを三節に分つ。

解勅語圖

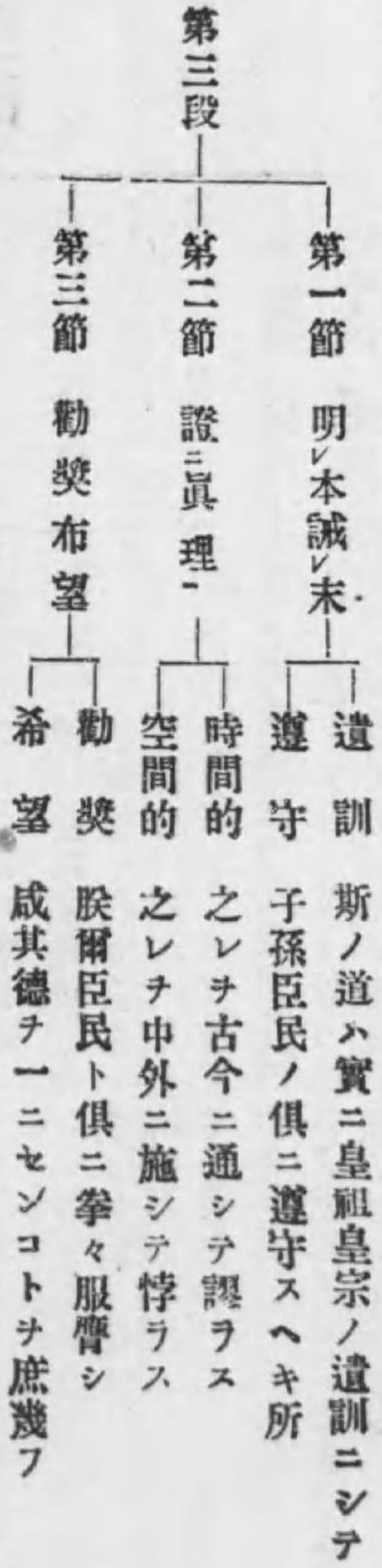


第二段は之れを臣民道德の要旨とし之れを五節に分つ、



國民道德の標準

第三段は前を承けて其の宇宙の大道と一致するの眞理なることを明す。



予曾て此の科段に基きて勅語を講究し以て童蒙に便したるこゝあり、左に掲げて國民道德を論ずるの資とせん、

第一段は君德臣道を明にせられたもので、皇祖皇宗とは 天皇陛下の御先祖を申し上げ奉るこゝで、我が日本は外國と事異り、長くも天祖天照大神の三種の神器を天孫瓊々杵尊に下したまひ、「此の葦原の千五百秋瑞穂の國は吾が子孫王たるべきの地なり、爾、皇孫の命、就まして治しめせ、寶祚の隆なるこゝ、天壤と與に窮なげん」と仰せられしより彦火火出見尊、鸕鷀草葺不合尊まで三世の間、高千穂の宮にましまして德を積み仁を累れたまふ、鸕鷀草葺不合尊の御子神武天皇に至りて東征を企てたまひ、終に群賊を平げて大和の橿原

天壤無窮

歴代の聖德

の宮に帝位に即き、こゝに宮室を造營したまふや。詔して、「上は乾靈の國を授けたまひし德に答へ、下は皇孫の正を養ひ賜ひし心を弘め、然して後に六合を兼ね。以て都を開き、八紘を掩ひて宇さなさんこまた可ならずや」と宣ひ、皇德八紘に振ひ、聖子神孫相繼で東は蝦夷西は熊襲を平げ、三韓もた亦其の稜威に服するに至り、爾來一系萬世、千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすも長へに變りなく、神武、國を建てたまひしより二千五百六十年、百二十有餘代の天皇、皆な臣民を憐みたまひ、仁德天皇は高き屋に登りて民の庵に烟なきを悲みたまひ、醍醐天皇は寒夜に御衣を脱して民の痛苦を懐ひたまひ、後鳥羽天皇は、

夜をさむみれやのふすまのさゆるにも
わらやの風をおもひこそすれ
このたまひ、後醍醐天皇は、
世治り民安かれといのるこそ

わが身につきぬおもひなりけれ
さ仰せられ、歴代の天皇、悉く民を慈みたまひ、創業、守成相共に全く、君德の宏大なる實に筆にも舌にも盡くされぬのであります、殊に 明治大帝の御聖德に至つては、申すも

國民道德の標準